
No,Fate

彩斗レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No-Fate

【Zコード】

Z2258V

【作者名】

彩斗レイ

【あらすじ】

幼い頃に戦争で両親をなくした少年レディットは食べていくため学校にも行かず国民特殊警備団（以下：ギルド）働いてばかり。そのため、なんでもかんでも一人で抱え込みがちだった。そんなレディットはある日任務で行った塔でミヤビという同じ年の少女と出会う。二人は一緒に旅をするうちお互いを知り、変わっていく。運命の意味と意義を問うファンタジー！！

キャラ紹介プロフィール（前書き）

はじめに

こちらはキャラ紹介のプロフィールとなつております。

回を重ねて、秘密が明らかになることに、情報を更新していきます。そのため、各話に応じたプロフィールを追加情報としてのせたときに、ネタバレがある可能性があります。

その対策として、情報ごとに区切つてあり、その上に読まれる際の推奨話数を書いてあります。

それを確認してから、読んでください。

あとがきには特に何も書いていないので、安心ください。

ちなみに初期プロフィールは、第1話～と書いてありますが、1話を読んでからのほうがいいと思われる方もおられるかもしれません。

あくまでこれは、キャラのイメージを皆さんに付けてもらう、作品を更に楽しんでいただくためのものとなつております。

b yレイ

キャラ紹介プロファイル

キャラ紹介 プロファイル形式

EX : 1	フルネーム	6	好きな物、得意な事
2	身長	7	嫌いな物、苦手な事
3	体重	8	容姿の特徴など
4	家族構成	9	その他の備考
5	好きな色		

第1話

NO . 1

1 レディット・ギルバーツ

5 モノトーン系

2 173cm

6 特になし、家事全般

3 66kg

7 チーズ、人の気持ちを汲み

4 取る事

8 アッシュブロンドに緋色の目、

中性的な顔立ち

9 一人暮らしのギルドで働いている。17歳の少年。語学力は結構な物で、ドイツ語、オランダ語、英語、ロシア語、イタリア語、日本語の6ヶ国語を喋れる。体力もそれなり、視力は両目ともに6.0ある。一応主人公。能力は「炎」。

NO . 2

1 ミヤビ・センドウ

5 水色、藤色

2 164cm

6 お風呂、着物の着つけ

3 49kg

7 節足動物、お化け、感情表現

4 ?

8 髪の毛は日本人特有の闇色に瞳は赤

がかつた紫。

9 レディットと同じ年の少女。謎の場所に「封印」されていた。記憶喪失で、過去の事を全く覚えていないため、発見したレディットが保護者に。

NO . 3

1 コレイダ・オーファン 5 黒
2 165cm 6 特になし、情報操作
3 51kg 7 特になし、家事全般
4 夫のみ 8 茶髪に空色の瞳、見た目は20代後半

9 ギルドのアデルバ支部支部長。実年齢は44歳である。国立大学を首席で卒業した経歴を持つており、仕事は出来るが、家のことになるとだめになる。中性的な口調が特徴。

NO . 4

1 リース・エルモンド 5 ピンクなどの暖色系
2 164cm 6 ケーキ、お菓子作り、人の心を読める
3 ??kg 7 辛い物、普通の調理
4 妹、父、母 8 ピンクの髪に金色の瞳。上から8
6 57 88
9 レディットの新しい上司。20代とまだ若いが、頭は良いらしい。能力は「治癒」。ちなみに上の数値は特に意味はない・・・

NO . 5

1 口ゼット・サーペント 5 特になし
2 177cm 6 金属類、金属細工を作る事
3 70kg 7 木、プラスチック、裁縫
4 ? 8 青い髪に黒い瞳。体脂肪率4%

9 レディットの新しい上司。リースと同期で、共に働いている。
家では毎日かかさず筋トレをやっているらしい無口な青年。能力は
「メモリアハンズ」。
「記憶の手」。

NO . 6

1 クレヴァー・レンテル 5 白、銀
2 180 cm 6 銃火器、射撃
3 68 cm 7 價値のない物、近接戦闘
4 母親は他界 8 色素の薄い茶髪に緑の瞳
9 レディットの新しい上司。リースたちの一期下で、射撃訓練ではその実力を發揮し、満点をたたき出した事もある。優しい好青年 だが、時々冷たい態度をするときもある。能力は「ホーミング 追撃」。

NO . 7

1 ヘル・フォーゲル 5 とにかくカラフルな
2 158 cm 6 紙、折り紙などの紙細工を作る事
3 45 kg 7 孤独、長い間一人になる事
4 ? 8 オレンジの髪に空色の瞳
9 レディットの新しい上司。クレヴァーと同期一（年齢上）の女性で19歳。今は明るいが、実は暗い過去を背負っているらしい。ユレイダと同じ中性的な口調をする。能力は「クラフト 工作」。

13話)

フォーゲルの暗い過去について
ミヤビを部屋に招いたときに話した話。実は出生不明のフォーゲルは、ユレイダに引き取られた事により特務班が作られ、そのメンバーに。年齢的にはクレヴァーと同期だが、本当は一番先輩である。

NO . 8

1 ニーナ・エルモンド

5 姉に同じ

2 159 cm

6 人の弱みを握る事、心理戦

3 48 kg

7 特になし

4 姉、父、母

8 髪はピンクのウェーブロングに金色の瞳、眼鏡をかけている

9 レディットとミヤビの入学したマルフ学園の生徒会長を勤める女性。リースの妹で、一人と同い年だが、心を持つ能力を持つ彼女に対し、レディットは本能的に「さん」をつけてしまった。

レディットの過去と家族構成について

ミヤビが見たレディットの夢交換のときの記憶の断片。

場所や時間は不明だが、レディットは確かに母親と暮らしていた。

よつてレディットの家族構成に母親（過去）が加わる。

16話

6

NO . 9

1 ミステイン 5 白

2 140 cm 6 鬼ごっこ、いたずら

3 32 kg 7 素直に謝ること

4 ? 8 真っ白な髪の毛に紫の瞳、10歳ぐらいに見える

9 霧の立ち込める街中で出会った少女。実年齢は不明である。とても元気だが、いたずら好きな性格のため、これからレディットが困らされることも?

1 ミステイン

キャラ紹介プロフィール（後書き）

それでは本編へどうぞ

b yレイ

「運命」と呼んだ日（前書き）

初投稿です。素人なので文がまだまだ未熟で・・・でもどうか温かい目でみてくださいね。最初の作品はベタな感じで行こうと思つたんで新しく感じるものはないかもしれません。よろしくおねがいします。

「運命」と呼んだ日

「ねえ、運命って信じる?」

突き抜けるように青くて、どこか寂しげな空の下、少女が口を開く。
「ひとつだけ言わせて。私ね・・・あなたと出逢ったときから今までのこと全部、運命じゃないかって思うんだ。あの時あなたがあの場所に来たことも、私たちの力のことも、今口口にいることも、全部、全部だよ。」

「うん・・・」

今まで黙っていた少年が頷くと柔らかな笑顔をする。
二人の表情は穏やかだった。

自分たちが今いる絶望的な状況を知りつつも無視するかのように。
「なんでだろ・・・私、全然怖くない。」

「僕もだ・・・」

そう言うと少年は考え込むような顔をする。

「どうしたの?」

「・・・僕からもひとつだけ言わせてもらつていいかな。」

少年は搖るぎない瞳で少女を見つめる。「僕はね

「

時は仮想20世紀

50年前の大戦の爪跡は消えず、世界各地で残り火による紛争が絶えない世の中。

その少年はヨーロッパの一小国、シェダール王国にいた。

「チツ、これが転勤初日にやる仕事かよ。」

汚れまくった制服を着た少年 レティット・ギルバーツが砂を

払いながら舌打ち交じりに言い放つ。

働くには若すぎるよう見えてる年齢は17歳。

「仕方ない・・・」

そういうつてレディットは腰に差してある日本刀を引き抜く。
銀色の月の光が刃を光らせている。

そう、仕方ない。

今いる場所を考えれば。

今おかれている状況を見れば。

今ココに至るまでの経緯を見れば。

すべて不可解である。

ココは魔獸と戻だらけの謎の塔で。

戻にはまりまくり、魔獸に襲われ、迷子になり。

転勤初日にしてきなり任務に駆り出されたかと思えばこのやう。

「ハア・・・」

ため息をつきつつ、首を垂れながら歩いていた。

急に視界が開ける。

瞬間。レディットの体から今までの疲れがすべて吹き飛ぶ。

それは今まで以上に不可解な「景色」だった。

一面の銀世界。と思えば

満開の桜、燃えるような紅葉、青々と茂る草木。

それは昔任務で行ったことのある島国でみた「四季」というものだつた。

しかし、レディットの手を奪つたのはそんなものではなかつた。

それは広間のような空間の中央にある祭壇の上

奇妙な装置の中。そこには少女が「封印」されていた。

「あ・・・」

かすかに漏れる声。もう何が何だか分からぬ。

気がつけばレディットはその装置に歩み寄り、触れていた。
本能的に「触れれば開く」と感じ取つたかのよ。

すると装置を包んでいた周りのガラスのようなものが消え、その中

で浮いていた少女がゆっくりと降りてくる。

ひどく繊細な顔立ち、青がかつた黒い髪、閉じた目のある睫毛は瞬けば音を立てそうなほど長い。

すべてを見てレティックトは「かわいい」と思ってしまった。

そしてその頬に触れようとした瞬間。

「・・ん・・・」

少女の瞼がゆっくりと開き、赤に近い紫色の瞳と目が合つ。

二人の物語はココから始まる

「運命」と呼んだ日（後書き）

多分まだまだ続くのでどうか見捨てないでください。

bソレイ

気づくための an overture

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
けたたましいサイレンで目が覚める。

細胞一つ一つが目を覚ますのと同時にここ数日の記憶がよみがえる。

「・・・」

レディットは数日前、ギルド上層部の辞令で今まで勤務していた地元であるロレント地方支部からシェダール王国の首都であるアデルバ支部に異動となつた。

アデルバ支部は大きく、いくつかの部署に分かれて仕事をするらしいのだが、変わった仕事が多いといわれる「特務班」に異動になつたと聞いたとき、レディットはさすがに眩暈を覚えた。

さらに寄宿舎つきであることには感嘆であった。

おかげでロレント支部の時のようにわざわざ部屋を借りて家賃を払わなくてよくなつたので生活に余裕ができた。

早く起きすぎた気がするが初出勤で遅刻もまずい気がするので、ギルドの制服に着替え始めるところを思い出す。

時刻的に今電話をかけて迷惑ではないか心配だつたが番号を入力する。

電話のあいではルッカ。同じ年で超お嬢様（ていうか王女）なのにギルドに身分を隠して働いている。

レディットが自信を持つて友人と呼べる数少ない人間だつた。

三回目のコールがなり終わる前にルッカは出た。

『もしもし』

「もしもしルッカ？」

電子機器だけはこの国の物はとても発達して持ち運べる電話は画期的だつた。

『どうしたのレディット、こんな時間に？』

「君だろ。アデルバについたら連絡よこせつて言つたの。」

『おおお、そうでした。』

思い出したようにルツカが言つ。一国の次期女王がこれでいいのかと思わざるをえない言動なのだ。

『そう。今日だつたつ。それで、例の力を使うことはありそうなの?』

力 その言葉がレディットは好きではなかつた。

この世界で力を持っている人は少ない。全体の1000分の1程度だ。基本的には生まれつきの物なので「ないと困る」というほどの物ではないが、場合によつては特別扱いをされたりもするし、妬まれたりもした。

「なるべく使わないようにするよ・・分からぬけど・・・」

『そう・・まあ自分の力ぐらいは誇りにもちなよ。』

そういうと余韻もなしに電話が切れる。

あぐびを一つこぼし、ねぐせを直しながら相棒の刀を腰に差すと氣合が入る。

「よし、いくか

そういうつて寄宿舎のドアを開けると圧倒された。

昨日引つ越してきた時は夜中だつたため気づかなかつたが、幾千とテントが入るほどの広さの訓練場、四方を囲む鉄壁、何もかもが地方支部とは比べ物にならなかつた。

そんな広い訓練場の向こうにある本舎の支部長室に挨拶にいくのは骨が折れそうだ。

その後、得意の方向音痴で何度も迷いそうになつてフラフラになりながらも、なんとか支部長室に着いた。

息を吸い、複数の話し声のする支部長室のドアをノックする。

「どうぞ」

ドアの向こうから聞こえた声は女性の物だつた。

「失礼します」

一礼をして中に入ると三人の人間がいた。

奥の椅子に腰掛ける先ほどの声の主は、レディットのイメージしていたような大男ではなく、凜とした恐ろしいほどキレイな女性だった。

「ギルド、アデルバ支部支部長のコレイダ・オーファンだ」レディットにはコレイダが自己紹介することを嫌々やっているよう見えた。それもやる気がないのでなく、「支部長」という役職自体を嫌っているように見えた。「さて、君は本日付でアデルバ支部に異動してきたわけだが、それにあたり紹介したいのがそこの二人だ。」

そういうて今まで黙っていた二人を指し示す。

一人は男性で眉間にしわを寄せている厳しそうな人だった。

一人は女性で男性とは対照的に笑顔が眩しかった。

「ロゼット・サーペントだ。以後よろしく。」

男性が単調に挨拶をする。それに続いて

「リース・エルモンドよ。歳は近いみたいだね。」

二人の挨拶が終わるとすぐにコレイダが仕切る。

「この二人が君の直属の上司にあたる。以後よろしくしてやつてくれ。特務班のことは二人から後でするとして・・・何か質問は?」中性的な口調でコレイダが質問してくる。特に聞きたいことはなかつたがとりあえず聞いてみる。

「何故こんなに急な異動だつたのですか?自分には準備期間が一日しかなかつたのですが。」

今よく考えれば一日で準備が出来たのもすごいかも、とレディットには思えた。

「それについては私も知らされていない。すまないな。・・・他には?」

正直ギルドの立場上支部長より上の立場の人間がいることに驚いて何も思い浮かばなかつた。

「い、いえ・・・」

「ではこちらから質問しよう。わが国の防衛状況は?」

（よ、良かった・・・分かる質問で）レディットは心底ホッとした。
「はい・・シェーダールは現在、国際防衛を担当する軍、治安維持を
担当する警察、民間防衛を担当するギルドの三つの組織がそれぞれ
魔獣の駆逐、テロの防止、人命救助など様々な事に対処しています。
レディットは寿命が縮んだ気がした。

「よろしい。では二人と一緒に特務室に向かってくれ。」

気づくための an overture (後書き)

こんには 私は不定期投稿で、今日は一日に一回も書いたんで腕
が痛いです。でもまだまだ続くんで次回もよろしくおねがいします。

byレイ

「ね、支部長ってとってもキレイでしょ。」

そういうてリースが覗き込んでくる。制服の上からでは良く分からないが胸のボリュームがすごい、近づけられると少し圧巻だった。視線を無理やり釘付けにするその部分からがんばって目を離しながらレディットは答える。

「そうですね。今まで出会った女性の中で一番かも知ないです。」

「あら、私はキレイじゃない?」

レディットの答えに皮肉をこめたような言い方でくるりと身を翻しながら言ひ。

明るくて親しみやすいのはいいのかもしねないが若干サバサバしきな気もする。

「いえいえ。エルモンゴドさんもとても可愛いですよ。それに明るくて親しみやすいし。ああ、いい先輩を僕は持ったなあ。」

お世辞半分で褒めちぎるとリースが吹き出す。

「ありがとう。それと私はリースでいいわよ。他人行儀みたいのはあんまり好きじゃないし。」

「くだらない話してないで行くぞ」

そんな二人の会話に飽きたのか、親しげなリースとは真逆の態度のロゼットが割り込んでくる。

その部屋はとても広い本舎のさらに端にあった。

支部長室のような重々しい鉄製の扉とは違い、古ぼけた木の扉で、クオリティの低さはレディットの期待を裏切つたりする物ではなかった。

「さあ、入つて入つて。」

リース促されるまま、心中「よろしく」といつてドアを開ける。と、一瞬でそんな淡い期待は冷めてしまった。

見る限りは普通のギルドの仕事場。依頼を貼りだすボードもある。

ただ。

誰もいない？

（まさか・・・）いやな予感以外何もなかつた。

「そう、そのまさか、よ。」

（心を読まれた！）

「あら、当たつてたのかしり。」

レディットが分かりやすく動搖すると、リースがそれに気づいたのかくすぐすと笑う。「・・ええ・・・」ホン。ここで衝撃の発表をしますか。えつと・・・この特務班、君を含めて五人しかいません！

！

「はあ！？」

大分ショックキングだつた。まずそれで一つの部署として認められている事自体不思議でならなかつた。

「だつてまだ出来て三年しか経つていない、言つちやえば新米部署なんだもん。でも小さいからつて舐めちゃいけないよ。結構頻繁に依頼来るんだから。」リースはなぜか自慢げだ。「あ、そうそう。あと二人は今、泊りがけの任務に行つてゐるから、帰つてきたら紹介するわ。」

ロレント支部にも泊りがけの仕事はなかつた。

「話が長いぞ、リース。」ロゼットが焦れたように言つ。「そろそろ今日の依頼について話してやれ」

（依頼？初日から）

「そう。依頼。」また心を読まれた気がしたが諦める。「今日の依頼はテストみたいな物よ。内容は、この国の東にある『景色の塔』といふところの調査をしてほしいの。ここは最近、行方不明者がたくさんでてる。ギルドからの依頼だけ報酬は出るわ。それじゃ頑張つてね。」

そういうとリースはレディット一人を部屋から放り出す。もう眩暈がした。

「やつと着いた・・・」

レディットがギルドを出た時間は10時だったのに、もう日は傾きかかる16時だった。

改めて地図を見るとたつた100km程の距離だった。列車を使つたレディットなら2時間で着く距離のはずだったが、方向音痴はレディット自身直す氣がないので仕方なかつた。

「ここが・・・」

そういうつて目の前にある塔を見る。

「景色の塔」という割には、外觀はとても殺風景で、所々風化し、何階建てかが分からぬよう、窓は外に一つも着いていない。

「どこに『景色』の要素があるんだ?」

色々文句をたらしながら早く帰りたいレディットが塔に足を踏み入れた瞬間。

ガシャーン!

すさまじい音を立て槍が落ちてきた。間一髪でそれをかわす。

「あつぶね・・・」

どうやら人が落としたのではないらしい。

砂埃立つ中、よく目を凝らすと人らしき物が槍の横に倒れている。脈はないがまだ体温が残つっていた。どうやら最近死んでしまつたらしい。

さらに周りを見渡すと罷らしき物に引っ掛けたのか、5~6体程度の死体が転がつている。

入り口付近をレディットが捜索していると、またさらに何か降つてくる。

椀状に凹んだ着地点の中央にいるのは、明らかに人ではない。

「魔獸だと・・・!」

魔獸とは大戦時の核兵器の影響で一匹の狼が突然変異を起こしたのが元凶とされる、今までになく凶暴化した動物のことと、通常は軍やギルドが駆逐するはずなのだが残つているということはこの死体

は・・

そんなことをレディットが考へていると魔獣が襲つてくる。

「くつ・・・！」

初撃をかわしたレディットが刀を抜き、肩口から切りつけるが、火花を散らしはじかれる。

通常の武器で殺せないといふことは、この地域で独自の変化を遂げた「新種」なのだろうか。

そんなのがいるとルッカに聞いたことがある気がしたが、全然覚えていなかつた。

「はあ・・・」

ため息をつきながら、手に力をこめる。体中にほどばしる痺れるような熱を手に集めると、レディットの手に炎が灯る。

これがレディットの力「炎」^{フレイル}、様々な特性を持つ炎を利用出来る能力である。

炎を操り、剣に纏わせて魔獣を切りつけると、とても硬い魔獣の皮膚を豆腐でも切るように簡単に切り捨てる。

長距離の移動に加え、能力を使ったためレディットは強い酩酊感を覚えた。

「チツ、これが転勤初日にやる仕事かよ。」

汚れた制服を払いながら、舌打ち混じりに呟つ。

「仕方ない・・・」

そういうて刀を抜く。正直力はあまり使いたくなかった。

銀色の月の光が刃を光らせている。

反射した刀に映るのは、大量の魔獣。不自然なぐらいに多い。

加えて誰かが仕掛けた罠のような物でボロボロになり、さらに迷子。

「こんなことになるなら依頼概要をしつかり聞いとけばよかつた・・

」

いまさら後悔しながら、魔獣を切り捨ててとりあえず上を田指す。

「ハア・・・」

ため息をつきつつ、首を垂れながら歩いていた。

と。

急に視界が開ける。

瞬間。レディットの体から今までの疲れがすべて吹き飛ぶ。それは今まで以上に不可解な「景色」だった。

一面の銀世界。と思えば

満開の桜、燃えるような紅葉、青々と茂る草木。

なんとも統一感のない、それでいて美しい、それは昔紛争の仲たがいに行つた島国で見た「四季」という景色だった。それはとてもキレイで感動的なものだった。

しかし、レディットの手を奪つたのはそんなものではなかつた。

「景色の塔」とこいつを納得させるための景色すら脇役に追いやるそれは

それは広間のような空間の中央にある祭壇の上

奇妙な装置の中。そこには少女が「封印」されていた。

「あ・・・」

かすかに漏れる声。もう何が何だか分からぬ。

周りの景色に興味が全くなじように、気がつけばレディットは装置に歩み寄り、触れていた。

本能的に「触れれば開く」と感じ取つたかのよ。

装置を覆つていたガラスのような物が消え、少女がゆっくりと降りてくる。

一枚の布を合わせただけの上着をまとつた少女の顔立ちはひどく纖細で、青がかった黒い髪、閉じた手の上にある睫毛は、瞬けば音を立てそうなほど長い。

すべてを見てレディットは「可愛い」と思つてしまつた。

雪のように白いその頬に触れよつとしたその瞬間。

「・・・ん・・・」

少女の瞼がゆっくりと開き、赤に近い紫色の瞳と皿が合ひつ。レディットは反射的に手を引いた。

「だだ、だ 誰？」

ずっと眠っていたわりには、元気そうなので安心すた。

正直にちらのほうが聞きたいことはたくさんあるのだが。

「僕はレディット、レディット・ギルバーツという。君の名は？」

「私は・・・」そうこうして一瞬考え込むような顔をする。「私は・・・

・ミヤビ・ヤンドウ

（ミヤビ・ヤンドウの名前だ？）

異国人であるだらう事は分かつたが、こいつと同じオランダ語を喋つてゐるのだ。少なくとも幼い頃からシエダールにいるのだらう。「さて、ミヤビ。君も色々聞きたいことがあるだらうが、まずはこちらの質問に答えてくれるか？」

「うん・・・」

ミヤビは不服そうにも首を縦に振つてくれた。だめもとで言つてみたので少し安心した。

「よし、まずひとつ。何故君は口口にいるんだ？出来れば詳しく教えてくれ。」

「覚えてない。」

記憶喪失。これは強敵である。

「そうか・・・じゃあ次。君の保護者はどこにいる？知つているか？」

「知らない。お父さんもお母さんも見たことない。」

「じゃあ家は？」

「そんなもの記憶にないわ。」

（まことに・・・）レディットはいやな予感がした。

「いつから記憶がない？」

「分からぬわ。田が覚めたらあなたが田の前にいたの。レディットの額から冷や汗がにじみ出でくる。」

「食事は？」

「した記憶はないけどお腹は空いてる。」

つまり正常な人間である。ということ。基礎知識だけ持つてずっとこの装置に入っていたことになる。

レディットのいやな予感の原因はショダールの法律にあった。それは「20歳未満の保護者のいない児童が行方不明から見つかった場合、原則として第一発見者が保護者になる」というものだつた。今まで誰も迎えに来ていないと、いうことは保護者はなく、行方不明だつたということになる。レディットも働き手なので原則に従うわけなので、今のこの状況ならレディットが保護者になつてしまつた。

レディットがそんなことを心中でそんなことをぶつぶつ呟きながら顔を上げると、いかにも「立腹といった膨れ面をしてくるヤバがいた。

「私の質問していい?」

「つああ・・・ごめん。」

心のほうもひどく纖細なゆうで、レディットは心中、自分に「取り扱い注意だぞ」と言い聞かせた。

「口口はどう?」

「ああ・・・口口は僕もはじめてきたんだが、景色の塔とこいつとりで・・ほり、周りを見てじらん。キレイだろ?」

「でも統一性がないわ。四季がぐちゃぐちゃに混ざり合っている。四季を知っているところの景色があるところのつまれなのが。」

「僕もびっくりしたよ。でももつとびっくりしたのは、君がこの装置に入つていたことだよ。」

「ええ!」急にヤビが取り乱す。「私この中に入つていたの!・?ずつと?お風呂にも入らずに?」

衛生観念だけはいっちょまえな物である。

「だから、ぼくがそれを・・・

「もういい!」レディットの言葉を//ヤビがやれぎる。「私じゃ

あこれからどうすればいいの？いいわ。もう一回閉じこもるわ。」
そう言って装置に入るが周りのガラスのような物はいつまでたって
も現れない。

「私、どうしたら……」

仕舞いには泣き出しそうになる。女の涙は最強の武器である。
そしてそこでレディットははじめて気づく。「自分のせいである」と。

レディットは覚悟を決め口を開く。

「僕のところに来い……」飯も食わせてやる。風呂にも入らせてや
るから……」

「ほんと……？」ミヤビが頬を上気させながら言う。「仕方ない
から行つてあげるわ。」

見事なまでのシンデレ。これから大変になると分かりながらもレディ
ットは今この瞬間が楽しくて、自然と笑顔になっていた。

meet of oノノyone (後書き)

ゞゞゞゞ。二部目、やつと文がほぐれてきた気がします。

私、実は受験生なのですが「んな」としていいのかと危惧しています。

でも次回からもしっかり書いていきたいなと思います。

byレイ

「ふああ・・・」

大きなあぐびを一つすると、レトライシトは呟つべ。

いつもと違う部屋の空氣に周りを見渡すと、昨日まで自分が寝ていたベッドに誰かがいる。

「ミヤビ・・・？」

口から自然と零れるその名前が、記憶を呼び覚ます。

昨日

やつと町に出た。

今この今まで砂漠をさまよっていたミヤビとレトライシトはもうくたくたであった。

町といつても当から一番近い町で、アテルバまでは列車を使ってあと1時間30分はかかる地点だった。

それでもさつきは行きにこの町から塔までが一番時間がかかってしまったので、本来30分でつぶことに驚くと共に、なぜか他人がいると迷わない自分を発見した。

「ちょっとお・・あとどれぐら・・?」

散々歩き回って疲労困憊のミヤビが不機嫌そうに呟つべ。

「うーん、あともう少しかな・・・疲れたかい?」

そういうトレーディットがおんぶの姿勢をとると、ミヤビが顔を真つ赤にしてそっぽをむく。

「いいわよ。自分で歩くから。」

ミヤビは道も分からないのにすたすたと早足に歩く。

しかし、トレーディットは気が気がなかつた。それは「ミヤビを寄宿舎にどうやって置づか」ということが次第にどんどん気になつてくるからだ。

基本的に機密を守るため、ギルド及びそれに関連する施設も外部の

人間は立ち入り禁止だからだ。

それをごまかすには、いろいろな方法があつたがレディットはその中でも簡単な方法を選ぶ事にした。

それがあたりまえ布団を買うことにした。

「どうして布団なんか買ったの？」

店から出るとミヤビが覗き込んでくる。なぜか近いその距離は、レディットのパーソナルスペースを悠々と侵してきたが、ミヤビの無邪気な表情によけることが出来なかつた。

「ああ・・・これはね・・・」そう言つてレディットが思いついた案を提示する。「ミヤビ、君は部外者だから普通は入れないんだ。だからこいつを使って君を隠す。それで生態認証や赤外線荷物検査のない

ゲートは通れるはずだ。」

「いやよ！そんなの！」「ミヤビが声を荒げる。「何でそんな暑い変な事をしなきやいけないの？」

本当に常識人なのか、無知なのかどっちなのか分からない。

「君が僕のところに来るためには必要なんだよ。」

「もう・・仕方ないわね・・・」

絶対に塔に戻りたくないのか、レディットが必死になだめると大体のことは理解してくれるようだ。

しかし、本当に心配なのはミヤビを寄宿舎に入れた後のことである。外出に出さずにずっと隠し通すのはムリだろう。報告と合わせてリースに報告するかどうかが問題だった。

絶世の美少女と一つ屋根の下暮らせるのは嬉しいのだが、いやな可能性ばかり浮かんでしまつ。

が、その思考はすぐに遮られる。

ガサガサと草むらから音がしたかと思うと、魔獣が現れる。

「ミヤビ、はなれて！…」

刀を抜きながら叫ぶが、ミヤビは魔獣を見たことがないらしく、腰を抜かしてしまっている。

「くつ・・・！」

動けないみやびから魔獣を牽制するように戦っていると、ある「」とに気づく。

（こいつも武器が効かない！？）塔の中の魔獣といい、進化型が多すぎる氣もする。

あまり人に能力を見せるのは好かないが、仕方なくレディットは手に力をこめる。

ほどばしる熱が体を包み、炎が灯る。

（どこかで感じたことが・・・）その熱と光はミヤビの皿を釘付けにして離さなかつた。

レディットもそれに気づく。

「どうした？」

「あなた炎使いなの！？」

どこかで感じたことのある炎に懐かしさを感じたミヤビは声を荒げる。

（ミヤビが知っているということは僕以外にも炎使いがいるのか・・・）

気になつたが、レディットはアーテルバでの力の使いすぎも気になつた。

「ほら立つて。」

そういうて手を差し伸べるが、「いいわよー」と払いのけられる。

ツンデレ・・・？ 嫌われた・・・？

懐かしの寄宿舎。

列車では大きな荷物を背負つていたため身動きがとれず、さらに周りの人から変な目で見られた。

緊張の面持ちでゲートをくぐる。

特に怪しまれることもなくは入れたが、時刻が遅かつたため自然と

忍び足になつた。

「ふはっ」ミヤビが新鮮な空氣でも求めているかのよつと飛び出る。

「苦しかつた……」

「バカ……大きい声を出すな……」

おもわずミヤビの口をふさぐ。

「なんで……そんなの私の勝手でしょ……」

ミヤビがさらりと大声を上げる。

「すまない……僕の説明不足だつた。君が口で騒げば舍監の人
が来るんだ。そつすると君は追い出されてしまうんだ。分かつたね。

「うん……」

解せないなりに理解して頷いてくれるのは世話が焼けないので楽だ
るつ。

氣を取り直して明日からのことを話せつとしたが、ミヤビはレディ
ットのベッドで眠つてしまつた。

それを確認するなり一寸の疲れがレディットを襲い、深い眠りへと
落とした。

meet of onenyonone2 (後書き)

今更ながらもうちょっとだけギャグ入れたかったかなあ
これからもっともっと柔軟に練って行きたいです。
次回に会う期待です。

byレイ

first mission start!!

浅はかだった。

昨日の記憶をたどり、まだボーッとしている頭を横に向けると、自分のベッドにミヤビが寝ている。

その絶世の美少女は、出会ったときと同じひみすやすやすと寝息を立て、無防備な寝顔をさらしている。

かわいそうとも思ったが、その小さな肩を揺さぶる。

「ん・・・」「目をこすりながらミヤビが起き上がる。「もう朝?」

「ああ、そうだ。それでね、僕はもう仕事に行かなくちゃならない。静かにこの部屋から出ずに待っていてくれ。いいね」

「はい。」

不安と心配を抱きながら、レディットは部屋を後にする。

昨日は帰ったのが遅すぎたため、携帯で連絡を入れて報告を今日こ延ばしてもらつたのだ。

ドアの前にくると中は少人数なのに賑やかな笑い声が聞こえる。

「失礼します」

ノックをして中に入ると、「パンパンッ」という軽い炸裂音と共に火薬のにおいが立ち込める。

「これは・・・」

無駄に飾り付けられた室内、テーブルの中央に置かれたケーキ。これは俗に言う・・・

「パーティー・・?」顔についたクラッカーの紐をどける「なんでこんなものが?」

ボーッと突つ立つていると、リースが近寄つてくる。

「ほら、何突つ立つての。君の歓迎パーティーだよ。」

「え・・・?」

周りを見渡すと昨日は見なかつたひとがいる。

「では、紹介します。本日の主役、レディット君です。」

（仕事中に何をやつていいんだこの人たちは。）レーティットは本氣で困ってしまった。

「ほー、リースさん困つてるでしょ。」

すると昨日は見なかつた女性が近づいてくる。「私はヘル・フォーゲルよろしく頼むよ。」

おつとりしたような女性で、口調がそれとなくコレイダに近い物を感じた。

それに続き優しそうな男性が近づいてくる。

「ぼくは、クレヴァー・レンテルだ。よろしく頼むよ。」

お祭りムードを満喫しているのは女性陣だけで、男性陣は適当に会わせている。

飽きたのか、リースが思い出したかのように手を叩く。

「そうだ。報告をして頂戴。」

「はい・・・」

今までのムードばかりに行つてしまつたのか気になつたが、クレヴァーが何事もなかつたように飾りを片付けているのを見て触れないでおぐ。「行方不明者が出ているとの事でしたが、おそらく全員死亡です。

塔に入つたところでたくさん死体が転がつっていましたから。」

「塔までは大体予想どおりらしく、特に驚いた様子もなくリースは珍しく静かだ。「それですね・・・塔の中には、誰かが人為的に仕掛けたような罠がたくさんありました。それと通常の武器が効かない魔獸がたくさん生息していました。あれではおそらく軍の兵士が言つても返り討ちでしょう。僕が確認しただけで50はいましたから。」

そこまで一息に言い切るとさすがに疲れたが、やつとリースが驚いたような顔をする。

「魔獸！？50体！？死体！？」

（最初の一一つは分かるが最後の一つは今更！？）一応先輩なので心中で盛大にツッコミを決める。だが

「あら。ソッコまれちゃった。」

「これまた盛大に心を読まれる。」

「ハア・・・続けますよ」ちゃんと聞いているのか心配なのでレディットは無意識うのうちに確認する。「それで一応、魔獣を一通り狩つてから戻つてきました。以上です。」

一通り報告を終えると、クレヴァーが質問をしてくる。

「その状況から抜け出したということは君も能力者なのか?」

「当たり前じゃない。ココは能力者を集めた部署なんだから。」

これまた初耳のことをさらつとリースが暴露する。

「ええっ!? 聞いてないですよ?」

「そうだつたかしらねえ・・・」

「お婆さんか!」

なぜか一人で一口漫才を披露する。

「ちなみにみんなの能力を教えるはね・・・えっと私が『治療』^{ヒール}っていう能力で、軽い傷なんでも治せるわ。ロゼットは『記憶の手』^{メモリアハンド}つつていつて、金属の形状を自由に変化させられるの。クレヴァーは『追撃』^{ホーミング}つて言つて、自分の放つたものがある程度操れるの。んで、フォーゲルは『工作』^{クラフト}という能力ね。紙を使っていろんな物を作れるの。ああ疲れた。説明終わり。」

説明口調。もう誰に向けてかも分からない。

でも、とりあえず力を特別扱いされて仕事を増やされることはなさそうだ。

それからいくつか仕事を終わらせ部屋に戻ると、昨日今日とは様子が違つっていた。

ベッドやテーブルが横倒しになり、バリケードが作られている。覗き込むとなぜか震えているミヤビがいた。

「なんだ・・・レディットか・・・」

安心したような、つまらない物を見たような目で見てくる。

「ココは俺の部屋だぞ・・・」

「だつて一日中ずっと暇だつたんだよーー着替えもないからお風呂に入れないし……」

（やうだつた。）『ヤビの生活面といつ大事な問題をレディットは忘れていた。

つまり女の子の買つものが分からぬレディットは、『ヤビを連れ出すしかない。

そして連れ込んだときのようにはいかない。

昼間だから、『ぐく自然に、怪しまれずに。

「むう・・・」

『買い物するため、外に『ヤビとと一緒に外に出る。』それが最初の大きなレディットのミッションだった。

first mission start!! (後書き)

「んにちはー！」

今回のリースの説明口調は自分で書いてて笑っちゃいましたww
レディットに向けてですよ・・・たぶんww
難しいんですね!!

それに男の子の口調も自然がどつか心配だし、ユレイダとフォーゲルの中性的な口調も出来るか心配だし・・・
もう心配だけです。

byレイ

「くそ・・・眠い・・・」

目の下に出来た分厚いくまを擦りながらレティットは大きなあぐびをこぼす。

結局昨日は、ミヤビをどうやって外に連れ出すかばかりを考え、一睡も出来なかつた。

おそらく思いつくまで外に出るのはやめたほうがいいだろ？

「おはようございます・・・」

「おはようー！まだ目が寝ているぞ！」

リースがレティットの肩を叩き、目を覚まさせようとする。

それでもレティットのテンションは低く、「今日も一日がんばるぞ！…」などという気は起きなかつた。

適当に依頼を済ませ、帰つて策を練ろうと考え掲示板を見るが、そこに依頼は張り出されておらず、代わりに「合同依頼！…」と書かれた紙が張つてあつた。

それに戸惑うレティットに気づいたのか、リースが説明を始める。

「そうそう、こここの依頼は結構レベルが高いから、複数人でいくことが多いの。今回の依頼は議会委員であるノーマット氏のボディーガード、つまり『要人警護』ね。えっと・・・希望人数は5人・・・ありやりや、全員出動です。」

よくよく考えれば、人数が少ないということは希望人数に足らないということがあるのでどうか心配だった。それでも用心警護とは意外と大層な仕事だったので、レティットは感心せざるを得なかつた。

「それじゃ、出発進行～

まるで遠足に行くかのようなリースの掛け声に、「おー！…」などと返す者はいなかつた。

シェダールの議会委員であるノーマット氏はオランダ人ながら庶民

派として人気がある議会委員だ。

だがエリート派の議員に恨まれることも多く、闇討ちも多いとの事だった。

一通り秘書から説明を受けたレディットたちは、珍しくスーツを着ていた。

「あつついわね・・・まだ9月よ。」

「ほんとですな・・・」

女性陣が声をそろえて文句を言う。

二人とも言いながら首元を緩めるのでネクタイがないボディーガードスーツでは、だらしなく見えてしまう。

「やめてくださいよ。恥ずかしいから。」

二人がレディットの咎めや周囲の目を全く気にしていないうち、ノーマット氏が来てしまった。

しかし、特に気にする様子もなく笑顔で挨拶をしてきた。

「おはよう。君たちがギルド特務班かね？」

「はい。」

「そうか、今日一日よろしく頼むよ。」

それだけ言つと秘書に今日の予定を確認し、リムジンに乗り込む。レディットたちも同乗する。

車の中はカーテンに覆われていて、外からは見えないが意外と質素だった。

庶民派と呼ばれるだけのことはあるのかもしれないが、他人からは狙われるといつてもボディーガードをつけるまでの事があるのかが疑問だった。

しかし移動中、チラリと外をのぞくと先ほどのノーマット氏の家がある高級住宅街の景色とは打って変わって、廃れた景色になる。シェダールの首都であり、経済の中心地である最先端都市アデルバにこんな景色があるとは驚きだった。

そしてどんどん景色が悪くなつていくさなか

ドオオオオオオオオオオオン！！

とんでもない衝撃が車内にほとばしる。通りがかりに「ミミ箱が爆発したのだ。

「何事だつ！？」

「うるたえないでください！！レディット君とクレヴァーは周りの不審人物の確認、ロゼットとフォーゲルはノーマット氏を守りつつ安全なところへ、私は負傷者の治療に当たるわ。」

いつもおふざけムードとは違い、リースがすばやい判断を下す。

「いくよ。レディット！！」

クレヴァーに従い周りを捜索していると、遠くに一つの人影を発見する。

「あれだ！！クレヴァーさん！」

レディットが指を差すと同時にクレヴァーが銃弾を放つ。その弾丸は人影に当たると同時に「バチッ」と音を立て人影を転ばせる。

「いくぞ！！」

人影は足を引きずりながら裏路地に逃げ込む。常人の何倍も高いレディットの身体能力で、追いつくのに時間はかからなかつた。

「待て！！観念しろ！！」

こんなので諦めるような犯人ばかりならどんなに楽だらうか。

案の定、男は抵抗しようとして以外にも素早く胸元から銃を出してレディットに向かい発砲する。

「レディット君！！」

後ろでクレヴァーの声がする。

常人なら。

防弾仕様の制服でも骨折は免れない。

レディットは胸の部分に意識を集中させる。

胸に灯つた炎は銃弾を包み込むと空気中で動きを止めさせる。

「うわあ！！」

犯人は驚き腰を抜かしている。

「とりあえず来てもらおつか。」

クレヴァーのなかには、驚きがばかり渦巻いていた。

結局被害は小さく、警察に犯人を引き渡した後そのままノーマット氏は議会に向かつたため任務は続行で、レディットたちは会場警備に転じていた。

「お手柄じゃない！レディット君……」

「はあ……」

リースが褒め称えてくるが初手柄を上げたレディット自身、ショックのほうが大きかった。

「あれ……？ いきなり事件に巻き込まれたからショックとか？」

本当にリースがエスパーに見えてくる。

「まあノーマット氏は無事だし、後で話を聞かせてくれるらしいですね。」

「でも正直驚いたよ。僕より視力が良いし、足も速い、それに仕舞いには銃弾まで受け止めてしまったんだから。」

クレヴァーまで褒めちぎつてくる。照れ屋なレディットは顔を伏せたくなる。「並大抵の修行じゃあんなに強い力をならないだろ。う。

そもそもなんで学校にも行かずに働いてるんだ？」「

レディットは自然と眉をひそめる。正直過去の話はしたくないし、思い出したくもなかつた。

「あれ、なんか話せない事情でもあつた？」

「そりや無かつたらこんな年で働きには出ないでしようよ。」

「すいません……いざれ話しますので」

場に重々しい空気が流れかけたとき、ノーマット氏がちょうど出てきた。

「やあやあ、待たせてすまない。このまま行つてしまおうか。」

議会の隣にあるカフェに入る。「これから警護を担当したりする場合を考えると、聞かなければいけない事があるからだ。個室を用意できたのは人気の証拠だらうか。

席に着くとリースの顔がまた変わる。さつきといいやる時はやるのかもしない。

「さて、単刀直入に聞きます。お心当たりは？」

「そんなことを言い出すときりがないんだが、おそらくエリート派のドイツ人議員だろ？」

この国は第一次大戦で新たに生まれた国家なので、色々な国の人があいて、むしろ50年以上もこの国だけの純血を受けついでいるのは珍しいのだ。だから思想の差を無くすために議会にはいろいろな国の人人が所属している。

「なぜそうだと？」

「しつっているだろ？私は家柄ではなく選挙で選ばれた議員だから、ひいきを受けることも多いのだよ。

帝国主義のドイツとしては私のような民主主義の議員は好みないのだよ。」

だがそれでは納得がいかない。明らかにさつきの刺客は素人ではなかつた。銃を持っていることも、それを出す動作の素早さも。

「犯人の身元は分かりますか。」

「分からぬ。分かれば告訴することも可能なんだがな・・いや、まさかな・・・」

最後にノーマット氏は何かもつたいくぶるような素振りを見せたが、リースは特に気にせず質問を続ける。

「今回が一回目ですか？」

「いや。正直数えられないが、今回ほど派手なのは初めてだ。今までは催眠ガスを使ってきたり、運転手を氣絶させるなど・・・そう、私を議会に出させないようにするような物ばかりだったが、今回は私の命を狙つてきたような感じがした。」

いやなところに来たものだ。殺人やその未遂事件は基本的に警察の仕事なので、レディットは新鮮かつ面倒くさに鼓動が速くなつていた。

「そうですか・・・お時間頂きありがとうございました。」

「いやいや、私が捜査の協力になるなら時間などある程度裂きますよ。」

立った五つの質問でリースは何かを察したようだ。

去り際にリースがノーマット氏の耳元で何かを囁く。レディットには聞こえなかつたが、ノーマット氏は家に帰るまでずっと苦い表情をしていた。

「何が分かつたんですか？」

特務室戻るとレディットには理解できなかつた質問の内容をリースに尋ねる。

「うん？」リースの口調や表情はもう普段どおりに戻つていた。「えつとね・・・確実ではないんだけど3つの可能性が浮かび上がつたわ」

リースの話はこいつ。

1. 「犯人が変わつた」：今まで依頼者が依頼していた犯人が過激な犯人に変わり今回のような大胆な犯行に及んだ可能性。この場合、依頼者にとつては想定外である。依頼者はなく、個人の犯行の場合もこれに含む。

2. 「依頼者が変わつた」：今までの依頼者とは違う依頼者、もしくは新たに現れた依頼者によつて依頼されたため犯行が変わつた。この場合、少なくとも新たな依頼者にはノーマット氏への殺意がある。犯人と依頼者、どちらもが変わつた場合もこれに含む。

3. 「目的が変わつた」：犯人も依頼者も変わらず、犯行の目的が「妨害」から「暗殺」へと変わつた場合。この場合、状況の変化により依頼者の目的が変わつたため、裏にもう一つ二つ何かがある。少なくともこの場合にも依頼者には殺意がある。依頼者が故意に犯人を変えた場合もこれに含む。

4. 「自作自演」：字の通り。事前に計算し、自分が狙われてい

るような犯行に見せかけた。この場合犯人——（ノーマット氏）の田
田は今のところ不明。

「さて、レディット君。どれだと思つ?」

「今のところですけど、1と4は犯人側に全くメリットを感じない。
自作自演のようには見えなかつたですし。2や3はつづらうとだけ
奥にある目的が見え来ます。たぶん議会にドイツの考えを反映させ
るためでしょ?」

ロレンツ支部にいた時代は魔獸退治ばかりやつていたレディットは
推理系はさっぱりが、自分なりに答えを出してみる。

「いい読みね。ちなみにあの人、依頼者はともかく、犯人の正体を
知つてゐるわ。多分だけど、一瞬言つのをもつたいぶつたところが
あるでしょ。あそこで心を読んだの。だから多分3ね。」

（するいような便利なような・・・）リースが心をある程度読める
のは幼少期からの経験で、特に能力というわけではないらしい。
「犯行を阻止した以上、私たちにも危害が加わる可能性があるわ。
とつあえず気をつけましょ。」

そういうと仕事は終わり解散となつた。

寄宿舎に帰るまでの途中。

（ん・・・？）

後ろに人の気配がする。振り向くが誰もいない。

（気のせいいか・・・）そつ割り切つて歩みを進める。だがやはり氣
配は消えない。

レディットは真意を確かめるため部屋の前まで来ると体に炎をと灯
す。

攻撃や防御のときに使うような炎ではなく、ゆっくりと、流れるよ
うなイメージ。

途端、レディットの姿が消える。

陽炎を利用して姿を消したのだ。激しい動きをすればばれるが、そ

う遠くないストーカーを捕まえるには十分である。

「誰だ！？」

レディットが後ろに回って肩をつかみかかると「キヤツ」という声と共に見た顔の一人が振り向く。

「リースさん？ フォーゲルさん？」

「いつの間に！？」

「何故こんなところに？ つていつかつけてたでしょ？」

「当たり前じゃない。新人君の部屋をチェックするのは……！」

なぜか一人は胸を張つて自慢げに言う。

「とりあえずココじゃ何なんでこっちに……」

そう言つて一人を部屋に入れようと鍵を開けた瞬間。

（ ッ！ ）ミヤビの事を思い出してドアを閉める。

事件に巻き込まれたことで完全に忘れていた。

「どうしたの？ 入れてくれないの？」

「えっ、これはあの……」

レディットが弁解しようとした瞬間。

「おかえり！ お腹空いた！！」

元気な声を上げながらドアを開けてミヤビが出てくる。

双方とも「……誰？」みたいな顔をしている。その後レディットに顔を向ける。

レディットのファーストミッションは見事に失敗した。

first mission start!!-2 (後書き)

今回の（これからもかもしれません）お話、私の一身上の都合でいつもより一話一話の文字数が多くなるかもしれません。

理由は受験で投稿する頻度が確保できないかもしないからです。

それで遅れが出ないようにと・・・すいません

それでもしつかり書いていきたいと思いますのでよろしくです。

byレイ

まだ見えない影

「ちゃんと説明して頂戴。」リースがお茶を啜りながら言つ。「どうしてこんな可愛い娘がレディット君の部屋にいるの!?」「可愛いってそこですか・・・」

なぜかさつきからリースは興奮氣味だ。鼻息が荒くなつてゐる。とりあえず部屋の前で話すのも迷惑になるので、部屋に上がつてもらつたが一つのテーブルを男一人と女三人で囲む状況は、レディットにとつて息苦しい物だった。

「そうよ!お人形みたいな顔立ちに、この長い睫毛、この髪の色はアジア人のものね!全部パーフェクトだわ!こんな可愛い娘と同棲なんてどうしたの?」

少し話の視点がずれていいる氣もしたが、とりあえず説明するのが先決だつ。ばれてしまつた物は仕方ない。

「実は・・・この子とは最近なんです。出会つたのが、別に最初から連れ込んでいたわけじゃないんですよ。」

「いつの事?」

「それは・・・最初の任務のときです。」

リースが心底驚いたような顔をする。塔に行つたことがないのだろうか。「その塔の最上階に行つたときにして」

レディットがそこまで言いかけたところでリースが立ち上がる。

「ちょっと待つて。」

そういうと電話をかけ始める。

「ああ、ロゼット?今すぐレディット君の部屋に来て。4階の8号室ね。」

それだけ言つと電話を切る。なんて一方的な会話だつ。『すぐに来るつて。彼にも聞かせるわ。』

「あはは・・・あれ?クレヴァーさんは?」

「クレヴァーは自宅からの勤務だから、来れないのよ。」

「そうですか・・・」

と。不意にチャイムが鳴る。「オレだ。開ける。」
(速ツ！-) まだリースが電話をしてから一分とたつていなかつた。ドアを開けると不機嫌そうなロゼットが立つていた。それでも来たのだ。リースの人望の厚さの凄みを感じた。

「ど、どうぞ・・・」

いつもは寡黙で冷静なロゼットもミヤビを見たときはリースたちと同じ反応をする。

「誰？」

次々と知らない人が来るににはミヤビも少々戸惑つてゐるようだ。

「この人もオレの上司。ロゼットなんだよ。」

「さつ、説明を始めて頂戴。」

いつしか一人暮らし用のレディットの部屋は、いつぱいいつぱいになつていた。

「はい・・・。景色の塔の最上階に行つたとき、この子が祭壇の中央にあつた謎の装置に封印されていたんです。それで助け出してみれば名前以外の記憶もないらしく、家も思い出せないらしいので、仕方なく口に。今のところオレが保護者扱いになるみたいなんで。

「ふ～ん。あなた、名前は？」

「ミヤビ・・・」

人見知りなのかミヤビはさつきからレディットの後ろに隠れてしまつた。「カワトイイ～～～～！」

(何がだ！？) サツキからリースとフォーゲルはおかしくなつてゐるようだ。

何かに耐え切れなくなつたのかリースがミヤビに飛びつく。しかしミヤビがレディットの後ろに隠れたため、勢い余つてリースとレディットがぶつかる。

「いてて・・・」

目を開けると何か柔らかい物がレディットの胸を圧迫する。

「はつ……」

思わず身を引く。レディットの顔が一気に赤くなる。

「「めん」めん。私ちょっと可愛い物を見ると興奮を抑え切れなくて……」

そんなことを人前ではどうかと思つたが、リースはその類を気にしない性格であることは初対面のときから薄々感づいてはいた。「でもねえ。部外者は基本立ち入り禁止だからなあ。どうしますかね。」

フォーゲルが痛いところをついてくる。たしかにこの件ではそこが一番問題だった。

「そうですね……だから今まで隠していたわけだし。」

「放り出すのはあまりにも可哀想だし……」

「養護施設は扱いがいいとはいえないし、孤児院はこの年じや……」

「四苦八苦するが全くいい答えがでこないし、当の本人は何の話をしているのか全く分かつていない。」

「ちょっと……ロゼット。あんたも考えなさいよ。」

困ったリースがハつ当たりがてらロゼットに答えを求める。

「そいつ……ミヤビを特務班に入れればいいだろ。」

「……」

「……」

「……」

「その手があつたわ……」

三人の間に衝撃が走る。自分たちがいくら考えても出てこなかつたまさに正解を一発でだされた。

「でも、それって出来るんですか？支部長とかが認めないと……」

「大丈夫。特務は支部長のお気に入りだから。」

そんな理由で決めてしまつていいんだろうかとレディットは不思議でならなかつた。

「兎にも角にもとりあえず策は見つかったので解散……」

リースが号令をかけると一人は部屋から出て行く。
レディットも寝ようとベッドを見ると誰かが布団にもぐっている。

「・・・」

近づいて布団を引き剥がす。犯人は分かっていた。

「帰りましょうか。リースさん。」

「やつぱり?」

(電話? こんな朝早くに誰だよ・・・?)

寝ぼけ半分で電話に出る。

『おはようレディット君! ! !』

一気に目が覚めるような大声が通話口から聞こえる。リースだ。
「声が大きいですよ。叫ばなくても聞こえますから。で、どうしてなんですかこんな早く?」

『昨日支部長に電話で掛け合つてみたら「とりあえず連れてきてくれ」だつて。服はそのままでいいって。良かつたじゃない。』

本当に話を聞いてくれたとは。枝部長も支部長である。
仕方なくミヤビの肩をゆすり起こす。結局レディットの使っていたベッドが気に入つたらしく、奪われていた。

「ふああ・・・」

「おはよう。君が口口に残つて自由になれるかもしねいんだ。」

「ほんとに! ? やつたあ! ! !」

まだ朝だというのに元気に跳ね上がつてミヤビが喜ぶ。数日間外に出ていないことを考えると当然なのかもしねい。

「その代わりやらなきゃいけないことがあるんだ。」

「ん?」

「ここで仕事をするんだ。働かざる物食うべからず。分かるね? 大丈夫。そんなきつい仕事はないし、いざとなつたら僕や他の人と一緒でもいいんだ。それでもいいかい?」

正直ミヤビが力を持つているのかも、一人間としてどれぐらいの能

力があるのかも分からぬが、一人の少女を守るくらいは出来るだろ?といつレディットの考への下の条件であつた。

「うん……」

ミヤビのその笑顔は出会つてからはじめて見る物だつた。

（□□に来るのは一回目か……）

いまだに消えない緊張を胸に、支部長室の扉をノックする。

「失礼します。」

ミヤビをつれコレイダの前に出ると、コレイダが驚きの表情を見せる。

まるでミヤビのことを良く知つてゐるような、その上でレディットが連れてきたことに対し「やはりな」といわんばかりの感情が混ざつてゐる。

それにつられミヤビを見ると、ミヤビも同じような顔をしてゐる。だがこちらはコレイダのような確信の表情とは違い、「この人どこで……」「くら」のものだつた。

二人の間には詮索しがたい何かあるようだが、ミヤビははつきりとは思い出せない様子だつた。

顔立ちや容姿に遺伝は見られない。親子ではないだろ?。

「二人は知り合いですか?」

「いや、すまない。それで今田はそつちのミヤビ君が特務に所属したいと……」なにかコレイダに丸め込まれる。「リースから話は聞いたよ。確かにこの年で何らかの養護施設に預けても労働力としていいように扱われるのが落ちだらう。□□に勤務することは私のほうは特に問題はない。認めよ!。」

何かコレイダはまだ言いたいことがありそうな表情をする。

「なにか?」

「いや、なんでもないよ。服は大体のサイズで作らせてもうつたから、合わなかつたら言いつけてくれ。」

それではがんばってくれ……ミヤビ君

まるでミヤビにこの場から消えてほしけのよつな口ぶりだで早くと話を切り上げる。

「はー・・・・」ミヤビも空氣を察してか声のトーンが落ちる。「失礼しました。」

後味の悪いまま、謎を残して支部長室を後にする。

「支部長のことを知っているのか?」

特務室へ向かう途中、腑に落ちないレディットはミヤビに聞いてみる。

「うーん、それがあるよつな氣がするんだけど思い出せないんだよね。キレイな女性だつたから忘れないと思うんだけど。」

曖昧な記憶でも、今はミヤビに繋がる大事な情報だ。このことが本当だとしたら、またいろんな可能性が浮かんでくる。これは記憶を取り戻せるいい傾向なのかもしれない。

とりあえず着替えるために更衣室に行く。

更衣室の中はあたり一面にギルドの制服が並べてあった。レディットたちが着ている通常服、主に技術班などが着る作業用つなぎ、医療班などが着る白衣など、種類の多さが組織の大きさを物語っている。

ミヤビは自分の名前が書かれた制服を取るとカーテン式の部屋に入る。

「・・・覗かないでよ。」

正直そこまで心配があるなら一緒に生活などムリな氣もする。とりあえずカーテンの前で待つていると中から声が聞こえる。

「えつ、何でこんな所に・・キヤッ！・・・やめてください！！」

（なつ・・・！）

不審者がだと思いカーテンを勢いよく開ける。が、途端に力が抜けれる。

「・・・え？」犯人がミヤビを襲っていたのに違いない。「リースさん！？フォーゲルさん！？」

どうやら待ち伏せしていたようだ。ビームでミヤビを襲いたいんだ

ろうか。

たが、この状況で問題になるのはそれよりも……

(僕じゃないか・・・)

更衣室のカーテンを開けている男が一人、カーテンの向こうで女が三人。しかもそのうち一人は着替え途中の下着姿をさらしている。この状況下、「変態」と呼ばれるのはレディットであった。

考え込む顔を上げる//ヤビの拳が飛んでくる

れる。

（ケーかよ・・・）
予想外の威力にレディットは一言愚痴りながら倒れた。

その10分後、レディットが赤くなり腫れた頬をさすりながら更衣室の端に座つていると、やつとカーテンが開く。

おまたせ～」

リースとフォーゲルに押されて半分涙田のミヤビが出てくる。
さつきのことを怒つてこるのか全くレティッシュと田舎を合わせようと
しない。

「おはようございます」

レティッシュの謙謙もじもじとぐうやうそうほを向かれ、スルにされる。

なんやかんやで許してもらえないまま特務室についてしまう

「仕事サボつてどこに行つてたんですか。」クレヴァーが鋭く突っ込む。「ん? その子は?」

どうやらハヤビの存在に気づいたようだ。クレヴァーは目を丸くしてこる。

「朗報よ、クレヴァー。わが特務に新人君が入つたの。レディット君の紹介でね。」

「でもその子は景色の塔の・・・

「どうやらクレヴァーは景色の塔に行つた事も最上階まで行つた事もあるらしい。

「あれ？ 知つてたんだ？ ジャ あ話が早い。 ほら自己紹介」
リースがミヤビに自己紹介を促す。 一人がまるで姉妹のように見えてくる。

「ミヤビ・センドウです・・・

「クレヴァー・レンテルだよ。 よろしく。 いやあそれにしても人数が増えたのは嬉しいね。」

いまだにたつたの六人なのだが新米部署にとつては大きな進歩なかもしれない。

確かに人数が少なくては希望人数に満たない依頼はつけることができない。

「いや～ それにしてもほんと可愛いわね。 持ち帰りたいわ

「私それでもいいですよ」

ミヤビが冷ややかな目をレディットに向ける。 軽蔑の眼差しだ。

「だからこめんつて

「じゃあ何でカーテンを開けたの？」

「それはリースさんとフォーゲルさんだつて知らなかつたら不審者だと思うだろ」

レディットの必死の弁明むなしくミヤビは「フン！」といつてそっぽを向いてしまう。

「どうしたの？」

事情を知らないクレヴァーはなぜ仲が悪くなつたか分からぬ様子だ。

「気しないで。 良くある痴話喧嘩よ

（あんたのせいだろ！！）

レディットは一人の不穏な会話を小耳に挟みながらつっこむ。 そして思い出す。

「あ、 そうだ。 今日ミヤビの日用品などを買いに行きたいので早め

に切り上げたいのですが・・・

その言葉を聴いた瞬間また女性陣一人が反応する。そして部屋の端にようひそひそ話を始める。

「・・・・・」

「・・・・・・・・・」

数秒間の間のあと二人が満面の笑みを浮かべて振り返る。

「私たちも行く！！」

（なんでそつなる！？仕事をしろ！！）

つつこみどころ満載な結末を無理やり取り付けられた。

「仕事をしろ・・・」

ロゼットがポツリと呟いた。

「何でクレヴァーさんまで・・・」

なぜかクレヴァーも参加し5人となつた一行はアーテルバにあるショッピングモールに来ていた。

さすが近代大都市だけあって狭い土地に100以上もの店舗を連ねている。

洋服屋、家具屋、美容室、本屋言い出せばきりがないほど。ここに買い物に来れば大体の物はそろつ。

今よくよく考えれば女性陣が来るのに、レディットが女性の買い物についてくる必要があつたのか疑問だが、喧嘩のあとでもミヤビは拒んだりはしなかつた。

結局最後までロゼットは特務室に残つて仕事をするらしい。

「いいじゃないか。今日は仕事も少なかつたし。」

なんという無責任な集団だらう。本来はロゼットが正解なのだが、ここにいるトレーディットもこの空気に飲まれそうになる。

「それに新しくあんな可愛い子が入つてきてくれたんだから。」

「とりあえず行きましょう。ミヤビちゃん最初はあそこね。」

そういうとロースとフォーゲルは半ば強引にミヤビをエスコートする。

三階建てのこのショッピングモールの店を全部回らんとする勢いだ。

「ちょっと待つてください！」

レディットもそれについていく。こうして楽しい買い物が始まった。

・

と思つていたのは2時間前のこと。

「まだ回るのか？」

どこかで聞いたことのある「女性の買い物は長い」という噂は本当だった。

レディットは一時間程度済むと踏んでいたがその考えは甘かったようだ。

そして一時間も色々な店を回つてはいるのに、買ったものせいまだに洗面用具と髪留めなどのアクセサリーだけだった。

レディットはこれからさらに財布が薄くなることを覚悟せざるを得なかつた。

そんなレディットの悩みなど露知らず、三人はやつと本命である洋服屋に入る。

「ちょっとまって。」

レディットも入ろうとするとクレヴァーに呼び止められる。「話でもしよう。多分長くなるから。」

店の前にあるベンチに腰掛けることにする。

「実は僕も景色の塔に言つて彼女を見つけたんだよ。昔ね。僕は遺跡の調査を得意としてるが、あの装置の開き方は分からなかつたよ。どうやって開けたんだい？」

まじめな質問に、レディットは少しだけ戸惑う。

「いや、僕にも分からないです。触つたらあいたんですね。多分自分で無意識に感じ取つたのかもしねないです。『触れば封印が解ける』って。」

そういうとクレヴァーが分かりやすく驚く。

「あれを一瞬で封印と見抜いたのか・・・君はセンスがあるのかも

しれないな。」

遺跡発掘のセンスは、はつきり言って必要なく、自覚はなかつたの
で褒められても恥ずかしいだけだつた。

「・・・ ありがとうございます」

「おわつたよ~」

なぜか今までの何も買わなかつた時がつそのよつに、三人が早い時
間で買い物を終えて出てきた。
しかしさつきまで何も持つていなかつた手にはいくつもの袋を持つ
ていた。

「レディット君、財布ありがと。」

そう言つてリースから返された財布はすっかり丸裸だつた。

「ハア・・・・」

思わず深い深いため息が出ていた。

「疲れた~！」

部屋に戻るなりミヤビはベッドに倒れこむ。

結局帰り道、荷物もちをやつたのもレディットで、倒れこみたいの
もレディットだった。

とりあえず今日のところは部屋の荷物は端に寄せておくことにした
ので、色とりどりのタワーが建つてしまつてゐる。

「レディット、ご飯は?」

買い物の影響か、ミヤビの機嫌は氣づけば直つていた。

「ちょっと待つて、あれだけ歩き回つたんだ。お風呂が先。」

「分かつたわよ・・・」 そう言つて洗面所のドアを開けて一言「今
度はのぞかないでよ。」

（覚えていたのか・・・）

結局覚えていたらしいが、そのつえで許してくれたと思つと優しさ
を感じる。

ミヤビを養つていいくことを考るところを思つて出す。

電話に手をかけ、番号を打つ。

「もしもしルックか？」

『あれ、レディット。どうしたの？』

「ちょっともうもう起きてしまって、しばらくそつちこは戻れないんだ。』

アデルバに来る前にルックと帰省の約束を取り付けていたのだが、わざわざミヤビを他の人に預けるのも気がひけるし、ひとりで生活させるのも心配だった。

『そう・・・そういうえばレディット学校に入らないの？もうお金に困ることはないでしょ？』

『いやいや、さすがにそこまでの余裕は・・・』

金銭面の事もそうだが、学校に行く場合、ミヤビをおいていかなければならぬし、仕事も出来なかつた。

『そう・・・まあ余裕が出来たら、年相応に通いなさこよ。』

電話が切れると同時にミヤビが風呂から上がりてくる。

「ねえ、ご飯～」子供のように駄々をこねる。「お腹空いた！」

「分かったよ・・・」

そう言つて夕食を作つていると、後ろでしていたテレビの音と共にしていたはずの急にミヤビの鼻歌が消える。

何かと思つて振り向くとミヤビがベッドで寝息を立てて寝ている。どうやら自分で思つ以上に疲れていたようだ。

「仕方ないな・・・」

そう言つてミヤビに布団をかけようとした瞬間。急に眠気に襲われる。

レディットはそれに抗つことも出来ず深い眠りに落とされた。

まだ見えない影（後書き）

「んにちはー！」

今回も文字数多めでサーセン

イメージ的には今回で序章が終わらうとしています。
章の設定を今更つけるのもあれなんで・・・

次回もよろしくどうぞ

byレイ

「イイは・・・？」

見た事のあるその景色は塔のある東のはずれの砂漠だった。
妙な浮遊感がレディットに夢だと気づかせる。

レディットが誰もいない広大な砂漠を彷徨つていると、向こうから人影が来る。

人影は三つだつたが一人は別の一人に抱えられていた。

「あの・・・」

しかしレディットが声をかけても反応はない。どうやら口でレディットの存在は認知されないようだ。

すれ違いざまに深くフードをかぶつて良く分からぬが三人の顔が見える。一人はどこかで見たことのある絶世の美女、一人は背丈の高い男性、そして男性に抱えられている小柄な体格のその顔は

「ミヤビ・・・？」

見間違えるはずもない。さつきまで一緒にいたのだから。
しかしその顔は青ざめ、生気が全く感じられなかつた。

ミヤビを抱える一人は何かあせつてている様子で、早足だつた。

「いつたい何なんだ・・・」

いやにリアルになりつつある夢の内容にレディットが軽くめまいを感じていると、三人の後ろから別の男が現れる。

「返せ！－」男もまたあせつてているように叫ぶ。「シェーン様を返せ！－」

（「シェーン」・・・ドイツ語で「美しい」か・・・）

誰の名を呼んでいるのか分からぬが、「様」をつけているところ見ると、どうやら崇拜している何かや誰かを奪われたような口ぶりである。

「コレイダ－！」男性がレディット知つてゐる名前を口にする。「

お前はこの子を連れて塔の頂上に行け！－！

そつ言ひ ミヤビを引き渡す。

「でも・・・」

「いいからいけ！－！」

そういうと一人が追つ手らしき男の足止めに入る。

それを見ながらレディットはなぜか自然とミヤビたちについていく。レディットが来た時は違ひ、罠が一つもかけられていない塔を登りきると、女性はミヤビを例の装置に入れると、ひざをついて呪文を唱え始める。

聞いたことない国言語でぶつぶつと唱えるその呪文は聞いたことのある声によつて唱えられる。

「！」の声は・・・

現実が良く思い出せない夢の中で出来るだけの記憶を搾り出さうとしていると、やつきの追つ手が追いついていく。

「やめろ！－！」男が叫ぶが女性は無視して呪文を唱え続ける。「やめないか！－！」

男が怒り狂つたように手に持つていた剣を投げつける。

「――――ッ！－！」

女性の腕が千切れ飛ぶと同時に深々とかぶつていたコートが吹き飛び。

「・・・コレイダさん？」

またもや知つている顔が現れる。そこでやつと聞き覚えのある声を思い出す。

そしてそれと同時に装置が閉じる。

「許さんぞ・・・」

コレイダはゆつくり立ち上がり顔の見えない追つ手と対峙する。

コレイダが足元の剣を取り、男が胸ポケットから銃を取り出した瞬間。

「ハツ！－・・・」

目が覚めると鼻と鼻が触れ合って、その近でミヤビの顔がある。あせって起き上ると体が熱い。体温が尋常じゃないほど高い。それに手の甲に奇妙な紋章が浮かび上がっている。それはさつきまでミヤビと触れ合っていた手だった。

「くそつ、何なんだ……」

体中から噴出す汗を拭きながら立ち上がり改めてミヤビを見てみると、ミヤビの手の甲にも同じ模様の紋章が浮かび上がっている。

「どうしたの……」ミヤビもまた汗でぐっしょりだった。「あれ、私なんでこんなに汗を……」

「それが僕にも良く分からんんだ……」

そう言つてミヤビと目が合つと体が一気に熱くなる。

今まで味わつた事のないほど呼吸と鼓動が早まり、一夜にして急にミヤビを異性として見始めたような感覚。

どうやらミヤビも様子が同じで、一人して頬を赤らめる妙な時間が生まれる。

「あ、あのさ……」そんな空気に耐えられなくなつたのかミヤビが切り出す。「今日ねあなたの夢を見たの。多分昔の事だわ。」

思わずレディットは反応する。昨日からの体の変化といい、偶然といつて割り切れる物ではなかつた。

「えつとね……なんかリアルだから、あなたの過去に本当に会つたことじゃないかと思うの。あなたはベッドに縛り付けにされていて、周りにいる複数の大人たちがあなたの体から何かを吸いだしていたわ。見る見るうちにあなたは弱つて……記憶にない？」

「いや……」

レディットの記憶は昔から所々途切れていって、覚えていないところは少なくなかつた。

それでも記憶の断片をさぐりながら思い出すとすると、体がだるくなる。

「僕も君の夢を見たんだ。偶然じゃないと思つから少し調べてみるよ。」

レディットは味わった事のない「ビリのたかなり」疑惑の事しかで
きなかつた。

「失礼します。」

会話の無いまま特務室のドアを開けると中の全員がいつせいにすば
やく振り向く。

普段は冷静な男性陣やいつもおつとつしている女性陣まで恐怖の混
じつた視線をレディットに向け、皆一同に目を見開いている。

「どうかされました？」

「いや・・・おはようレディット君。とにかく普段力を抑えたりし
ている？」

なにやら意味深な質問をリースがしていくが全く見に覚えは無かつ
た。

何かをした覚えはないが、強いて言つなら今朝の事に関係があるの
だろうがそれも良く分かっていない。

「いや・・・力が・・じやあ今日もよろしくね。」

納得のいかない様子を見せつつもリースが聞くのをあきらめる。
歯切れが悪いが切り替えて依頼ボードを見るとひょいといい依頼が
張り出されている。

「紛失図書の搜索 市民図書館より」

レディットはその張り紙を取ると図書館へ向かつた。

市民図書館はアデルバ南の政治中心地にあり歴史の浅い図書館にし
てはほんの数が多い。

「特務班の方ですか？」まじめそうな職員が困ったように話し始め
る「探してほしい本は三冊です。別に無くなってしまったわけでは
なく正確には期限を過ぎても返却してくれない方がいるのです。」
職員の話によるところ二冊の持ち主とは連絡が取れているらしいが
残り一冊の持ち主が何度も訪れても返してくれないので連絡したとい
う。ようはパシリである。

「わかりました。」

住所メモを職員から受け取ると珍しく小さな任務に出発した。

「あのー・・・すいません。」

一冊目、二冊目は簡単に手に入つたものの、三冊目の持ち主はいく
ら呼んでも出てこない。本当に住所はあつていいのだろうか。「つ
たく・・・」

ドアに耳を当てながらチャイムを鳴らすとわずかだが物音がする。
「あのーすいません。ギルドの者なんですけど・・・」

「ギルドだと・・・」

仕方なく身分を明かすと、図書館の人でない事を確認するように住
人が姿を現す。

眼鏡をかけ、無精ひげを生やしたその男もまたレディットを見るな
り驚いたような顔をする。

「あの、図書館の本を・・・

「いいから入りたまえ！」

レディットは用件を伝えるひまもなく家の中へと引きずり込まれる。

「あの、こっちは用件が・・・

「それより質問だ！！」またもや遮られてしまつ。どうやら質問に
答える他ないらしい。「その力、どうしたんだ！？」

さつきも聞いたような質問をされた気がする。

「力が何なんですか？」

「気づいていないのかね？君の力は私が見てきた中で最も大きく、
凶暴そうだ。これでも昔は能力者の研究をしていたのでね。」

「そうなんですか！？」

偶然にも今朝の事やリースたちとのやり取りの謎が解けるかもしれ
ない。

「これは今朝からなんです。仕事の先輩たちにも驚かれて。」

「ああ、そうだろうな君の力は恐ろしい。能力者でも驚くだろう。
居留守を使つていていたわりには今更興味津々にきいてくる。「きっと
君は特務班だろう？」

数年前に出来たばかりの部署を知っているのは何がギルドに「ネを持つているのだろうか。

「知ってるんですか？」

「ああ、コレイダとは昔からの知り合いでね。あいつが作った部署だろう。」

「支部長を知ってるんですか。」

コレイダを呼び捨てにするとはなかなかの大物なのだろうか。

「まあな。それよりも何か心当たりはないのか？」

いつもと違うところはたつた一つ。レディットは腕の紋章を見せる。「あるといえばあります。関係あるかは分かんないんですけど、昨日の夜わけあつてある女の子と一緒に寝る事になってしまったんです。そしたらある夢見たんです。」

『夢』という単語に男はピクリと反応する。「その夢にはその少女が出てくる夢で、朝起きてその子に聞いたら、その子も僕の夢を見たと。そして体にこの紋章が。」

「それはおそらく『夢交換』をしたのだろう。」

聞き慣れない言葉が男の口からだされる。夢を交換？「夢交換って言つのは、能力の近い物同士が体の一部を触れ合わせながら眠りについたときに行われるんだ。」男はそういうながら本棚から一冊の本を取り出す。「この本に書いてあつたよ。そうして夢を交換した次の日の朝、触れ合わせていた体の部分に紋章が浮かび上がるという。私も実際にこの紋章を見るのは初めてだが、おそらく個人個人によつて違うのだろう。そしてもう一つ言われているのが・・・」そこまで言い切つたところで男は言つのをためらつ。「何か？」

「・・・君とその子は恋人同士かね？」

唐突な質問過ぎてレディットは驚いたが、男は何か遠まわしに言つているように見えた。

が、以前とは違うそれだけでもレディットは取り乱す。

「ツチ、違いますよ！ 何でそんな事・・・！」

その動作を見て男は「やはりな・・・」といった顔をする。

「君の力は何だね？」

「炎フレイですけど・・・」

「おお！・・・」

なぜか男は驚きと簡単と興味に満ちたような顔で迫つてくる。

「その能力、はじめて見たぞ！学書で存在するとは知つていたが。すごいぞ！」

「何がすごいんですか？」

レディットを差し置いて男は一人でなにやら興奮している。

「おつと、自己紹介が遅れた。オレはカーリー・セントだ。それでな・・・炎フレイはいろいろな事に利用できるだろ？それがな、命にも代用できると昔ある教団が唱えていたんだ。」

「命に！？」

思わず素つ頓狂な声を出してしまう。確かに自分の中に本当にそんな力があるのなら驚きだ。

「そつ。炎を注入すれば時間に限界があれど、命の変わりに使えると・・・何だつたつけな・・・名前は忘れたがある教団が言つていてたんだが・・・忘れたな。」

言葉が出なくなる。その教団の意図も全く分からぬ。

「いや、君とその子を調べたいので近々伺いたいのだが。」

「ギルドにですか？構いませんし、その子には私から掛け合つて見ますが・・・」

「ユレイダにはオレから掛け合つてみるから心配するな。これでも学者の一人だからな。」

「ココまで教えてくれた人なのだから信用に値するだろ。」

「そうですか・・・ありが・・・

そこまで言つてドアを出ようとしたときある事を思い出す。

「あの・・・本返してください。」

「くつ、ばれたか・・・」

「見当たらないな・・・」

レディットは楽ながらも仕事を一つ終えてから市民図書館で今朝の出来事に関する書物を探していた。

「まずなんて調べたらいいのか・・・」

病氣に関する文献を調べたがただの熱風邪なら仕事もままならないのだろうがレディットの場合常時体温が40度ほどあるのに仕事はいつもどおり出来た。

それにカーリーの家にあつたなら図書館に本があつてもおかしくないだろ？

「お、居た居た。」

闇雲に探していると後ろから聞き覚えのある声がする。「何探してるのでかい？」

「フォーゲルさん！？」

私服で現れた彼女の服装は意外と女の子らしかった。

「最近君、悩み事があるみたいな顔してるし、それに今日の朝の事も気になつたしね・・・おそらく夢交換だろ？紋章からして。」

「知つてるんですか？」

「ああ。支部長から昔聞いたよ。でも力が強くなるつてことは・・・」

またフォーゲルにも何か気になる事があるようだ。「いや、『めん。なんでもない。で、何を探しているんだい？』

これだけ夢交換に詳しい人が多いなら、本を探す必要もないだろう。「あの・・・正直ミヤビのことも今朝の事も全然分からんいで調べてしまおうかと。」

レディットのその言葉を聞くとフォーゲルはにっこりと笑う。

「じゃあ、教えてあげるから私とデーターしよつーーー！」

「え？」

今の状況と全く関係のない単語に思わず反応する。

「や、いくよ！ー！」

結局何も調べられないまま図書館を後にした。

「ここが、百貨店で……」

「あのぉ……」

「デートといった割にはさつきかかフォーゲルは観光案内のようなことをばかりしている。

百貨店、フォーゲルお勧めの喫茶店などレディットが教えてほしい事とは全く関係のない事ばかりしている。

「あの、いい加減教えてくださいよ……」

恐る恐る尋ねるとフォーゲルは笑顔を全く崩さずに答える。

「次が最後だから、ね」

わけも分からずフォーゲルについていくと、ノーマット氏が襲われた場所に出る。やはりココだけ周囲とはなっている空気が違う。ごみが散らかっているとか、不良がたまっているとかいう分かりやすい物ではない。

「ここ、覚えているでしょ。ここね、人がいなのはマフィアの縄張りだからなの。」

「マフィア？ 警察は摘発しないんですか？」

普通ならマフィアは警察が摘発して逮捕及び解散が出来るのだが、何故しないのかが疑問だった。

「警察は動けないの。」フォーゲルの珍しいまじめムードにレディットも飲まれる。「警察つて国の機関でしょ。だから政府や議会の承認がないと動けないの。で、この前ノーマット氏が言つていたように、議会にはドイツ人の議員がいるって。」

「それが何か？」

フォーゲルが人差し指を立てる。まるで探偵。

「ノーマット氏の事件も絡めて、こう仮説を立てるとうまくいく。

1. 犯人はドイツ人議会員でそれらがマフィアを金で雇つて、自分たちの意見を通すために他の議員を襲わせたり、その他汚れ仕事をさせている。

2・ それらの議員は、マフィアが有名になり摘発されそうになる
と、その要請を力づくで蹴つて軍や警察が動くのを防いでいる。

ところのまじめだらうか。まだまだ推理段階でなんともいえない
どね。」

リースといこじこが抜けてこるより見てとても頭がいいんだと
思い知らされる。

そこまで言こ切るとフォーゲルはやつと普段の顔に戻る。

「さ、帰ろう！…もう遅いからな」

確かにもう夕日は落ちかけていた。「よし。またテーントしなつー。」

今日はレディットの初デートに数えていいのだらうか。

真実の端の端（後書き）

遅くなつて申し訳ないです。

リリミ田舎アヒトをつかひれす・・・

そうだ！！新作、投稿させていただきました。

講義也想動報紙で（るや

と二つねで「これからもよろしくおねがいします。」

b
y
レ
1

今思えば、3日前のフォーゲルはデータによって悩みの種を解決するのに必要な情報をくれたのではないだろうか。

そう考えると優しさに溢れているのかもしれないが、政治的な問題まで絡んでくるとなるとレディットひとりで解決するのは無理に近い物だと思い知らされる。

結局時間の都合上、カーリーによる検査は大分あととなってしまつたので、そこまで謎が解ける事はないのだろう。

それよりも今は・・・

「あつつい・・・」

リースとフォーゲルが半袖の制服を腕まくりし、もうノースリーブになつていて。だらしないにも程がある。

仕方ないのかもしれない。9月初旬の猛暑の中なのに特務室のクーラーは見事に壊れていた。

それは昨日

「ひまー・・・」

仕事が確實にあるという職業ではないため、時折ぱつたりと仕事がなくなるときがある。

今はそういう意味で沈んでいる時期なのだ。

そういう場合、他の部署に分けてもらう事もできないし、急な依頼が入るかもしれないで、サボつて外に出るわけにも行かない。要是部屋の中にこもりきりなのだ。

「ああああああああ・・・」

さつきからリースは扇風機で遊んでいる。冷暖房は使い放題なのでその辺で困る事がないのが唯一の救いだ。

「暇だからなんかやろう・・・」

扇風機にも飽きてきたのかリースはレディットが来たときからずっと

と閉ざされている棚を開く。

レディットは今まで重要な書類だと、緊急時に必要な物が入っている物だと思っていた。が、違う。

中にはすじろくやトランプ、絶対仕事場に要らない物が入っている。（何でこんな物が・・・）

どうやら暇つぶし用に常時装備しているようだ。

「これでもやりましょ。」

そう言つてリースは的のような物を取り出す。

「それは・・・？」

「これは能力を使った遊び・・・いや、戦いよ。」

最後の不吉な一言にみんながまさかといった顔で振り向く。「今日の昼食をかけます！！」

今まで読書をしてたクレヴァーも、退屈さうに外を見ていたロゼットも、半分寝ていたフォーゲルまでもが厳しい顔に変わる。

「どういふことですか？」

どうやら時折特務室ではこれを行つていいようだが、その重要さと厳しさを理解していないレディットとミヤビは困惑しきりでいい。

「分かつていねレディット君。この暑い中食堂まで言つてご飯を食べるのはとても厳しい。だからこのゲームで負けたものが自腹で外まで買出しに行かされるのだよ。」

確かに外の気温は40度近く。そんな中、関係者食堂で悠長に昼食を食べる猛者はいないだろう。かといって最寄のパン屋などに行くにも遠い。つまりみんな口の下に出たくないのだ。

「ルールは簡単、フォーゲルが作った紙人形浮かべてそれに能力を当てて誰かの的に当てるの。当てられた人は買出し決定！！」
分かりやすいルールだが皆の目はもう血眼だった。

合図と同時にフォーゲルが紙人形を飛ばす。

瞬く間もなくクレヴァーがゴム弾を撃ち弾き飛ばす。

ものすごい速さで紙人形はフォーゲルの元へと飛んでいく。

「私がっ！」

あわてて紙で作った剣のような物ではじく。

リース、ロゼット・・・弾くごとにどんどん加速していく。

（どんだけ必死なんだこの人たちは・・・）

レディットが冷ややかな目で他人事のように見ていると

「甘い！？」

油断を見抜いたのかリースがこちらに弾いてくる。

紙なのにもかかわらず、軽くプロの野球選手の剛速球くらいの速さが出ている。

「なっ・・・・・・」

突然弾き返そうとしたので炎を制御しきれず、ほぼ最大威力で弾く。何とか燃やさないようにはじめに力を制御したが、炎の大きさは能力が強力になつたと思われる今朝のまだ。

狙いをつけられなかつた紙人形は、まっすぐ審判役のミヤビの元へと飛んでいく。

「ハッ、嘘！？嘘！？嘘！？」

どうする事もできずにミヤビは戸惑いつばかりだ。

「ミヤビ！？」

誰もが危ない！？と思つた瞬間。

「キヤアアアアアアアア！」

ミヤビの体が一瞬だけまばゆい光を出して紙人形を弾く。そして真っ先にエアコンへ・・・

という経緯で業者が来るまでエアコンが使えなくなつたのだ。

エアコンが壊れた事よりも、ミヤビが何らかの能力を使つたと思われる事実自体にみんなは驚いていた。

「すいません。私が・・・」

ミヤビが申し訳なさそうな顔をする。

その顔を見ているとレディットは申し訳なくなつてくれる。

「いえ、ミヤビより俺が油断していたからです・・・」

「もう！」一人とも気にしないの……ミヤビちゃんが能力者だと分かつてよかつたし、ね！」

とはいってもこんな残暑の真つ只中にエアコンがないのはきつすぎる。

「あつついわね……結局みんなで昼食、買いに言つたしね。」

どうせ今日も昼食を買いに行かなればいけないのだ。

覚悟を決めて買い物に行こうとする、タイミングよく他の部署の人間が現れる。

「すみません……うわっ、暑い……あのレディット・ギルバーツ君とミヤビ・センドウさんは？」

その人もさすがに異様な暑さに気づいたのか身を引きながらたずねる。

「はい……僕ですが。」

「あの……支部長が呼んでいるので支部長室までと……」

レディットは汗だくでふらふらになりながらも立ち上がり、その人についていく。

しばらく歩いてくるとさすがに気になつたのか、特務室について聞いてくる。

「あそこいつてや……なんであんなに暑かつたの？」

まあ当然の疑問だろう。

「昨日エアコンが壊れてしまいまして……サボるわけにもいかないの。」

「特務室の人つてさ……自由だよね。いいなあ」

確かに特別扱いを受けている分、他人から恨まれたり、妬まれたりする事も少くないのだろう。

チラリと見える能力者への特別視は、力を持たないものにとつて許しがたいのだろう。

そういう特別扱いはレディットも嫌いであった。

「まあいいや、ごめんね。君も能力者なのにこんな話聞いてもうらう。これから会うこともあるかもしれないし、よろしくね。」

そういうつて彼女はその場を立ち去つてしまつ。

「名前聞いてないんだが・・・」

今のところはつきりひらとまこえないミヤビは、この問題に対しどんな心境なのだろう。

さすがにもう緊張はなかつたが、今更用件があるのかどうかも疑問だつた。

ノックをして中に入ると相変わらず無表情なコレイダが座つてゐる。「やあ、ミヤビ君、レディット君にこには慣れたかね？」

「はい。ところで何のようですか？」

夢の中の一件のせいコレイットは自然とコレイダに不信感を抱いてしまつていた。

なぜなら・・・「一トからチラリと見えるはずの左腕がないから。だが今考えて、夢が眞実だとしても、なぜコレイダがミヤビを封印する必要があつたのか全く想像がつかない。

「そうだな。用件に移ろい。君たちはまだ若いだろう。こんな年で働きづめは良くないと想つんだ。」

いきなりの深刻な話に一人は戸惑つてしまつ。「そこで、ギルドのほうから助成金を出して君たちには学校に通つてもらいたいんだ。」「学校ですか・・・」

確かに年を考えれば珍しくはない、つていうか当たり前なのだが、生活費やミヤビの順応性を考えると万事OKというわけにもいかない。

「君たちは一人とも働いてゐるし、生活のほうは問題ないだらう。まあ決めるのは君たちしだいだな。」

「僕たちの待遇のよさは気持ちが悪いくらいですね？」

「ああ。君たちは特別だからな・・・」

レディットが皮肉をこめたつもりの質問をしたが、コレイダはなぜか真剣に返してくる。

珍しく強気に出るも、すっかりレディットは調子をへるわされてし

まう。

「・・・僕はかまわないですか」「ミヤビは？」

「私もそれでいいです・・・」

「そうか。それじゃ手続きはこっちで済ませておくから。」
またもや早々と用件が終わってしまいそのので、去り際にレーティ
ツトは一つ聞いてみる。

「その左手は、景色の塔でなくされましたか？」

その質問をした瞬間、初めてユレイダが表情を乱す。

「そうか・・・君も夢交換を・・・だがその話は後だ。」

問題を後回しにされたとはいえ、また一步謎に近づけた気がした。
部屋を出てしばらく歩いていると珍しくミヤビが袖を引っ張つて話
しかけてくる。

「ね、ねえ・・学校つてさ・・・勉強するといりでしょ？そんなど
ころ私が言つても大丈夫なのかな？」

どうやら基礎知識だけでは想像がつかないらしく、緊張しているよ
うだ。

そういう「えいばど」の学校に行くのかも聞き忘れた。

「大丈夫だと思うよ。いざとなつたら僕が・・・」

そこまでいったところ小つ恥ずかしくなり、言葉を止める。
以前なら「どうしたの？」と近すぎるくらいの距離で覗き込んでき
たミヤビも今は無言で歩いている。

特務室に帰つてくると、またあの異様な熱氣に襲われ、一気に元氣
を奪われる。

「何の用件だつた？」

汗をかきすぎてげつそりしているリースが、睨むよつに聞いてくる。

「皆さん大丈夫ですか？・・・まあ、こっちの用件は僕とミヤビの
通学に関することです。ギルドのほうから助成金を出して貰えると
別にどちらでもいいんですが。」

「そ、学校・・・」そういう終えると、何か閃いたよつてリース
が立ち上がる。「どこの学校！？」

「すみません。聞いてないです。どこの学校かは。」

それを聞くとリースは内線をかけ始める。

「もしもし、コレイダさん? どこの学校にするの? · · · 決まってないの! ? じゃあ、マルフ学園で。 · · · うん。 あそこなら私のツテもあるから! ! 」

よくよく聞けば支部長にタメ口であつたがそこはつっこまない。それよりも「ツテがある」の一言にはいやな予感を覚えた。電話が終わると今まで暑さで元気がなかつたのが嘘のように、何かを想像してにやけている。

レディットは寒氣を覚えた。

部屋に帰るとレディットは真つ先に電話を取る。

『もしもし? 』

「もしもしルッカか? 僕も学校通う事になつたよ。」

『ほんとに! ? 良かつたじゃない! ! でどこの通つの? 』

どうやら喜んでくれているようだ。まあ実際、一番進学を勧めていたのもルッカだつたである。

『えつと · · マルフ学園 · · · ? 』

うろ覚えの名前を口にすると、ルッカが電話口からでも分かるほどに周りにいる人間（おそらくメイド）と騒いでいる。『えつと · · · どうした? 』

『あ、覚えてないな! ? 私もマルフなの! ! 』

どこかで聞いたような気もするがレディット自身、学校という物に興味がなかつたため、覚えてなかつたのかもしれない。

『い、ごめん · · · 』

『いいわよ、待つてるからね』

電話はそこで切れる。

兎にも角にも知り合いがいるならそれなりにやつていけるだらう。

問題はミヤビのほうである。まだ塔から出て一ヶ月も経っていないところのにいきなり一般人と同じことができるのかが不安だつた。

「な、なあ・・・ミヤビ・・・

まだ慣れない胸の高鳴りはまるでミヤビとの接触を避けているようだ。「無理することないんだぞ。君はまだ外に出るのは早い位だし・・・

可愛そなのは分かつていただがレディットはそれ以上に心配だつた。「いいの・・・私が決めた事だから・・・」

心配されたのが照れくさいのかミヤビは顔を真っ赤にして伏せる。それでもまっすぐな目をしている。

ミヤビの決心はどうやら強いようだ。

その心配はただ、レディットのわだかまりを増やすだけだった。

リースに聞けばマルフ学園とは、シェダール中の金持ちかつ頭のいい秀才が集まる学校なのに、校風が特殊という理由から変わった学校と呼ばれているらしい。

なぜ王女であるルッカがそんな学園に入学しているかも、リースが何を思つて進めたのかも全く分からないので、不安は募る一方だつた。

「これが標準服だけど、レディット君は、ギルド用に特注させてもらつたわ。ほら、背中にギルドの紋章!」

今はレディットの部屋で制服合わせをしていた。

これまたなぜか楽しそうに頼んでおいた制服をリースが手渡していく。

ミヤビはすでに受け取り、着替えている真っ最中だ。

「もうすぐ学園祭でしょ。この時期に編入したら大変ね。」

確かに9月は学園祭の時期であるが、レディットは学園祭という物を体験した事がなかつたため、想像がつかなかつた。

マルフ学園はなぜかとても制服が多く、標準服、式典のときに着る礼服、体育授業時に着る体操服、掃除等のときに着るつなぎ、水着に武道着に生徒会委員専用制服、更には看護師服やなぜか調理服まであり、そのすべてにギルドの紋章が刻まれていてレディットは少

し小っ恥ずかしかった。

測つてもないのにサイズがぴったりな制服を羽織るとまだ硬く腕が動かしにくい。

「うんうん。一人ともいいわよ。」

後ろを見るといつの中にか着替え終わつたミヤビが立つてゐる。

「あんまり見ないでよ・・・・」

ミヤビが頬を赤らめながら言つ。

しばらく体を動かしているとある事に気づく。

（炎が出しつくい・・・・？）

少し力をこめただけでは炎が出ないのだ。

「そうなの。それは肩と首に制御装置みたいなのを作つて取り付けてたの。」

久しぶりに心を読まれた氣がする。「レディット君。もう分かつてると思うけど、この前から急に大きくなつた炎を完全に制御できないの。ちなみにあの暑い部屋にいるとき、汗と一緒に駄々漏れだつたわよ。」

己の未熟さを感じながらも、自分の特別さを実感してしまつ。おそらくこれも能力者であることを絶対的にではないが隠す物だろう。

「じゃあ、明日から学勉も仕事も怠ることなくがんばつてね。」

それだけ最後に言つとコースは部屋から出て行く。ミヤビは姿見で襟を整えている。

（明日からなのにな・・・・）

レディットは少し通学が楽しみになつていた。

117の日常へ・・・(後書き)

暑いですね・・・
だからといってずっとクーラーにあたつていると体を壊してしまつ
らしいです。
気をつけてください。

それよりもちょっと次回予告でもしましょ。
マルフ学園に入学したレディットとミヤビは一つの日常の上に立つ
ことに・・・
学園とギルド。その一つから二人はどう変わっていくのか?
そしてリースの予想通り学園のほうでは学園祭の準備へ・・・
特殊な校風が故の学園祭とは?

- ・・・堅苦しくもこれにて。
- 次回もどうぞよろしくです

レイ

by

レティイットとミヤビは今、マルフ学園の学園長室の前に来ていた。緊張と期待を胸に口まで来た。

それこそ今朝なんて、レティイットが何かの物音に耳覚めて時計を見るとまだ時だった。

何かと思って体を起こすとミヤビが姿見の前で嬉しそうに、しかも鼻歌交じりに制服をあてがっていたのだ。

ミヤビがレティイットに気づいていなかつたのか、ずっとやつてる物だから気まずくなつてレティイットが「似合つてゐるぞ」と声をかけた途端顔を真つ赤にして飛び退く、なんてことがあつたのだ。

楽しみに思いすぎるのもなんというか・・・

さすが金持ち学校。学園長室に来るまでに通つた廊下や中庭だけでも、もの凄く広く、廊下にカーペットが敷いてあるのには本当に驚いた。

この学校の授業は基本的に4時限目までで間に合ひつつに組まれており、午後からは仕事が出来るのでその心配は必要なかつたが、夏休みも時折登校する必要があつたので、休み返上は覚悟しなければいけなかつた。

最初に支部長室のドアを叩いたのと同じような気持ちを胸にノックをする。

「どうぞ。」

中にはいたのは白いひげが特徴的な老人だつた。イメージ、サンタさん。「ギルバーツ君とミヤビさんだね。ようこそわがマルフへ。学力調査で補習は要らないという結果だったので今日から早速授業に参加でいいね。」

事前調査みたいな感じでやつた問題は意外と出来たのでレティイットも自分自身驚きだつた。

「はい。特に問題はないです。」

「それで、ギルドに勤めているという事だが、許可はあるしてあるので緊急時などは早退してくれて構わないよ。」

ユレイダもリースも手回しが早い物で、何一つ不自由はなさそうだ。

「ギルバーツ君はルックセンカ王女の幼馴染だつたね。二人とも王女と同じクラスで言いかね。」

どうやらルツカは手続き上では身分は隠さないようだ。ただそれを知らない人間が一人。

「ええっ！！レディットそんな偉い人だつたの！？」

ミヤビが声を大にして驚く。まあ、身分を隠してるといえ偉いのだろうが、幼い頃から結構一緒にいたので、そんなのは今更気にしていない。

本人曰く「一人の人間として接してほしい」らしい。

「まあ、昔から知ってるってだけだよ。」

「それじゃあ、教室に行きましょうか。」

そういうて学園長が立ち上がる。

「え！？学園長も行くんですか？」

「何を言つてるんですか。私は学園長だから直接紹介して差し上げるのが礼儀ですよ。」

なんとなく特殊な校風は誰が作つたのかわかつた。

「ね～ね～、今日来る転校生一人はルツカの幼馴染でしょ。男？女？」

「教えて！教えて！」

ルツカは教室で友人に囲まれて質問攻めにされていた。

「あ～そうだよ、男だけど期待しないほうがいいわよ。もう一人もアイツの連れらしいし。」

さつきから同じ質問ばかりで疲れる。

もう一人は女だという噂も流れ、女子も男子もざわめき立つてている。自分でも言えないが、みんな良いとこの子供とは思えない。

「イケメン？身長は？趣味は？」

「イケメンかどうかは幼馴染が言つてもあれだし、そんなのあいつ本人に聞きなよ・・・」

「もう！ルツカの意地悪！！」

と、言われても幼馴染を褒めちぎる氣にはならない。とはいってもルツカも8月の終わりから会つていないので、少しばかり変化の期待をしていた。

「はい！HR始めるから席に着いて！！」

教師が来て、みんな席に着いてもざわめきは収まらない。「みんなが期待してるのは多分転校生でしょ？どうぞ学園長お入りください。」

「なんだ、学園長か・・・」

みんなががっかりといった表情をする。学園長に対しなんという反応。

「みなさんご安心を、一人ともどうぞ。」

今度こそ転校生が入つてくる。瞬間、ざわめきがいつそう大きくなる。

もちろんルツカも驚く。先に入つてきたアッシュブルondenの髪をした青年の後ろには目を引くほどの中学生がいたのだから。男子はそれにざわめいている。こういうとき男子生徒は『もしも付き合つたら・・・』などという妄想でもしているのだろうか。

「レディット・ギルバーツです。よろしくお願いします。」

「ミヤビ・センドウです・・・」

名前を聞いて更に驚く。名前の感じからして・・・日本人だったからである。

驚いた事は正確に言うと、日本人である事ではなく、レディットが日本人をつれている事であった。だつてレディットは・・・

転校生にとつて最初の休み時間は地獄である。目を付けられればとりあえず質問されまくるから。

その通りレティットとミヤビはそれぞれ質問の嵐を受けていた。

その大半は女子である。

「ギルドで働いてるんでしょ？」

「ええ、まあ・・・学園と両立で頑張りますよ。」

「ルツカの幼馴染だつたんでしょう？」

「そうですよ。」

「ルツカって昔どんな子だつた？」

急に質問が変わると、地獄耳でもつかつたかのようにルツカが割り込んでくる。

「ちょっと、私は関係ないでしょ！？レティットもちょっと来て。」

そう言つて廊下に連れ出される。「どうこうこと！？なんであなたが日本人と・・・」

「昔の事は関係ないだろ・・・それにあいつ、身寄りがないから・・・同棲してるんだよ。」

少しだけ迷つたが、周りのみんなに聞こえないように小声で話す。いろいろな意味で変な噂でも流れたらたまらない。

「同棲！？」

にもかかわらずルツカが大声を出す。

「バカ！大聲出したら聞こえるだろ！！」

幸い誰にも聞こえていないようだ。レティットはそつと胸をなでおろす。

ミヤビもどうやら男子に質問攻めにされているようだ。

あまり人と触れ合えないミヤビにとって、それがいいのかどうかは今の段階では分からないが。

とりあえずうまくやれない事はなさそうだ。

そんなこんなしているうちに最初の授業が始まる。

それはリースが予言したとおり文化祭についてだつた。

話によれば、例年奇抜な出し物で結構な人数の人々が来るらしい。奇抜な出し物と聞いていい予感はないが。

今回は使える備品の説明や電力供給の割合など、専門的な話を「素

人に話してどうするんだ?」とか考えながら聞いていたため、奇抜な出し物だのなんだのは分からなかつた。

「ちょっと、ちょっと、君!」

授業がすべて終わり、廊下を歩いていると、誰かに話しかけられる。聞きなれたようなおつとり口調に振り向くと誰かに似ている人がいる。

「生徒会長の二ーナ・エルモンドよ。レディット君とミヤビちゃんね。ちょっと来て頂戴。」

（エルモンド?）どこかで・・・

それだけ言つと生徒会長と名乗るその人は腕を引っ張つてレディットとミヤビを連れ出そうとする。

「だ、誰ですか?」

「あれ? 姉さんから聞いてないの? 私はリースの妹よ。」

エルモンドに納得すると共に、リースが言つていた『ツテ』というのも理解する。

それを知つて改めてみると、とても似ている。雰囲気も声色も見た目もそつくりだ。「良いからちょっと来て頂戴。」

仕方なく一人がついていくと、たどり着いた部屋には『生徒会室』と書かれていた。

二ーナに無理やり中に引き込まれると、中には数人しか人間がいない。見たことのあるような景色。それはまるで、特務班のような景色だった。

「お、来た来た。」

そう言って振り向いた人数は4人・・・まんま特務室では?「副会長のジャンだよ。よろしく。」

そういうて自己紹介してきた男性。イメージ・クレヴァー。「ジャン、ちょっと・・・」

二ーナがジャンに耳打ちする。それを聞いたジャンが頷き、

「ミヤビちゃん。僕らと一緒に学園を歩き回りうつか。
と、唐突に切り出す。

「ええ！？レディットは？仕事だつてあるし……」

「大丈夫よ。姉さんに許可とつてあるし。」

それだけ伝えると、ミヤビと他の生徒会委員は出て行つてしまつ。つまり今は二ーナとレディット一人だけになつてしまつた。

「あ、あはは……」

心中で「超帰りてええええええええええええええ！」と思いつながらもレディットは何とか苦笑い。

リースも何を思つて許可したのか分からぬ。

それでもさすが姉妹。どちらも無茶苦茶な割には信頼を持っている。

「ねえレディット君。君、能力持つよね。」

「え、ええ、まあ……」

いきなりの話題の展開に戸惑つていると。

「炎……」

「なつ……！」

いきなり二ーナが体を触つてくる。「な、なにを……」

「静かにして頂戴。」

レディットの唇に人差し指を当て静肅を促す。ずりずりと後ずさりするも背中が壁に当たる。

逃げられないのをいい事に二ーナはどんどん触つてくる。耳から腰までお構いなし。

しかし左手を触り始めたところで二ーナの手が止まる。

「この紋章……」

どうやら夢交換のときの左手の紋章を見ているようだ。

「これは……」

「言葉にする必要はないわ。私、人の心読めるから」

レディットの説明は衝撃の一言によつて遮られる。これが能力なら遺伝的にリースが持つていておかしくないだろつ。

しかしそういつた二ーナの顔はいやに悲しげだつた。

人の心が読めるゆえに人間関係がうまくいっていらないというわけでもなく、レディットに知られたくないたという顔でもなく、形容できない何かを感じているようだつた。

「ミヤビちゃんとか……？」これつて……！？

また心を読んだようなことを言つと、今度は驚いたような顔になる。何度も何度も紋章を触り何かを確かめているようだ。

「なんですか？」

「レディット君、死んだ事はある？」

なにを言つたと思えばわけの分からない事を言ひ出す。表情は以外にも真剣だ。

何か裏があるのかもしないが、今のレディットに読みきれるはずもなく、答えは正直に「NO」。

「も、もう良いでしょーーー？」

恥ずかしくなりレディットが手を振りほどくと、今度はソファに倒れてしまつ。

レディットが下で二一ナが上。つまり馬乗り状態。

イケナイ状態のような気がして早く降りてほしいのだが、二一ナにその気は全くないようだ。

ほのかに香る甘いにおいが鼻腔をくすぐり、異性慣れしていないレディットは鼻血が出そうになる。

「ただいま。・・・あれ？ 入つてよかつた？」

結局どいてもらえないままドアが開いてしまつ。

ドアを開けたジャンの後ろにいるミヤビは目を見開いてこちらを見ている。

「いえ、問題ないわよ。」

そのくせどいうとする気配は微塵もない。「事故だから。」

しかしそれでは納得いかないのかミヤビが怒りに満ちた表情をしている。

何故そのような表情をされるのかは分からないうが。

「ち、違うんだミヤビ……！」

しかし体勢の変わつていなここの状況でこくら弁解しても無駄であった。

田いつこに涙をためたミヤビは走つて部屋を出て行く。

最近やつと会話も戻つてきたのこ、また会話がなくなる。

あわてて「一ノナをどかこミヤビを連おつとむる、一ノナに腕をつかまれる。

「まつて。アクシデントだから今日は帰つてもいいけど今日のことは呼んだ用件を伝えるわ。あなたたちを生徒会に入れてやつてくれと姉さんに頼まれたの。ミヤビちゃんにも話しどいてね。」

「はい・・・・」

そういうとテイシアがヤビを追つた。

どうもレイです。

今回、悩みました。それはニーナとレイディットのくだり。正直絶対に//ヤビの嫉妬心を田覗めさせぬ。というよく分からぬ確固たる意思の元、書いていたのですが、ニーナは後々出てくるキヤラなのでレイディットとの友好を程よく崩すといった感じで大分ハードルが上がりました。

「ごめんなさい。いろいろ話を・・・

それと、自分で挿絵書いてみよつかな・・・なんて考えています。（多分やらないです。）

次回も精進。

レイ

by

意外とミヤビは足が速く、結局、ギルドにつくまで追いつけなかつた。ノンストップで部屋の前まで来ると、中から物音がする。

あけようとするが、鍵がかけられている。

さすがに鍵は持つていたが、強引にあけるのも気がひけたのでドア越しに声をかけてみる。

「あの～ミヤビさん・・・？」

「・・・」

中から返事は聞こえない。相当怒つていいようだ。

「じめん。本当にじめん。あれは事故なんだよ。」

「・・・」

弁解むなしく、また無視されてしまつ。

諦めて一度部屋を離れて文句を言つに行へることにした。

「ちょっとリースさん！！

勢いよく扉を開けると、暇そうにリースが振り向く。

いやな話、今更ながら特務班は給料がいい。

歩合制だが、最低賃金は確保されているし、魔獣退治ともなれば中級ランクでも一回5000円は堅い。

そう考えれば学校に通いながらも生活は出来るし、暇でも特別みんな焦つたりはしない。この前のような白体は例外だが。

「あら、レディット君遅かつたわね。二ーナには会えた？」

「その二ーナさんが問題なんですよーー。」

「あの子が何かした？」

そういうわれると二ーナに直接の罪はないので言葉が詰まる。

「あ、っと・・・急に生徒会つてどうしたことですかー？」

「そっちのほうが便利でしょ？」

「そうなんですけど・・・」

押し付けられた仕事でも一応はこなす主義のレディットだが、生徒会はついにめんどくさいにおいしかしない。

二ーナのせい（？）でミヤビが怒ってしまったことへのやり場のない怒りがレディットの中に渦巻く。

とりあえず自分が悪いのだと言い聞かせる。

しかし、二ーナはある時気になることを一つだけ言っていた。

『君、死んだことある？』

あの言葉の真意はいつたいなんだつたのだろうか。
気になるが、本人以外に聞いてどうなるかは分からないので聞くのはやめたほうがいいだろう。

「まあ、良いじゃない。ところで何で学園制服のままなの？」
「これは・・・部屋に入る前にこっちに来たので」
リースにばれると面倒になりそつなので適当にじまかす。

「そういえばミヤビちゃんは？」

「えっと・・・疲れたようなので部屋にいます。」

心の読めるリースに嘘をついても仕方ないのかもしれないが、リースは空氣を読んでか、心を読まなかつたのか特に何も言わないで頷く。

とりあえずとはいえてレディットの報告は終わった。

と、不意に携帯の着信がなる。フォーゲルのようだ。

「もしもし・・・え？」

驚いたような顔をするトレディットを一瞥してから部屋を出て行つてしまつた。

ミヤビは混乱していた。

ずっと外の世界を知らなかつたからかもしれないが、今回のような気持ちちは初めてだつた。

あの二ーナという女性がレディットの上に乗つかつてゐるのを見たとき、事故とは分かつていてもとんでもないいやな気持ちになつた。

怒りや悲しみ、酩酊感や焦燥感のようなものではない何か。知っているようでも知らない何か。

レディットに悪いと思いつつも、気持ちの整理がつかない以上、謝る気にもならない。

さつきまでドアの外でレディットの声がしていたが、今はもうしない。

「レディットが悪いのよ・・・」

部屋の隅でボソリと呟くがそれも空しい。

この気持ちを解消するには誰かに相談するよりないと考え、電話を手に取る。

とはいっても知っている電話番号は一つ。

ひとつはレディットの番号。

二つ目はフォーゲルの携帯番号。もちろんこちらを入力する。

『もしもし・・・』

「私です・・・」

『え?』ドアを開け閉めする一拍の後、フォーゲルが小声で話し始める。『もしもし、ミヤビ君か? 今どこだい?』

「レディットの部屋・・・」

話しているうちに、フォーゲルもミヤビのテンションの低さを察したらしい、問い合わせられる。

『・・・何かあったのかい?』

「レディットと喧嘩をしちゃって・・・」

正確にはただ自分が腹を立ててているだけなのだが、人のせいにしなければやつていられない。

とりあえず今日学園であった事をアレンジしながら話すと、「レディットと一人が気まずいなら・・・」と、フォーゲルはどうやら部屋に招いてくれるらしい。

「本当に?」

『ああ。女子寮の4階、12号室だ。鍵はかかっているけどすぐに戻るからまつっていてくれないか。』

「はい・・・・・」

支度を終え、部屋を出ようとすると一つだけ心残りが生まれる。それはレディットにメモを残していったほうがいいのではないか。ところどころのもの。

こっちが一方的に腹を立てているだけの状況。何も残さずにレディットが部屋に帰ってきたら、優しい彼は、きっと心配して外に探しに言ってしまうのではないかと思つた。

迷つた結果、ミヤビ一言メッセージを残して部屋を出た。

レディットは少しだけ疲れていた。

二ーナとのやり取りによつて生まれた新たな疑問。その場でなぜかミヤビが怒つてしまい、人の感情を汲み取るのが得意ではないレディットは、原因不明のミヤビの怒りに翻弄されていた。

一日にたくさん問題を抱えすぎたのか、寄宿舎に帰る途中から足取りが重くなる。

だるい体を引きずり、部屋に帰るとドアノブに手をかけるのを戸惑う。

ミヤビになんていえばいいのか分からなかつた。

ミヤビの怒りは何なのだろうか分からないので何を謝ればいいのかも分からぬし、ギスギスしたままこの後生活を送るのかと思うとそれは辛い。

寄宿舎は満室らしく、ミヤビの部屋は作れないヒースも言つていた。

迷つていても仕方ないと覚悟を決め、ドアを開ける。

「え？」

部屋には誰もいなかつた。

いつもどおりの部屋は最初より物は増えたのに、何が足りない。見渡すとレディットの机の上、いなくなつたミヤビの変わりに白い紙がおかれている。

「・・・・・？」

気になつて開いてみると、思つたよりも分は短く、拙い字で一言。「今日はフォーゲルの部屋に泊まります。」と書いてあつた。

先ほどのフォーゲルの電話の意味を理解したといひで、氣づく。薄くて読み取れないが、その文の後に一回書いて消したような後がある。

何かと思つて擦りだしてみると、レディットは少し笑つてしまつ。「ゴメンネ。」

そう書いてあるように読めたのだ。

それと同時に視界が歪む。眩暈もする。こんな感覚はまだ夢交換したての頃みたいだ。

レディットは安心感と共にベッドに倒れこんだ。

「待たせたね。」

ミヤビが部屋の前で待つていると、ようやくフォーゲルが帰つてくる。

「すみません・・・」

「気にしないでくれ。ミヤビ君と話すいい機会だしね。」

そういうながらドアを開けて部屋にミヤビを招き入れる。

少しだけ意外だったのは、中性的な口調とは違い、部屋の中はピンクやオレンジ、黄色などで作られていて、女の子らしかつた。しかし所々ウマの置物だったり、変な壺など高級そうながらも謎の物体はあつたが。

レディットの部屋は色味に欠けるモノトーンばかりなので、新鮮だ。

「とりあえずかけてくれ。ミヤビ君、紅茶は飲めるだらう?」

そういうとフォーゲルはポットに火をつける。そしてこれまた高級そうな紅茶である。とうとうフォーゲルの私生活が謎になつていく。

「さてと・・・お待たせ。」

空氣をかえるように一声かけると、テーブルの上に紅茶を置く。

おおかた仲直りの仕方を知らないんだろう?・君も。レティッシュ君も。

「心の中でギクリと音がする。話を振り出す前からばれていたようだ。」

「君は「こまかすのが下手だな。声色と状況ですぐ分かっただよ。」

「・・・・・」

分かっていた上で今ここにいると思つと、よりいつそう恥ずかしくなる。

「まあ、恥ずかしがる事でもない。君は外の世界に接してこなかつたんだし」

「でもそれだけじゃ・・・・・」

そこまで言つとためつてしまつ。今この気持ちを「ヤバはつまく形容できなかつた。

「どうした?」

また分かりやすい顔をしてしまつっていたのか、フォーゲルに悟られる。

とりあえず自分の表せる範疇で説明を試みる。

「実は今・・・味わつた事のない気持ちなんです。今日学園でレティッシュが女人の人に乗つかられてて、それを見た瞬間、なんていうか・

・・いやな気持ちになつたといつか、それが原因でケンカを・・・

「ふむ・・・・」

そんなミヤビの、曖昧かつ抽象的な表現でも、フォーゲルは何かを理解したようだ。

少し考え込むような表情をすると、紅茶を啜りながら語り始める。

「私も昔の記憶はないんだ・・・・」

全く関係のない話であり、最初は何の告白かと思つたが一拍おいてその意味を理解する。

「ええ!?」

「まあ、もつと小さい頃だな。たしか10歳ごろだったと思う。親に捨てられたのか、人質にでも取られていたのか、今となつてもわからぬけどね。」

「・・・・・」

今でさえ結構何事も気にしないような性格なのに、暗い過去を背負つていたとも思えないし、なにより今こうして話しているのは、開き直っているように見えた。

「親の顔も分からぬ身元不明の私を拾ってくれたのは支部長だつた。それで私に力があると分かるなり、特務班を作つて私を受け入れてくれたんだ。」

ユレイダの優しさと行動力にミヤビは感嘆する。しかし同時に、ユレイダと顔を合わせたときのやうな懐かしい感覚がする。

「そう。それはまるでユレイダが

「まあ、つまり私もここに来るまで君と同じ様な事があつた。でも、分からぬ事を分からぬまま終わらせるのも良くないだらう。」

「私から言えることは唯一つ。」

フォーゲルは一息飲み込む。ミヤビも生睡がのどを通り過ぎる。

「それは、君がレティット君を大切に思つてゐるが故の『嫉妬』といふ感情だ。」

「嫉妬？」

言葉として基礎知識だけはなぜかしつっていた。独占欲の一體であるとか。

ただそれも状況順ずるもの以上、その言葉に意味はないだらう。それよりも自分が言われて初めて「レティットを大切に思つてゐる」と氣づくと、体が熱くなる。

「言葉の意味なんて重要じやない。大切なのは君自身が君の心にどう順ずるか、だよ」

その言葉を聞いた瞬間、胸に何かが突き刺さる。

まるでミヤビは自分自身何がしたかったのか分かつたような、それでも何かによつてそれは縛り付けられてゐるような感じがした。

「君は今、どうしたい？」

「・・・うん！私レティットに謝つてみる……」

フォーゲルに最後の一押しを受けたかのようミヤビは立ち上がる。

「大丈夫。レディット君もきっと分かってくれるさ。」

それだけ聞くと、ミヤビは勢いよく部屋を飛び出した。

全速力で廊下を走るが、学園から走ってきたときのような息切れなどは全くなかった。

むしろ体は軽く、何にウキウキしているのか自分でも分からぬ。

「レディット！…あ…の…」

勢いよくドアを開け中に入るが、なぜか帰ってきているはずなのに鍵が開いている。

レディットは普段から恐ろしく用心深く、鍵をかけることを欠かさなかつた。

少し気を引き締めながら、部屋に入ると、レディットが机に突つ伏している。

「ねえ、レディット。」

今すぐ謝りたいミヤビが肩に触れた瞬間。「熱ッ！…」

レディットの全身が触ると身を引いてしまつほど、体温が高い。

「なに…これ…」

頭が回らなくなる。今まで意氣揚々と仲直りするつもりでここまで来たのに、目の前の相手が今、なぜか倒れている。

（

レディットの携帯が不意に鳴り、そこで意識を引きずり戻される。とりあえず電話に出てみる。

「もしもし？」

『その声…ミヤビか？』

『え？ ロゼットさん！？』

声の主は以外にも、一番無口で話す機会の少ないロゼットだった。レディットと話しているところもほとんど見ない。

『なぜお前がレディットの電話に？』

「大変なんす！…レディットが！レディットが！」

非常事態（？）の救いの手に思わず取り乱し、早口になる。

『落ち着け。何があつた？』

「あのレーティットの・・・体温がメチャクチャ高いんですー・汗も出でいて・・・全然起きないんです！」

『それはおそらくただの風邪だろう。タオルを冷やしてわきの下に挟ませる。まず服を着替えさせて汗をふき取るんだ。今介抱できるお前が取り乱すなよ。俺はいけないがお前でもやれるはずだ。体温は免疫力の促進の表れだから問題ない。仕事を休まれちゃ困るからな。早めに直すように言つとけ。』

それだけ告げると、ロゼットは余韻もなくきつてしまつた。一気に説明を受け何が何だかわからなくなりそうだった。それでも事細かく分かりやすい説明をしてくれたし、何より最後にねぎらいの言葉が入つていたのは感動した。

とりあえず今言われた事を全部やつてみるが、服を脱がしたりするのは恥ずかしく、思わず適当になつてしまつた。

適当な介抱で良いのかと思いつつも、結局謝れないままミヤビは眠りについた。

『ハヤの姫姫』（後書き）

申し訳ござりません。遅くなりましたのお久しぶり、レイです。
またり不定期更新の悪いところが出てしまいました。
すみません。

これからも精進が必要ですね。
それでは次回も。

レイ

b

「…………」

誰かが、誰かの名前を呼んでいる気がする。とても温かくて、優しい調が耳に響く。

虚ろな意識の中で、ミヤビは田を覚ました。

周りは見なれない景色覆われている。それなのに、懐かしい感覚がする。覚えていないだけのような、忘れているだけのような。そんな感覚がミヤビの脳裏をうごめいている。

気づけば、ありえない俯瞰の景色と浮遊感。初めてではないこのつアルすぎる夢。これは

「夢交換・・・?」

ミヤビは口からポロリとそう零していた。

以前にもした事があつた夢交換。レディットから概要だけ聞いたときは驚いた。夢を交換する、にわかには信じがたい事だった。

あの時、最初の夢交換で、レディットが出てきた見た夢は、田をそらしたくなるような光景だった。

レディットは体のいたるところに傷をつけられ、麻酔もなしにそこから何かを吸い出されていた。耳を塞ぎたくなるような悲鳴は今までよみがえる。本能に赴くままの夢では、残酷な事を隠してもくれない。

目覚めた後もミヤビはそれを、直接的にレディットに伝える事ができていなかつた。

しかし今度は違う。

もっと穏やかな景色。緑に囲まれたところに物静かな一軒の家が建つていて。

シェダールとは明らかに違う建築法の家。文化の違いが顕著に現れているようだが、ミヤビは思い出せない。これはどこの国の物で、自分とどうこうかかわりがあるのか。

だがその家にある物すべての名前を、ミヤビはなぜか知つてゐる。

縁側と呼ばれる、地面から50センチ程高い腰掛式のテラス。扉は木でできた骨組みに、紙か張つてある。たしか障子と/orやつだ。屋根に貼られているのは、特殊な石で出来た瓦と/orやつだ。

それらから他の物まで、すべての物の用途や名称が手ことりのようミニヤビには分かる。

「・・・・リード・・・

ボーッとしながらふと耳を澄ますと、さつき聞こえた声がまた聞こえる。

草木を搔き分け、声のしたほうに歩いていくと、稻穂と稻穂の間に出来た空間に一本の気があり、女性が木陰に座つて子供を膝枕している。

女性はミヤビと同じ、吸い込まれる様な闇色の髪と瞳。優しそうな表情は一度見たものの眼をひきつけて離れないほど、神々しく、美しい顔をしている。

だがそんな女性よりもミヤビの田をひきつたのは、膝枕される少年のほうである。顔立ちこそ母親と似ている物の、その女性と親子とは思えない、すべてを反射するかのようなアッシュブルーブランドをしている。

そう。見覚えのあるアッシュブルーブランドと緋色の瞳。

「レディット・・・・？」

それはさつきまでミヤビが看病していた彼そのものだつた。が、まだ幼さが残つてゐるし、なにより名前が違う。

母親と思しき人物が何回か呼びかけるうち、レディット(?)は眠ながらも田を覺ます。

一人で生きてきたといつ今のレディットの姿とはまるで正反対である。

「おはよう利道。よく眠れた?」

「うん・・・・・・・

利道。母親は確かにそう呼んでゐる。違う人物と考え

て良いほどの名前。しかし容姿は別人とは思えないほど似ていて、ミヤビの頭の中はいろんな情報が入り乱れ、混乱していた。それこそ、わずかながらの知つてている人間像が、音を立てて崩れていくようとしているのだから。

何か、夢交換で見る夢は、リアルで、現実味を帯びていて、この前のときもレディットのリアクションは、思い出したくもない過去を掘り返されて、いるような顔をしていたので、ミヤビは胸が痛くなるのを感じていた。

真実であるかないかは別として、普通に見ればただの仲のいい親子だった。

だがレディットは全く過去の話したがらないので、これが事実かどうかもわからない。

「さあ利道、家に帰るわよ。」

「え？ でもお父さんは？ 帰つてくるんでしょう？」

利道がそういつた瞬間、母親は一瞬困ったような表情をする。何か深い事情があるのだろうか。

「うーん・・・わからないわ。お父さん仕事があるもの。まあ、行きましょう。」

母親が利道の両の手を取り、少しだけ悲しげに家へと入ろうとする。その瞬間。ミヤビはとてもいやな予感がする。見上げると一機の飛行機が頭上を飛んでいる。その飛行機からどんなにいやな予感がする。まるでのどの奥に何かが這いずり回っているようで、ミヤビの鳥肌が一斉に立つ。

親子に知らせようとするが、今回もまた干渉する事ができないようで、伝わらない。

そして案の定、悪い予感が当たり飛行機から何かが投下される。突き抜ける蒼穹に放たれた一つ鈍色その何かがまばゆい光を放つたとき、急に意識が夢から離れて。

「・・・あ・・・・・」

レディッシュトは田が覚めると同時に腹部に重みを感じる。

視線をすらすと、そこにはミヤビが座つて寝ている。寝返りを打つていいのか、一晩中同じ体勢でいたせいで顔に跡がついて大変な事になつていて。

見れば、服は着替えをせられていて、わきの下には、濡れたタオルが挟まれていた。

昨日まで「イー！」とそっぽを向いて怒つていて、部屋にも帰つてきていなかつたのに、看病してくれた事を考へると、レディッシュトは田頭が熱くなるのを感じた。

そのおかげか、昨日まであつた氣だるさや眩暈は全く残つていない。ただ、レディッシュトは今日も夢を見た。今のこの状況から夢交換なのだろうと推測する。

今回の夢では、ミヤビが幼少期の頃の夢だつた。日本式の神社のようだつたが内容が把握しきれなかつた。

「起きたの……？」

起こしては悪いかと思い、そのままの寝ていると、やつとミヤビも田を覚ます。

下にしていた顔の左側だけ、見事なまでに寝癖が立つてしまつていてる。

「ああ、ありがとうな、ミヤビ。看病してくれたんだね！」

レディッシュトが素直に感謝を述べると、ミヤビは何かを思い出したかのように顔を真つ赤にする。

「で、でも私は……」

そこまで言つてミヤビはレディッシュトの顔を一瞥してから「なんでもない！ シャワー浴びてくる！」

ベッドの横から跳ね起きると勢いよくバスルームに入り、ドアが壊れんばかりに激しく閉めた。

「何だつて言うんだ……」

仲直りをしたと思ったらまた怒つてしまつ。オトメゴロロという奴は分かりにくい。

その後レディットがとりあえず朝ごはんを作つてはいるが、バスルームのほうから鼻歌が聞こえたような気もした。

学園生活も、慣れればそれまでで転校生フィーバーは終わりで、まだ2日目なのにと思うと少し短い気もしなくはなかつた。
普通の授業などそこそこレディットにとってはどうでもいいものだ。

たとえ就職難や不景氣でもすでに職場はあるから卒業を求めて良いので気が楽だった。

問題は学園祭についての事である。

怖があつた。

「さて、今日の議題は皆さんお待ちかね学園祭につれてです。」

ついに委員長もおかしくなったのか、ここに常識はないのか、とにかく不穏な一言が聞こえたため、レディットは思わず声を大にしてしまう。

「あれ？ そうか、レディット君とヤマちゃんは初めてなんだよね。説明を忘れていたよ」

得に悪びれる様子も、レディットの反応に驚くような事もない。何事もなかつたかのように、当たり前でない事を当たり前のように説明しようとすると・・・つまりレディットが推測するに、常識の裏の裏を言つた超非常識人となるだろう。だがそんな変わり者の集まり

を見るのが初めてでないのが悲しかつた。

「・・・えつと、ここの中園祭というのは基本形態として、当田は男女が逆転して行うんだよ、」

「服装や・・・口調とか、仕草も・・・？」

「オフコース！！」

さす後にそれはないだろ？と、レディットが恐る恐るした質問も「当たり前じゃん」見たいな雰囲気で流される。これについてはさすがにミヤビも驚いているようで、声は発せないものの、やや額から汗がにじみ出ている。

ここではレディットとミヤビ以外が常識だと思い知られる。

「問題はクラスごとの出し物です。去年は無難に喫茶店でしたが、今年はどうしましょうか？」

男女逆転喫茶・・・ギリギリセーフなのかもしないが、レディットはアウトな気がしてたまらない。

そもそも気持ちが悪くて需要があるのかどうかから疑問だし、こんな学園祭に本当に人が集まるのかがレディットには心配だった。

ただそれよりも重大なもんだが一つ。 レディット

は女装だけはごめんだった。

そんな心配など2人以外誰もしていないのか、さつき文句を言つていた生徒も楽しそうに話し合いに参加している。

「はい！案が出揃いました！！？創作劇　？水着喫茶　？屋外模擬店　です！！とりあえず挙手制の多数決で決めて、意見がある人はその後で申し出てください。」

委員長がそういうと、またみんな各自で話し合いを始める。

どれか選ばなければいけないと割り切り、レディットはいつも癖でまずデメリットを探す事にした。

まず？・・・自分が大役に抜擢されたあかつきには、もう最悪である。講堂でたくさんの人見られ、辱めを受ける事になる。

次に？・・・まず格好が恥ずかしすぎる。女子は何かしらの配慮があるだろうが、男子にいたつては一部の特殊な人間以外恥ずかしさ

で憤死するだろ？

最後に？・・・外という時点でアウトである。もはや来場者全員に見られることを覚悟しなくてはいけない。

どの選択肢も男女逆転祭である以上、最悪の結果となる気がレディットはしてならなかつた。

「ミヤビ・・・君はどれにすんの・・？」

レディットは自分で真剣に考えていると、ただのヘンタイサンになりかねない事に気づき、とりあえずミヤビに相談してみる。

「分かんないよ・・・でも、やるなら？か・・な？」

やはり予想通りの結果にひざを落とす。女子にとつてはこれが一番ましな意見だし、妥当だろ？

女子のほうが多いこのクラスで意見が割れる事も考えると、確実に？になるだろ？

「ルッカは！？」

藁にもすがる思いで、同意見の人を求めとりあえずルッカに聞いてみる。

「私は？ね。男子の女子水着なんて誰に需要があるのか分からないし、みんなこれが一番困らないと思つしね。まあ、レディットの場合・・・」

「やめてくれ」

遮りつつも、レディットは心中で大きくガツツポーズを決める。レディットも同意見だつたからだ。

劇なら、裏方に回るという事も可能なので一番の安全策がとれる。

「はい、そこまで。一人一回だけ手を挙げてください。」

レディットはこめかみに汗が流れるのを感じながら、ゴクリとつばを飲み込む。

「まず、劇がいいと思う人！！」

全力の祈りを込めながらレディットは手を挙げる。

だが周りを見渡してみると、手を挙げているのはレディットをあわせ9人ほど。全部で30人のこのクラスで半分取れないと厳しい。

「はい。10人ですね。じゃあ水着喫茶がいいと思う人！…」

（終わった……）

女子の票が集まりそうな水着喫茶で決まりだろ？とレディットが諦めかけて、顔を伏せた瞬間。

「はい。4人ですね。じゃあ模擬店がいいと思う人！…」

「え・・・・？」

4人。レディットは一瞬自分の耳を疑つたが、確かに今委員長はそういうつた。

数瞬の激動が頭の中を駆け巡り、すべての脳細胞を使って、やつと今の中の意味を理解する。

しかしレディットはガツツッポーズが出来なかつた。そう、これがダメだつたという事は模擬店になつてしまつたから。結局どちらに転んでも悪い結果にしかならないと、レディットは踏みつつもどれだけ模擬店をやりたいと言い出す人間がいるのかどうあえず見てみる。

が、そこで手を挙げている物は一人もいなかつた。

「はい。0人ですね。後の人はどうでも言いという事で。じゃあ今年は創作劇にしましよう！…」

「はああああああ！？」

『そんな選択肢もあつたの！？』といつミヤビとレディットの驚きを見事なまでのスルースキルで流して、そこかしこからパチパチと中途半端な拍手が起つる。

クラスの半分以上の人間がどうでもいいと選ぶとは正直驚き、呆れた。

「じゃあ、明日オーディションをします。実際に衣装を着る、ヴィジュアル審査と、演技審査をやるので、みんな気合を入れて化粧でもしてきてください。推薦がある人は僕のところまで持つてきてください。ちなみに全員強制参加です」

そう言うと解散になり、みんなラウンジから出て行つてしまつ。

「・・・・・どうしよう・・・・・」

(実際に衣装を着るといつ事は、まさか・・女装・・・・?)

「そう考へると頭が痛くなる。

「どうしたの?」

レティッシュの様子に気がついたのか、ミヤビが心配そうに見てくる。頭の中に浮かんでくる最悪の構図を振り払い、レティッシュもラウンジを出た。

「ただいま戻りました・・・」

「おかえり・・・どうしたの?」

ギルドに戻つてもレティッシュのテンションは上がりはず、リースにまで気を使わせてしまう。

レティッシュは姉妹が学園にいるんだから何とかできるのではないかと期待し、リースに相談してみる。

「あの・・・明日男女逆転劇のオーディションをするんですけど、女装つて絶対しなくちゃ駄目なんですかね?できる事ならしたくなんですけど・・・」

「うーん・・・一ーナのお目にかかるば大丈夫だと思つけど、レティッシュ君が似合つてたら、それこそ無理やり主役にさせられるわよ。とりあえず明日次第ね。私から言つて見るけど、似合つてたら諦めて。」

アドバイスが全部自分次第だといつことレティッシュは気がつき、肩を落とす。

「じめんね。あの子わがままだから。あ、それより・・・カーリーさんから手紙が届いてたわ。アナログも」苦労さんね。」

レティッシュ自身すっかり忘れていたが、調べてくれる事になつていたはずだった。

とは言つても何をするのかとかは知らないので、とつあえず手紙に目を通す。

『明日準備が出来たのでそちらに向かう。コレイダには許可を取つてあるのであしからず。』

たつたそれだけの短いメッセージを、わざわざ速達の手紙で出す必要があつたのか疑問だが、これにより色々な謎が解けるならレディットに文句はなかつた。

「ねえ、何でレディットはそんなに女装がいやなの？」

唐突だが、いかにも不思議そうにミヤビが聞いてくる。世間体で言うところの女装をしている人の立場が分かっていないらしい。別に悪い事ではないのだが、レディットの場合。

「それは・・・母親の影響なんだ・・・」

「・・・・・・！」

レディットが「母親」という言葉を口にした瞬間、ミヤビが異常なまでに反応する。

「うちの親は優しかつたんだが趣味が特殊で・・・アルバム写真とか撮るときは全部僕に文物の服を着せていたんだ。それ以来その写真を見返すとトラウマで・・・」

自分で言つていて恥ずかしくなつてくる。なぜ話してしまつたんだろうか。

ルッカもその写真を見ていたため、ラウンジでルッカが口を滑らせたとき、レディットは遮つたのだ。

とにかく明日に起つて二つのイベントへの、期待と心配を抱きながらレディットは仕事に出た。

過去のかけら（後書き）

どうも。レイです。

今回は文字多めかつ視点切り替えややこしくて「めんなさい」やつとレディットの過去に触れ始める事ができました。

それと、近いうちにでもキャラ紹介でも投稿したいです。

それでは、次回もまた。

byレイ

知るべき事と知りたい事

「どうしてこうなった・・・」

レディットは思わず深い深いため息をついてしまつ。

「どうした、ギルバーツ？ 悩み事もあるのか？」

クラスの別の男子は、これから女装をしなくてはならないとこうのに、みんな乗り気である。

クラス単位でやるはずだったオーディションも、今は予定を変更して全校生徒の前で行われていた。

それは昨日リースにお願いした二ーナへのお願い

かにどうせ見せる事にはなつていたのだが、どうやらそれを聞いた二ーナは生徒会長の権利を使い、このようなイベントに発展させたのであつた。もうただの職権乱用である。

「いや・・・なぜこんな事に・・・」

「諦める。会長の決めた事だし、良いじゃないか。己の美貌をアピールするチャンスだし、美人の会長も身にきていることだし」

二ーナは確かに、リースの妹と言つこともあつて美人ではある。ただし性格をのぞけばのことだが。

ただこれも、大舞台で醜態をさらすのを避けるためだと割り切り、仕方なく更衣室に入る。それと同時にレディットはピシリと体を固まらせてしまう。

「おいおい・・・どういうことだ？・・・」

更衣室のハンガーにかけられているのはすべてドレスだつた。それも安物などではなく本当の高級シルクで、まるで新調させたようにキレイだ。

レディットはもつと『村の住人』とか『召使い』とか地味なのを想像していただけに、金持ち学校の洗礼を受けたような気分だつた。みんなは当たりまえのようにドレスを選んでいる。気合を入れて化粧などしている者もいた。

「仕方ないか・・・」

不服も不服だつたが、ここで退いたら逆に本気にされるのではないかと思い、適当にかけてあつた水色のドレスを着て、ティアラをつけてステージ裏に並んだ。

「お前・・・メチャクチャ本気じやん！！」

「そんなわけないだろ・・・」

皆一様にレディットのことを褒めるが、乗り気でもないので嬉しくもない。

「それではこれから、文化祭2・3の創作劇『紅きノアルの奔走』のオーディションを開催します。まず始めにヒロインである、リヨーデリア王女のオーディションです。それでは1～5番の方どうぞ！」

ルッカによると一日で設定、脚本、監督などすべて決められたらしい。行動力だけは一級品である。

無機質な録音音声と共に、破滅の道へと最初の五人の勇者が出て行つた。

レディットは批判を受けたり笑われている人間を見続けることも出来ず、思わず目を伏せる。が、レディットの予想とは違い、ギャラリーからは歓喜の拍手喝采が湧き上がる。

ステージの上のクラスメイトは各自に自慢のポーズをとつている。女装をしているから良いものの、上半身裸ならばただの中途半端なボディービルになつてしまつ。

「はい！審査は全員が出てからと『いう事で。では次の方どうぞ！』

「あ～、緊張したわ！！」

そんな事を言いながら1番目の5人が帰つてくる。そしてレディットの目の前の5人が行つてしまつた。

これまた大喝采。ギャラリーは何でも良いのかとレディットは不思議に思えてくる。

レディットは強いプレッシャーに押しつぶされそうになる。今心電図でもつけたら振り切れてしまうのではと思えるほどに。

「ありがとう」ゼコました！…それでは次の方ゼウゼウ！」

ついに呼ばれる。だがなりやまない拍手を聞くと、脳内麻薬のエンドルフィンやらなにやらがスパークしてしまって恥ずかしさがレディットの中から消えた。

（やるならとことこやる…）

そう覚悟しステージに勢いよく上ると今まで沸きあがっていたギヤラリーがしずまり、ザワザワとし始める。

皆一様にレディットを見ては、隣の人とこしゃべり何か嘯いている。さすがに適当にやりすぎたかと心配になり、密席をグルリと一周見渡す。

一階席で一ーナを見つけるが、なにやら嫌な笑みを浮かべている。「えっと…じゃあ皆さんで自己紹介と共に、ウイッグをとつていただけますか？」

なにやら同会者も何がきこちない喋り方をする。

「えっと、僕は…」

気になるがとりあえず早く終わってほし！レディットは、後ろ髪に付けていた髪が伸びたように見えるヘアピースを取る。

それと同時に今日一番の歓声が湧き上がり、講堂が潰れるのではないかと思つほどビリビリと響く。

驚きと興奮に満ち溢れた観客の叫びに思わず一步退いてしまつ。

「みなさん！驚きです！感動です！本当に男性でした！…」

「…な…！」

司会者まで興奮して、みんなを落ち着ける職務を放棄している。

といふか自分が今までここまで本気で女性に間違えられた事にレディットはおどろいた。そして化粧もしてないし演技して作っているわけでもないのに、間違えられるのは本気でショックだった。

再び2階席の一ーナを見ると親指を真っ直ぐに立て、満面の笑みを浮かべている。

1階にいるルツカも『成長したな…』みたいな感嘆の表情でこちらを見ている。

「…………まじで？」

「コホン。それではありがとうございました」司会者も仕事を思いだしたようで、咳払いをしてから仕切りなおす。ステージから降りたところで、レディットは「終わった……」とポツリと呟いた。

退場しなければ、危うくレディットはステージ上でひざをつき、絶望を嘆くところだった。

「お前本当に男かよ！？」

クラスメイトが歎声を聞いてか改めて茶化してくる。だがそんな悪ふざけすらもも、レディットの『ニーナのお眼鏡から外れる』という任務を見事に失敗した絶望の闇を晴らす事はできない。完全に気にいられた。

「これで全員ですね。それでは生徒会長、学園長及び先生方の投票でヒロイン役となる生徒を決めるので少々お待ちください」ついにきてしまった。学園長すらも動かしているだろ？ニーナが牛耳っているも当然のこの学校で、票が割れるわけもない。

今思えば最初からあのエルモンド姉妹に振り回されていただけなかもしれない。ニーナの表情は何か確信と理念でもあるかのような表情で、あれは最初からリースが期待するような一言を吹き込んだ物なら説明がつく。

審査員が話し合っている振りをしている。「こんな出来レースに意味はあるのだろうか」と内心イラつきつつも、0・1%以下に等しい外れの確立を必死に願う。

「それでは発表しますので、出場者の皆さんはステージ上に並んでください」

恥ずかしさで憤死寸前だが、力が抜けている体をクラスメートに無理やり引っ張られながら今一度ステージに上ると、「やっぱり女性にしか見えない！！」とか、「実は趣味だったり？」とか両の手で耳を覆いたくなるようなガヤが聞こえる。

「それでは発表します。グランプリを勝ち取り、見事リヨーデリア

役を射止めたのは・・・「しえのカウントダウンでも奏でているかのよう、軽快なドラムロールが響く・・・レディット君です！」

（ああ・・・ああ・・・終わった。）

当たり前の出来事でもあるかのような拍手の中レディットの血糖値は見る見る内に下がって、二ーナをにらむ暇もなくその場に膝を着いてしまった。

「いや～、最高のショードったよ。姉さんの言つたとおりだつたわ」「盛大なイベントのため授業は丸つぶれになり、『暇なんだつたら・・・』と生徒会室にミヤビと一緒に引っ張られてきた。

ミヤビは適当に架空の事情をつけ、演技は無理と裏方に回してもらったものの、ヒロイン役なんて今考えつる最悪の結果だった。リョーデリア用の台本をさつきもらつて田を通してみると、恥ずかしい台詞が分厚くまとめられていた。

「ほんと可愛かったよ・・・」

「本当にやめてくれ。トラウマになる・・・」

ついにはミヤビまでも褒めてくる。

「だけどいくらイヤでも本番でも適当にやつてこの学校の名前を地の底に落としたら許されないわよ」

「わかつてますって」

文化祭前にここをリースが薦めてきた理由がなんとなく分かつた気がする。

ヒロインが何かやらかすわけにも、仕事をおろそかにして生活を苦しくするわけにも行かないという、バランス取りの難易度の高い天秤にレディットは乗せられていた。

悩みの種の解決策を椅子に乗つてふんぞり返りながら考えていると、不意に二ーナが、何かを思い出したように言つ。

「そういえばさつき姉さんから電話が入つて、ナントカつていう研究員っぽい人が何かの用件できたってさ。で、何時だかに来てくれ

つてさ」

不明瞭な点が多すぎてビックリだつたが、昨日いつていたカーリーがついにきたのだろう。

「ほんとですか！？ミヤビ、行くぞ！！」

準備だの言つて結局すっぽかされていたので、レディットはミヤビの手をつかみ、生徒会室を出た。

「戻りました！！」

「おかえり～。カーリーさん来てるよ」

時刻があつてゐるのか分からなかつたが、カーリーは部屋の隅の椅子に腰掛けて「コーヒーを音を立てながら啜つていた。

「またせたな。用意は出来てゐるから早速向かおうか・・・おつとそう言つて立ち上がるが、すぐに倒れてしまつ。

「大丈夫ですか！？」

立ちくらみでもしたのかとレディットが起こすとその田の下には、黒い絵の具でも無理やり塗りつけたの如く、くつきりとくまが浮いてしまつてゐる。

「コーヒーのカフェインもあまり効いていないようで、フワフワと立ち上がると、何度も壁に頭を打ちつけながらなんとか部屋を出た。

「どこにいくんですか？」

「支部長室に実験器具を運び込んだ。そこまで大袈裟な物ではないから安心してくれ」

そういうながらカーリーは支部長室のドアをノックもせずにあけると、真っ白なカーテンの引いてある支部長室にカズカズカと入つていつた。

「よ来到了ね」

「あ、支部ちょ・・・」

挨拶をせねばと振り向いたところでレディットの体は固まる。ミヤビも右に同じ反応を見せる。

二人が驚いたのはコレイダの格好だった。こには仮にも職場。とに

かく制服やギルドの服を着ているならまだ分からなくもない。それが当たり前のことである。

「そ、それは・・・」

少しだけピンクがかつた白衣にハイソックスをはいて、手には何か怪しげなカルテをもつている。

そう 俗に言うナースさん。看護師さんだった。

「どうかね？ まだまだいけるのではないかと思うのだが？」

そう言つてコレイダは身を翻す。確かにイケイケといえばイケイケなのかも知れないが、ショックのほうが大きかつた。初対面の印象は完璧な女性だったのに、こんな大ボケをつつ込んでくるとはレディットの予想外すぎた。

「それよりもその格好のチョイスは・・・」

すばやくカーリーがつつ込む。さすが昔からの知り合いだけあって、コレイダのおかしなところもたくさん見ているのだろう。だが言いかけたところで無駄を把握したのか、スルーする。レディットもそれに便乗した。

「このカーテンは何なんですか？」

気になりすぎる白衣を視界の外に追いやりながら、とりあえずではあるが質問をきます。

「身体検査だぞ。裸にもなるのだが、君はミヤビ君の裸体に興味でもあるのかね？」

「 ッ！？」

不覚。コレイダの一言に隣のミヤビが顔を真つ赤にしているのを見て、自分の質問の無神経さに気づく。

「い、ごめんなさい。そういう意味ではないですっ！」

無邪気は危険と紙一重。レディットはそう自分の辞書に新たなページを加えると、とにかく謝つた。

「じゃあ始めようかね」

少し恥じらいと不信感を持った表情のまま、ミヤビはカーテンの中に入つていった。

「そちらも終わつたようだね」

コレイダがコキコキと肩をならしながらいふ。

身体検査とは名ばかりで、学校のように身長だの体重などは一切測らなかつた。

体中にいろんなパッドのような物を付けられ、その状態で炎を出せだの、逆立ちを出来る限りやれだの、結局一人の関係がどうの」いつの言つてた割にはミヤビと一緒ににはなにもやらなかつた。

「結果つて出たんですか？」

「結果は出たが解析と考察にはまだ時間がかかるな。1週間程度で上がるだらうからまつていてくれ。」

「そうですか・・・」

待たされ焦られされやつと検査まで「じきつけたのに、また待たされるのだと考へると少し残念だつた。

ミヤビにはこの検査の本意は知らせていないため、彼女自身は呑気なものであつた。

「ありがとうございました」

夢交換について、やめるやめないではなくただ単に知つておきたかつたレディットの気持ちはまた置き去りにされた。

「で、実際のところどうだつたんだ？」

二人が出て行つた後コレイダは静かな声でカーリーに問いただす。

「まあ、お前を「まかすのはムリだらうな・・・」

カーリーはぼさぼさの頭をかきむしりながらめんどくさそうに答える。「大体分かつたよ。あいつら一人の能力は

同じ物だ。オリジナルはレディットのほうだらう。ただし、理由や過去背景はお前のほうで調べてくれよ。決め付けるには早いがもしかしたら利用できる」

コレイダは内心あまり驚かなかつた。それで今までの出来事すべてにつじつまが合つ。過去も現在も何もかも。

それよりも問題だったのは

「それなんだが・・・」

（

コレイダが口を開きかけた瞬間。狙いすましたかのよつてスクの上の電話が鳴る。

少しだけため息をつきつつも電話に出ると、その声に「ちゅうどい」と思わず声を上げる。

「私たちの協力人だ。拡声モードにして聞かせてもかまわないだろう？」

コレイダが質問すると、油断大敵がモットーのカーリーは声は出さずに首だけ振つて首肯する。

それだけ見ると、通話口に向かつて喋りかける。

「報告をよろしく」

『あいつらは今無事に部屋に着いた。レディットは腑に落ちない顔をしていたが怪しい動きも何もなかつたから心配は要らない』正直信用し切れていないようだが、カーリーはその声に聞き覚えがあつたようで、少しだけ首をかしげている。

「ありがとう。私の方の成果については・・・正直言つとつぱりだ。ずっと調べているが何も出でこないよ。共通点だけで言つと二人とも昔は二ホンという国にいた、という事だけだね」

そのときコレイダの脳内にある事件が浮かんだ。そしてそれと同時にカーリーの動いていた指が一瞬動きを止める。

コレイダは静かに流し目で確認すると、話を続ける。

「この共通点も気にした方がいいのだろうがなんせレディット君の方は情報が少なすぎる。まあこれからも調査はさせてもいいよ」

『それなりに祈つていてる。それでは報告を終わる』

「ああ、ありがとう

ロゼット君」

カーリーの驚愕と共に電話が切れる。

コレイダはカーリーに「」これでわかつたかな？」といつとドアを開け出て行つた。

知るべき事と知りたい事（後書き）

いつも……レイです。

私事ながらこの間友人に「ストーリー進んでる?」といわれてはつとしました。

全体の構想は組めていたのですが、どの話に謎をいれるかを改めて考え直し、ちゃんと完璧に組みました。
グダグダにもサクサクにもならないちょっとどい感じで収めようと努力中です。

プロフィールの方もお暇があれば更新しているかもしねないのでどうぞよろしくです。

それでは次回もまた

b

ソレイ

テストと濃霧と

「ええ！？中間テスト！？」

学校に通う物として当然のことながら、働いていたレディットはすっかり忘れていた。

右に同じで学校の事は何一つ分かつていらない様子のミヤビも、驚いたような顔をしている。

助成金で通わせてもらっているのに、成績が悪いとコレイダに示しがつかないのだ。

「あなたたちね・・・どうするの？」

あきれたような顔でルッカが言つ。

昼下がりの屋上で、レディットは悩ましい顔になる。

ここに来てから悩み事が増える一方のよつな気もしてきた。変人の集まりである特務班、ミヤビとの謎、見事にヒロイン役を射止めてしまつた創作劇。

内容は以前よりずつと濃いが、人生的に順調なのか躊躇つてゐるのも分からなくなつてくる。そしてそれになれてきた自分が悲しい。

「とりあえず勉強しないとな・・・参考書とかは？」

「だめ。うちの学校は特殊だから対応してるのが少ない。参考にはならないわ。教科は数学に現国、物理と生物と世界史よ」

レディットが絶望的な顔をすると、ため息をつきつつルッカは首を横に振る。「私が教えようか？」

「おお！ありが・・・」

そこまで言つたところで一つだけまずい事を思い出す。

それは同棲のことは知れているから良いものの、リースやクレヴァーなど変わり者を一国の王女に見せてはいけないのではないかとう、先輩に対しては大分失礼な物だった。

「なにかまずい事でもあるの？」

「ああ・・・いや、僕たちが仕事をやつてゐる間はどうじよつがと・

・・・「

「事務所にいるわよ。出勤率低いけどこれでもギルドの一員なんだからね！！」

なぜか緊張して生睡を飲み込みながら聞くと、最悪の答えが返ってくる。

気に入られたなら、ルツカにもレディットにも被害が来る。ルツカの正体がばれるのもそう遠くないだろ？

「ああ、分かった・・・」

レディットはうつむき加減でつぶやいた。「何事もありませようとレディットは

に・・・

「ん？なんか言った？」

「いや、なんでも」

今日はみんな仕事で出払っていることを、レディットは珍しくも信じていない神に祈つてみた。

「わあ～すつこじじゃない！？」

ルツカもロレンタ支部との違いに驚いたようすで、目をまん丸にして驚いていた。

ルツカが証明証を持つていなかつたので門番の人に何とか説明を付けて入つたが、いたるところに興味津々のため、全然進まなかつた。荷物を置きに一旦レディットの部屋に戻り、ドアを開けるとたちまちルツカのおせっかい症が全開になる。

「ちょっと！何このつまらない部屋は。一緒に住んでるミヤビちゃんがかわいそうとは思わないの？」

「人の趣味にケチを付けないでくれよ・・・

掃除はしているし、特に問題のないはずの部屋にルツカが見出したのは、昔から何も変わらないレディットの無趣味の証であった。確かにレディットの部屋にあるものは、ミヤビの服やアクセサリーなどの物以外、すべてがお葬式などに持つていっても何もいわれなさそうなモノトーンのものばかりだった。

レディットがロントにすんでいた時代も、なぜかそこまでケチを付けられていた。

「もつと色身のある物でも飾つたらどうなの？」

「目がチカチカするんだ……」

レディットは適当な言い訳を付けたと制服を羽織ると、これ以上何も言われないうちに部屋を出た。

「ただいまもどりま……した……」

忍者の如くゆっくりと音を立てぬよう部屋を抜けたと、幸い静かな特務室には誰もいなかった。

レディットは一つ安堵の息をこぼすと、とつあえず椅子を二つ並べた。

「座つてくれ。今お茶沸かしてくるから」と薦めても、ルッカはずつと部屋の中をひらやましゃつて見つめていた。

まあいかと思いつつ急須でお茶を沸かし始めると、今更ながら一つだけ違和感に気付く。

いつも閉まっているはずのカーテンと戸棚が少しだけ開いている。そして嫌に日差しが強く入り込んできている。

小さな小さな違和感だったが、お湯が沸いても薄れる事はなく、二人にお茶を出して勉強を始めても集中できない。

「レ・・・ット、ちょっとレディット、聞いてる？」

「ああ・・・」めん、ちょっとボーッとしてた……

どうも何か気になる。ストーキングされているようだがそれでも近くに気配はない。

「『めん。ちょっと探し物をするから少しだけ僕抜きでやつていてくれるか？』

「仕方ないわね。早めに済ませなさいよ」

レディットは立ち上がり部屋を見渡す。気になる場所は三つ。

カーテンと戸棚と

そして誰もいなければずの封鎖地

域である屋上。

さつき少しだけ見えたカーテンの向こうで太陽の光ではなく、レンズのような物が光つた気がした。

それならばとカーテンを閉め、外からの視覚的介入はシャットダウントしたつもりが、まだなぜかレディットの本能は油断を許さない。

「・・・・・？」

「レディット、どうかしたの？」

「いや・・・もう見つかると思うから」

何かと思い、少しだけ開いている戸棚を覗くと、黒くて小さな機械のようなものがはいつている。

赤いランプを点滅させているが、カメラもビコにも付いていない。はじめて見る物だが、大体レディットには予想がついてしまった。盗聴器だ。

とはいえスパイの物かもしれないでの一応筆談で一人に伝える。

「え！？ そんな！？」

予想通りといえば予想通り、ミヤビは声を出して驚く。

レディットが指を立てて静肅を求めるが、やつと筆談の必要性を理解したようだ。

『どうする？』

完全に勉強の手を止めてみんなで筆談会議が始まる。

ミ：『とりあえず外に置いておいたら？』

レ：『それじゃ完全に音が止まったのがばれて怪しまれる。録音テープでもあれば話は別なんだが』

ル：『布でも被せてジャミング感でも出す？』

レ：『それもいい案だがここまで良好な具合だったとしたら、急にジャミングになつたという事は気付かれたと勘違いされかねない。

声で男1人女2人だとばれている状況で、相手が大勢なら乗り込んできてくれるかもしれない』

侃侃諤諤な議論も、決定打が出ないまま3人とも悩んでしまう。

とりあえず怪しまれないようにちよくちよく適当な会話をしている

と、ミヤビが何かに気付いたような顔をする。

『それなあに？』

紙を示しながら盗聴器と思しき物の裏を指差す。

「…………ん？」

裏返してみると、盲点ながら何かシールのような物が貼つてある。そこには

「リースの私物にて持ち出し禁止

！…」 ポップな文字で書かれていた。

「…………」

一瞬にして3人の緊張感は消え、同時に怒りが芽生えた。

リースを知らないルッカも、いたずら血体に腹を立てているようだ。レティットはその盗聴器に一言

「すみませんがこちらでは修理代を払いかけます」

そうじうと、レティットは87の握力を集中させ、盗聴器を碎いた。

「！」は三角形の相似を使って、187でるから……

「つ～む・・・」

レティットは数学が苦手で、ルッカの説明もさっぱりだった。

「どうして分からぬのかしら。ミヤビけやんなんかす」い飲み込み早いのに

あきれた顔でルッカが言つてくる。レティットは悔しいが返す言葉もなかつた。

ミヤビはなぜかなんでも一発で理解できてしまつ。長い時間の記憶がないのによく覚えられる事をレティットは少しうりやましかったが、「純粹だから何でも飲み込めるのだ」と割り切る。

「ちょっと、レティット君～！…」

頭を抱え問題を解いていると、リースが悲しそうに声を荒げながら入ってくる。

「どうしたんですか？」

「ちょっと、盗聴器壊しちやつたの～？あら、そっちは友達？」

始めの一言を聞いて犯人だと確信したのか、ルッカがピクリと肩を

震わせる。

仲良くなる危険性をここに来る前は考慮していたが、逆の事態になるとまたそれはそれで気まずい。

「レディットの幼馴染のルッカといいます」

「・・・あらそつ。よろしくね」

鬼が出るか蛇が出るかの状況下でルッカは以外にも友好的な態度を示す。あまり怒っていないのだろうか。

それもリースに読まれているのないかとすると、レディットは2重のプレッシャーに押ししつぶされそうになる。

「レディット、ミヤビちゃん。今日はこれで終わりにして仕事をがんばって。じゃあね」

それだけ言つと、さつきまで勉強勉強言つてたのに帰つてしまひ。・・やつぱり怒つていた。

結局テストと仕事の両立は難しく、勉強はおろそかもいいとこだつた。

それでも一夜漬けにと勉強したレディットは、もうべくただつた。だがミヤビはレディットより勉強時間が少ないのに、あさから余裕というかテストの存在を気にしていない表情だつた。

「レディット顔色悪いよ？」

レディットの気心も苦労も知らな「ミヤビ」も、その無邪氣さで増めない。

ルッカも時々教えてくれたが翌朝には吹つ飛んでいる始末。さすがに呆れ顔だつた。

とりあえず寝ずにすべての教科のテストがあわつたところだつた。

「それでは成績順にランキング形式で発表いたします」

教師数の多いこの学校では別の教科のテストをやつてている最中に、他の教科の採点などすぐに終わつてしまつようで、発表が当日にあるのは成績不振のものにとつては精神的ショックになりかねないのではないかとレディットは心配になつた。

固唾を飲んで見守る生徒たちの前で、担任の教師が巻物状の紙を広げていく。

と同時に、レディットたち3人に衝撃が走る。学年主席となつた1位をとつていたのは

「ミヤビ・センドウ 500点」

と書かれていたのだ。500点満点中500点なんてとてもじゅないがレディットには信じられなかつた。

「すごいわミヤビちゃん！ 満点なんていまだかつて誰も取つたこ
とないわよー？」

「あ、りがとう・・・」
「ありがとうございます」

ミヤビ自身も混乱しているようで、言葉が変なイントネーションになつてゐる。

教師が失敗したのか、生徒のほうが優秀なのか、みんなそれでも400点越えは当たり前のようだ。

レディットも何とか460点をとつたのを見て胸をなでおろす。

「いやいや、すごいじゃないのー」

ちゃつかり496点で2位をとつている一ーナがパチパチと拍手をしながら歩いてくる。

「ちなみにこの人が昨日のリースさんの妹さんだよ」

「ええ！？ 生徒会長が！？」

結構似ている姉妹なのにどうやら見ただけでは分からなかつたらしく、ルツカは数秒間の間目を閉じてリースの顔を思い出すようなしぐさをした後「ああ！」と相槌を打つ。

「姉さんが何かしたの？」

「ああー・・・ 盗聴器を仕掛けられていて、誤つて壊してしまいました」

レディットがありのまま《・・・》を話すと、一ーナは心を読んだようで、楽しそうに笑う。

「おつと、それよりも・・・」

何かを思い出したよつた言つと、3人を生徒会室へと引っ張り込む。

「一ーナの今までの楽しかったような様子ではなく、少しだけ怪訝そうな表情になつたのがレティシットにはきになつた。

「なにかあつたんですか？」

ミヤビも空氣を読んでか、テストの事は頭から吹き飛んだようだ。ミヤビは一度深い息を吐くと、一語一語に力を込めながら話し始める。

「先ほど姉さんから連絡があつて、ここはまだなんだがアーテルバ市内は10m先が見ない濃霧に覆われていて、事故が多発しているらしいんだ。そしてもっと恐ろしいのが・・・その霧は魔獣の神經を刺激してしまつから、森から出てきて暴れるかもしれないんだ。それの対応にギルドと警察と軍までもが出ているらしいんだけど、どんどん霧が広がつているらしいのよ」

「霧？」

10m先が見えないというのはもはや災害レベルで、車が何かに気づきブレーキを踏んでも間に合わない距離である。魔獣なんて出できたらそれこそ一般人には何も出来ない。

ヨーロッパの気候的に霧はあまり出ないし、日が昇りきつた午後に出来る事なんてそれこそ前代未聞だ。

「そう、霧よ。それでギルドの三人にはこれから特務室の人が来るまで非常事態に備えて・・・

そこまで言つた瞬間。廊下から悲鳴が聞こえる。

「なんだ！？」

廊下に飛び出すと、驚いた事にあたり一面霧で覆われている。

今のは悲鳴はパニックになつた生徒同士がぶつかつたようだ。ここなら生まれてから一度も霧を見たこともない人も多いのかもしれない。

「皆さん落ち着いて！！危険ですから講堂に集まつてください！！」

ヒツヤの判断ながら誘導をルッカと一ーナに任せると、ミヤビをつれて中庭へと出る。

異常がないか確認していると、案の定草むらから魔獣が飛び出してくる。それでも霧があるため不幸中の幸いに、生徒たちには見えて

いないためパニックは起こらない。

「クソッ・・・ミヤビ下がつてて」

ミヤビをギリギリ見えるといひまで下がりせると、バッグの中に入つていた日本刀を抜く。

そのまま斬りかかるのも無駄と、ここ最近の任務で分かつて。最近なぜか異常なまでに魔獣が強くなつて、レディットにはしてならなかつた。

炎もここに来て頼る回数が増えてきたのは、その証拠だろ？

「戻ろう、ミヤビ。ここは危ない。」

とりあえずなんでもない魔獣を一刀両断して校舎に戻る途中、レディットは霧の中に少女の姿を見た気がしたが、そのまま戻つた。

テストと濃霧と（後書き）

どうも、レイです。

今回は久しぶりに魔獣ちゃんが登場しました。
ありふれた事なので日常の仕事での魔獣退治などは描いていません
が、レディットは大分魔獣を狩つてます。

次回から話が転じて新キャラが登場します。

ご期待していただいてもかまいません。それでは次回も。

byレイ

奇奇怪怪の追われ身嬢

「眠い・・・」

3人が来た後も霧は晴れることはなく、生徒全員を一人づつ送り届けたので時間がかかつてしまつた。

それは朝までつづき、魔獣が入らないように市外門を閉めていたので、アデルバは港以外はほとんど隔離された状態に陥つていた。そしてそれの影響で、魔獣退治の依頼が昨日から大量に増えたようだ。

「本当に見えないな・・・商品の品質は大丈夫なんだろ?」
少々主婦じみたことを言つわけではなく、レディットは物資調達のため、朝早くから百貨店に来ていた。

人々も慣れたのか、パニックになつて物を買い占めるといつこともなかつたようだ。

窓をしめきつて換気扇をフルで回している百貨店も、ひざまでうつすらと霧が入つてきていた。

人間には影響のないと発表されているこの霧も、みんなはまだ心配事があるらしく外には出でていよいよだつた。

とりあえず、卵や肉などの比較的すぐ無くなる物だけを買い店を出るも、霧で前が見えないと不便さを思い知る。

「それにしても静かだな・・・もしかして僕がおかしいのか?」
1人ポツリと呟くとそれは町の静寂に飲み込まれるように消えていく。

住み慣れない町の道に迷わないように注意しながら歩いていると、向こう側から姿は見えないが、走るような音がバタバタと聞こえてくる。

「なんだ?」

小耳に挟みながら歩いていると、どうやらその音はどんどん近づいてきているようだつた。

その音が一番近づいた曲がり角を曲がった瞬間。

「ぐふあああああ・・・・・・！」

腹部に衝撃が走る。まるでタックルでも受けたような衝撃に意識を失いかけるのを感じると

「もう！…お兄さん！…どこ見て歩いてるのさ！…」

やたらとかわいらしい声が下から聞こえてくる。何かと思い視線を下げる、レディットよりも色素の薄い髪をした10歳ぐらいの少女が可愛く憤慨していた。

「あ、その、えっと…・・・『めん』

「まつたく・・・前は見て歩いつよ…」

ぶんすか怒っているこの少女には、なぜか不思議な雰囲気が漂っているようだ。レディットには思えてならなかつた。

まるでこの少女の周りから霧が立ち込めてでもいるような気がする。それ以前に危険といわれているこの町で、朝から子供が何をしているのが不思議だつた。

「君は一体？それよりもなんでこんな時間に…・・・」

「あ、そうだ！…」

レディットが質問すると、何か大事な用事でも思い出したかのように声を荒げる。

「アタシ鬼ごっこしてたんだわ！…」

「鬼ごっこ？」

跳びはねているその姿は無邪氣で、姿勢を低くして喋るレディットと目線がなかなか合わない。

こんな時間に起きているのはいい子だが、静かだからといって街中で朝っぱらから鬼ごっこというのは親が咎めないのかレディットは気になつた。

「そう。お姉さんとしているの…！昨日からずっとそのお姉さんが鬼なんだけど、全然捕まえてくれないのよね。あ！来た！…」

そういうとまた走り出して向こうの霧の中に消えていってしまう。それと入れ替わるかのように、さつき少女が来た方向から誰かが走

つてくる。

「あ！あなたは！！」

その女性はレディットを見て声を上げる。あちら様はびじゅうじゅう
らを知つて知るようだが、レディットに見覚えはない。

一生懸命記憶の中を探り、搔き回しながら振つたりしていざ
と思い出す。

「あ！あのクーラーが壊れてたときの…！」

「そうです！！それ私で…あつと、そういうえば名乗つてません
でしたね。私はアネモネ・ルーラーといいます。お久しぶりです…
・あれ？」

「ああ…僕はレディット・ギルバーツといいます」

本当はよく覚えていないのだが、クーラーが壊れていたときに不運
にもユレイダのお使いをさせられていた女性だつた事はレディット
も覚えていた。

そして少しあの時は特務室にいいイメージを持つている人間ではな
かつた。羨むようで、特別視されているのを不服に思つていいよう
だ。

「私特務室の人と話すのが初めてなんです。怖い人かと思つていた
けど私より若い人がいると安心だよ。君はいくつなの？」

「17ですけど…」

「すごいね！私より2つも年下なのにもう働いているんだ！！」
何をしていたのか、アネモネはテンションが朝にしては高いし、何
だか息が切れている。

「もしかして、女の子を追つてます？」

レディットがそう聞くと、アネモネは思い出したかのよひに体をギ
クリと跳ねさせる。

そして、走つているわけでもないのに額から汗が滲んでいる。

「ああ…！ああああああ…！そつだつたわ…！レディット君は見た
の…？」

アネモネは焦つたような様子で激しくレディットの肩を持ち揺さぶ

つてくる。

「おひついてください！その女の子は僕より髪の色素が薄い、10歳ぐらいの女の子でした？」

「そう！その女の子よ！—どちらに行つたの？」

「あっちですけど・・・」そういうとアネモネは走り出そうとするが、レディットは聞きたい事があつたので手を引っ張つて止める。

「なんで、追つてるんですか？教えてください、何か協力できるかもしれませんので」

とはいえ本当はアネモネに協力したいといつより、あの少女の事が気になつた。

関節が抜けかかつたかのように、スリスリと肩をなでながら少々早口でアネモネが説明を始める。

「あのこを捕まえるように依頼が来ているの。依頼主は・・・政府なんですよ」

「政府！？」

普段は議会だのなんだのの承諾がないと動かないくらい腰の重い政府が、少女一人のために動き、捕らえようとするのは至極不思議な事で、レディットはあの少女が更に気になつた。

「そうです。で、ここ数日完璧に出勤できるのが私ぐらいな物だったんで請け負つたんですけど・・・」

「昨日から捕まえられない、と」

「そうなんですよ。あのこ足が速くて速くて」

アネモネが運動音痴なのか、あのこが本当に足が速いのか今の段階では分からないが、レディットは一息飲み込むと自分の性格を少し呪いながら、口を開く。

「内容は分かりました。もし迷惑でなければ手伝わせていただけませんか？」

そういつた瞬間、アネモネの顔から焦りが消えて一気に表情が明るくなる。

それと同時に0・02秒という圧倒的な速さで、レディットの手を

ギュッと握つて顔を近づけてくる。レディットは思わず身を引いた。
「本当にですか！？ ありがとうございます！！ それでは、これを！」
そうじつて紙を一枚レディットに渡すと、慌ただしくもアネモネは
さつきの少女を追つて霧の中へ消えていく。うう。
どんな面倒が待つているとも知らずにレディットは苦笑した。

「登校日じゃないからひて氣をぬかないでくれ」

「じめんなさい・・・」

レディットが8時じうに買い物から帰つても、ミヤビはまだ寝ていた。出勤時間が8時30分のギルドでは完全な遅刻である。朝じはんも適当に出てきたのだが、結局間に合ひつかどうかの駆け足になつてしまつた。

「おはよみづきやれー・・・」

そう言いかけたところでレディットの口からそれ以上、挨拶は出なくなつてしまつ。

出勤前にもかかわらず仕事に勤しむアネモネとは違い、レディットとミヤビが特務室へ行つても時間ギリギリなどお構いないかのよつに誰もいなかつた。

「また誰もいないの？」

ミヤビもさすがに呆れたような口調になつてゐる。

無論泊りがけの仕事などの物ではなく、机の上には「昨日は長丁場だつたので・・・ね？」という紙だけが置かれていて、レディットは少しだけ怒りを覚えた。

「そういえば、僕はいつもの仕事以外にもうひとつだけ仕事が入つたんだがついてくるか？」

ミヤビはまだ眠気が残つてゐるのか、リースたちに文句を言つた割りに頭が回つていないうらし。数秒間じつくりと考えた後、ゆつくりと首を縦に振つた。

「よし・・・」

先ほどアネモネから渡された紙を見てみると、そこには彼女のもの

であろう電話番号が記されていた。

とりあえず先に仕事を、と考え、『ジ苦労様にも朝早くに総括部の人
が依頼を張り出したボードを見ると、そこには魔獣退治の依頼ばかり
張り出されていて、レティットはすこし汗を垂らした。

「仕方ないか……」

ぼやきながらも刀を握ると、気合が入る。

この動作がレティットにとってはスイッチのような物で、この剣は
シェダールでは売っていない『二ホントウ』といわれる金で作ら
れた剣である。そして母の形見でもあった。

「今日の目標は5体だな！」

そういうとレティットはミヤビを半分引つ張りながら任務に出た。

「これで……5体目……」

そういうつてレティットは最後のいつたいを切り倒すと倒れこむ。

昼夜がり、日が照っているはずのこの時間帯にも霧で光が少なくな
る。

5体目を倒す頃には闘っていたレティットも、小さい魔獣を倒して
いたミヤビも疲れていた。

「やっぱり炎が必要なのか……」

木陰で身を休めようと移動しつつもレティットの頭には少しだけ引
っ掛かる事がある。

それはこの霧が現れるよりも前からの事だった。

「どうしたの？」

ミヤビもその様子を察してか、顔を覗き込みながら聞いてきて、自
分から覗き込んだ割には顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。

「ああ……僕がちょうどここに来て君を連れ出したくらいの時期
から、普通の武器が効かない今までよりも強力な魔獣が現れている
みたいなんだ」

それは能力を使える物にとつては小さな事かもしれないが、普通の
武器をかって使う事すらできない一般人や、武器を使っても倒せな

い群などはどうするのかがレディットには心配だつた。

ミヤビはまだしつこい魔獸を知らないらしく、首を傾げるだけだつた。

「まあ、気にかけすぎるのは良くないが、策は早めに打つておいたほうがいい気がするんだ」

兵法はさっぱりでも、頭のいいミヤビは最悪の事態を考えたらしく苦い表情をしている。

「さて、と・・・」

重苦しい空気が流れる前に、レディットは携帯を取り出してアネモネから手渡された番号に発信する。

待ちわびてたかのようなタイミングで、1ゴールドにアネモネは出た。

「はい！ もしもし」

「アネモネさん？ レディットですが、仕事が終わったのでお手伝いできる事はないかと」

「・・・すみません、今どこですか？」

やつぱりあの少女を追いかけてるのか、アネモネは呼吸を整えつつ電話をしている。

横を見るとミヤビが少し複雑そうな表情をしていたので、レディットは『ギ・ル・ド・ノ・ヒ・ト・!』とだけ口の動きで伝えてから通話口に口を戻す。

恋人同士でもないのに少しだけ妙な気分だ。

「えっと・・・ アデルバ西口の5番街道です」

「本当ですか？ 近くです！ じゃああのこを探してもらえますか？」

「了解」

偶然にも近くだったので、移動をしなくてすむ事がレディットにとって今は嬉しかった。

携帯をたたむと、何だかさつきより霧が濃くなつた感じがする街道を見渡す。

「ミヤビ、一緒に人探しをしてくれるか？」

ミヤビもあまり動きたくないのか、疲れた様子で首肯した。

「じゃあ、真っ白な髪の毛をした10歳ぐらいの女の子を探してくれ。いいね」

「あれじゃない？」

レディットが話している途中から、ジーニーがあさつての方向を向いていたが、今度はその方向を指差している。

レディットもその方向をみると、確かにそれは朝に出会った真っ白で不思議な少女だった。

あちらもレディットに気づいたのか、目をまん丸にしきなり笑顔になつて走つてくる。

「お兄さん！こんなに早くまた出会えるとは嬉しいわーー！」

そんな事をいいながらレディットに抱きついてくる。

そんな様子を見て見逃してくれない人が一人、案の定だがミヤビが声を荒げて反応する。

「ちょっとレディット！ーーーの子誰！？」

すると、一瞬でミヤビの健全な嫉妬心を見抜いたかのよつて少女は胸を張り、言う。

「失礼ね！私はお兄さんの婚約者であるミステイン様よーーー！」

「ええーーー？」

いきなりかつ意味不明な宣言！一人とも声を上げる。そしてミヤビは地面に座り込んでしまう。

それをみてレディットはまた面倒な事になるのを危惧しつつも、任務を思い出す。

「そうだ、ミステイン……？僕たちのところに来て話をしてくれないかな？」

しかしがレディットがそういつた瞬間、ミステインの表情が一気に悲しそうになる。

「お兄さんも？」

ポツリと、喉にいきなり何かがつづかえたような小さい声でミステインが呟く。

「え？」

「お兄さんもそういうアタシを捕まえようとするの？」

それにはレディットもさすがに狼狽する。今までこれ以上ないくらい元気だった女の子が、自分のせいでも一気に暗い表情になれば誰でもそうだろう。

そしてレディットは理解してしまった。この少女、ミステインは『鬼ごっこ』といいながら、何らかの事情やトラウマで大人たちから本気で逃げ回っているのだと

「いや、そういうことではなく……何といつか、ただ君と話がしたいだけなんだ」

レディットの弁解が届いたのか、ミステインは零れそうなほど出でいた涙をふき取つたが、レディットと距離をとつて顔を上げた。

「お兄さんは嘘を吐いてないみたいだし、いい人だから許してあげる。でもお兄さんも鬼よ……」

そういうと、アネモネから聞いたとおりの速さで霧の中に融けていつてしまつ。

「レディット君……いました？」

それと入れ替わるかのように、叫びながらアネモネが走つてくる。そこでやつとミステインを追わなければいけなかつたことに気づき、レディットはハツとした。

「すみません。見つけたんですが……」

そこまで言つたところで、一つ気になることをアネモネに聞いてみることにした。「この霧とあの少女……ミステインは何か関係があるんですか？」

「任務の詳細はあんまり聞いていないので……すみません。でもミステイン……あの子の名前はそういうんですか……」

一瞬ながらアネモネの上下していた肩が、ピクリと規則性から外れた動きをした気がする。

首をかしげながらも、どうやら特に知らないらしいのでレディットは落胆した。

「どうあえず一回逃したらなかなか見つかってくれないので、今日はここまでにしましょう。ありがとうございました」
レディットは結局ミステインというわがたまりを抱えてしまった。

どうあえずアネモネに申し訳なかつたし、ミステインについての事情も気になつたので、ギルドに戻つた後も機嫌の直つたミヤビと二人でミステインについて調べていた。

「ん？」

魔獸の情報をどうあえず地区の近い物を調べようとして、依頼詳細を眺めているとレディットはある事に気づく。

魔獸の目撃情報がある地域には時刻によつて偏りがあつた。それはまるで、あの霧が移動して、魔獸を興奮させる地域から出たり入りたりしているということだ。

「これつてさ・・・」

レディットがさすがに不思議に思つてミヤビに相談すると、それを見て頭が冴えたのか閃きを見せる。

「偶然かもしれないけど・・・」

そういうて、ミヤビは地図とペンを取り出して中になにやら書き入れながら喋りだす。

「基本的に同じ時間で目撃されている魔獸は5体程度で、その中の一一番アデルバに近いところの目撃例をA点として、その点から一番遠い同じ時刻の目撃例までを直径とした円で囲むの。こつちの時間も同じ要領でやると

ミヤビが最後の円をコンパスで描いたとき、レディットは思わず感嘆の声を上げる。

すべての円の直径が、手書きの誤差をぬいて考えると全くすべてが一緒になつたのだ。

「すごいぞ！－ミヤビ！－！」

テストの点だけでなく、本当にミヤビの頭がいいことを思つ知らされると、レディットは少し情けない。

それでも完全に規則性を見つけたレディットと、褒められて喜んでいるミヤビがはしゃいでいると、クレヴァーが帰ってくる。

「ただいま。あれ、一人だけ? ってなにこれ?」

どうやら散々散らかして地図の謎を解いていたのに気づいたようでも、訝しげな視線をしている。が、それも地図を見た瞬間に輝き始める。「これミヤビちゃんが解いたの! ? すごいぞ! その少女の事も気になるがこのことはそれこそ政府に調査でも依頼すれば動くんじゃないか?」

「あつ・・・・・」

そこまで言われて初めてレディットはこの情報の欠落に気づく。確かにこの地図なら、『何か』があるという事は分かる。ただそこで止まってしまっていたのだ。

「この程度の事は政府にとつて予想の範疇、いや、これを前提として動いているとしか思えない・・・」

それこそ腰の重い政府が動いたのだ。これ以上の情報は持つていては違いない。

こんな前代未聞の状況下で、やつている事といえば霧の成分調査だの警備体制の強化だの、結局何の解決にもならないことばかりで、たつた一人の少女を追いかける暇があつたのならやる事があるはず。そう考えると、アネモネも何か知つていると決まつてくる。

「そうか・・・・! !

「え? ええ?」

ミヤビとクレヴァーは、『一人で答えを出さないで! !』 みたいな顔をしている。

「ああ・・・すみません。ミヤビ、謎が解けたから明日からまた仕事だぞ」

「え、ああ・・・うん」

多少強引な気がしつつも、自分で答えが出て、テンションの上がつたレディットはミヤビを部屋に引っ張つて戻つた。

奇奇怪怪の追われ身嬢（後書き）

どうも！レイです。今回長くてすみません。

今回は新キャラとしてミスティンちゃんが登場しました。

ここからミスティン編となるのですが、「ミヤビより登場の扱いがいいね！」とか言わないであげてください。

次に投稿する話とその次に投稿する話は、それぞれレディット視点とミヤビ視点で、時間軸的には同じ時間を辿ります。

それともう一つだけ。

キャラクター紹介のプロフィールで、フォーゲルの体重が、設定より10kgも多かったのを見たとき、やつてしまつたと思いました。ダイエットしよう！とか、そんなムキムキ女性キャラに設定した覚えはない！

などと自分で思いながら修正してまいりました。

すでにされていた方は気にしないで、「あれ？」とか思われた方は申し訳ありません。

それでは次回も。

bソレイ

その後も地図の謎を完璧にすべく、各地の魔獣を倒しながら調査して、ミヤビの推測はほぼ確定になつたが、意見を念のため聞いてみたリースに言わせて、事態の解決とはいたらぬようだ。

「そういえば・・・」

市民が危険にさらされている以上、早めに解決すべきで、ミステイン以外の問題も山積みだつてのに、最近ロゼットが姿を現さない。何気なく過ぐして、特務室にて、一つ物足りない無口なまじめ人間の存在をレディットは少し気にしていた。

ミステインの謎に、まだに答えの出ないミヤビとの夢交換の謎。レディットの中のわがたまりは全くといつていいほど晴れないまま、マルフ学園祭は3日後に迫っていた。

とはいってもレディットも何もしていなかつたわけではなく、ユレイダのところに押しかけても取り込み中だつたり出張だつたりと不運続き。カーリーのところへ押しかけても、『研究中』などとかかれた張り紙がこれ見よがしに貼られているくせに、中からテレビを見て笑う声とコーヒーを啜る音が聞こえたときは、レディットもドアの破壊を考えたくらいだ。

最近はその一人に不信感や若干の嫌悪感も抱いている。

それに加え家でも演技の練習をするようにと文化祭の実行委員に耳にたこが出来るくらい聞かされ、そして生徒会の仕事としての雑用があつたため、レディットのスケジュールはパンパンで、ミステインを探すのも最近は出来ていない。

あのときの悲しげな表情と言葉が忘れられず、それを聞いたミヤビも思つところあつたようだ。

出会い合つて間もない少女にこれだけの感情を抱くのは、見ている人々から口リコンとか言われるかもしないが事実であり、そして不思議だった。

「レディット君。マイク始めますよ」

そういうながらどうさりとマイク道具を抱えた演劇部の部員が入つてくる。

レディットは諦めて椅子に座つた。

無論、抵抗が

なかつたわけではない。レディットも必死に講義した。

だがそれを遮る力を持つ人間、この学校で絶対的な権利を持つ人間である二ーナに押し戻され、無念残念な敗北という結果になり、クラスのみんなの希望もあり前田2日間は化粧と衣装込みでの演技練習となつた。

「もともと中性的な顔だから、チープとかは塗らなくていいと思うんだ」

そんなレディットが分からぬ専門的なマイクの話の途中で、何かを思い出したかのようにその女性は手を叩く。

「さつきギルドの人たちが来てたよ。なんか会長のお姉さんとか言つてたな・・・似てたし」

「...」

その一言を聞くと、自分でも分かるほどにレディットの全身の鳥肌は一斉起立した。

それに次ぐように脂汗がにじみ出てきて、体が震える。

現在進行形でバリバリマイク中のレディットは今ここから逃げ出すことは出来ない。

そんな状況でのリースたちが来れば茶化すだけ茶化され、レディットの精神をボロボロにして帰るであろう。いや、最後に耳元で『本番も期待してるわ』とか言いかねない。満面の笑みを浮かべて。そんなガクガクブルブルな状況に、レディットは耐えうることはできそうにない。

「着け睫毛何枚が良いですか？」

そんなレディットの中の緊張や危機感や不安や恐怖や悲しみやその他エトセトラを知らないマイク係は平然とマイクを続けよつとしてくる。

今ならまだ顔を洗いなおす余裕があるかもしれないの。」「

どんどん後戻りが効かなくなつて、完成形になつてから呑つたらそれこそ最悪である。

「何枚でも良いですよ・・・」

『そんなことどうでもいいのでは?』などと、ヒロイン役に選ばれた事で生まれた誰にもぶつけられない愚痴と、リースたちへの恐怖を脳内に忘れ去りたい記憶として埋め込むと、レディットは目を閉じた。

「最近、あのお兄さん見ないな・・・」

ミスティンは暇を恨みながら道端の缶を蹴飛ばす。

「昔と違つて楽しくなると思つたのに」

だが正直ミスティンには昔の記憶など全くなつた。すべてではなく、ある一定の時期だけ虫食いのように欠落しているのだ。気づいたときには、薄汚れた感じの周りとは違う雰囲気を持った路地に放り出されていた。

ただひとつ知つていて、それは自分がいい環境にいなかつた事。ボロボロの体と服がそれを物語ついていた。

でもこの町のことは知つていた。朧氣かつ曖昧な記憶をたどりながら彷徨つていると、あのお姉さんが現れて、鬼ごっこが始まった。

「それにこの霧は何なの? あんまり覚えてないけど昔はこんな感じや・・・」

そこまで言つたところでミスティンは足を止める。あちらこちら封鎖されてどこにもいけないこの町の外れに、ひつそりと隠れるようにある道を一本見つけたのだ。

最近人が通つた痕跡もある。それを見て、ミスティンの中のいたずら好き精神が騒ぐ。

そこには看板があり、その先を指す矢印とローマ字で

「エム、エー、アール、ブイ?」

と書かれていた。シェダール語しか読めないミスティンにとつては

理解不能な言語だが、特に気にする事もなく歩み入る。

「誰かいないかな・・・」

いたずらできる人はいか探しながらミステインは木々に囲まれた道を歩く。

何かに使うには不便なほどに意外と道は長く、若々しいティーンでなければ歩けないほどに感じる。

そしてそんな長い道に街頭などの明かりは一つもなく、お化けでも出てきそうなほど暗かった。

喧嘩別れのような別れ方をしたもの、レディットに追いかけてもらえないのは少し寂しかった。

しばらく歩いていると、霧でよく見えないのだが向こうに明かりが見える。

門をぐぐって近づくと、中から大勢の人間の声が聞こえてくる。

「あ・・・！」

窓の外から見覚えのあるアッシュ・ブルンドと黒髪を見かけたとき、ミステインはニヤリと笑った。

「だからこそ会いに来たんだよ リヨーデリア、君に・・・」

衣装のまま、棒読みながらセリフを読み上げてみると改めて恥ずかしくなってくる。このセリフはヒーローであるノアル役のセリフなのだが、本番はこれを聞きながら号泣しないといけないらしい。強がりながら、レディットは単身生活を小さい頃からしていたため涙を流す暇などなかつた。

『王女と商人の身分違いの恋』というありがちなストーリーのくせに専門家張りのまとまつた構成と脚本には裏方委員の気合が伺えて、レディットは少し怖かった。

「レディット？」

演技経験ゼロのレディットがどうしようか悩んでいると、不意にドアが開く。

「ツ！！」

ついにリースたちがやつてきたかと思い、メイク室のテーブルの下に野生の動物たちかおまけのスピードで隠れる。

「どうしたの？」

リースとは違う口調と声色に恐る恐る顔を出すと、そこに立っていたのはルッカだった。

「いや・・・なんでもないんだ。少しだけ最近疲れ気味なんですね・・・ところでどうしたんだ？」

服についてしまった埃を払いながら言うが、自分で言つて恥ずかしくなつたので話題を変える。

「ああ・・・ギルドの人たちも帰つたので演技練習を始めようかなと思つて」

「わかりました」

うつむき加減で講堂に入ると、レディットは一步身を引く。大掛かりなセットまでもが完成形に近い形で組まれていた。ただ、レディットの狼狽はそこではなくみんなの視線が自分に集まつている事だつた。

みんなの声に出来ないような驚きをみて、レディットはさすがに自覚と屈辱を覚えた。

「ま、まさか・・・」

その中の一人が静かに声を上げる。

「そう。レディットよ！！」

ルッカがなぜか我がことのように胸を張つていつた瞬間、レディットは空気がどよめいたのを感じる。

仕方もない。客観的に見れば、女性そのものだつたのだ。オーディションがノーメイクだつただけに、更なる衝撃がその場にいる全員に走つた。

「はあ・・・」

と、諦めかけたレディットがため息をついた瞬間。窓際に何かがよぎる。霧のせいでも窓がくもり、人型魔獣のかんなのか何かは分からなかつたが、他のみんなも見えたようで、いきなり

り現れた謎の人影のよくなものに目配せをし合ひている。

「僕が見えてきますよ」

みんながレディットの衣装姿と外を交互に見つめているので、早くその場を抜け出たくて見回りに出る。

行動の重い扉を開け、視界が開けぬ周りを一通り見渡すがそれらしい姿も気配もない。が、そのせいで静まり返った中庭にクスクスと笑うような声が響いている気がした。

とは言つても何もなかつたので中に戻り何もなかつた事を報告するど、みんな青ざめた顔になる。

「それって幽霊じゃない？」

そんなことを誰か一人が言つとみんな確信でも持つたのか、ざわつき始める。

「それよりも練習始めましょう」

それを止めるかのようにルッカが手を鳴らすと、みんな不安そうな表情のまま練習を始めた。

「すみません。遅れました」
レディットが演技練習の後、任務で受けた魔獣を退治して生徒会室に戻る頃には、もうすっかり暗くなっていた。
ここの人たちはオカルト好きなのか、結局劇の練習が終わるまで幽霊の話は絶えなかつた。

「遅かつたのね」

二ーナは特に仕事がないように振る舞い机に足を乗せたりなんかしているが、横の机で、副会長のジャンが大量の書類に印を押している。本来は誰の仕事なのだろうか・・・
文化祭の直前だというのに、このまつたりした空気は本当に特務班に似ていた。

「そういえば、さつきみんなが廊下で幽霊の話をしていたわね」
二ーナが何気なく思い出したかのように、先ほどの幽霊騒動のこと

を口にする と同時に、今までつまらなそうに外を眺めて

いたミヤビの方がビクンと震える。

「どうしたの？ミヤビちゃん」

「いや・・・なんでも・・・」

「ふうん」

平静を装いつつも顔を青くし、震えるミヤビとそれを見て人の弱みを一つ握つて満悦の一ーナを見て、さすがにレディットも理解した。

「ミヤビ・・・幽霊ダメなのか？」

幽霊というたびに震えるミヤビの肩は、むしろその言葉 자체に恐怖でも抱いていた。

科学もまあまあ発達しているこの国で、もうすぐ21世紀になろうとしているこの時代、そんなオカルトな事柄を信じている人間の考えをレディットはあまり理解できなかつた。

「まあ、本物を見れば価値観が変わるのかもな・・・」

レディットがそんなチープな論題を軽くあしらおうとした時、またもや窓の外に何かが通つたような気配がする。正確には声がした。一階であるこの部屋からでも分かるほどに聞こえるその笑い声は、先ほどレディットが聞いたのと同じ物だったが、どこか聞き覚えがあるきがした。

みんなも聞こえたのか、仕事をしていた面々も手を休めて窓の外に活目する。

するとうつすらと人影が見えてくる。その姿は

「女の子？」

ジャンがそう呟くのを聞き、ミヤビはゆっくりと身を横に倒す。どうやら本能が意識を飛ばしたようだ。

「ミヤビ・・・」

そんなミヤビの間抜けで情けない姿をみると、レディットは立ち上がり、今しがた視覚情報で確信をえた真っ白な髪の少女を追いかけに部屋を出た。

嫌な予感と刀を持ち合わせながら。

他主占有の女装少年（後書き）

どうもレイです。

今回は少しおとぎに遅れてしまいました。すみません。

3個次ぐらいにやつとバトル回です。

『カーテン』のバトルの部分が全然ないね。くらいに思っていた方はやつとです。

うまいこ下手は別としてみてくださいれば光榮です。

それと、次回は『ヤビ』視点のお話になります。

生徒会室で『ディット』と合流するまでのお話になります。

それでは次回も。

b ソレイ

曖昧模糊な怖がり少女

学園祭の準備はミヤビにとってはそんなに重荷になる物ではなかつた。

生徒会の仕事という事で、二ーナが暇つぶしに引っ込ま抜きに来れば、そこで仕事は終わりだつたからだ。

レディットが劇の練習をしているのに、と、少しだけ罪悪感があるのも事実だつた。

とりあえず仕事をしないわけにはいかないが、戦闘が得意ではないミヤビは、いつも小さな仕事ばかりで、代わり映えも何もない日常となつていて、何だかむなしささえ感じた。

それでも生徒会の席を外すわけにはいかず、生徒会室などから電話で任務報告をしていた。

それが少しだけ狂つたのが3日前。ミステインといつ少女の調査を始めてから、レディットもミヤビもあの不思議な少女の事が気になり始めていた。

『そう・・・それじゃあ報告ありがとうね』

『いえいえ。それじゃ後で帰ります・・・』

『あーちょっと!』

ミヤビが電話を切ろうとした時、通話口の向こうのリースが止めてくる。『ミヤビちゃんに頼まれていたこと、情報処理班から第一次調査の結果が届いたわよ』

『本当にですか?』

ミヤビは、レディットと共にミステインのことを調査し始めてから少しだけ気になる事があつたので、それを国境を越えて、他の国の中ギルドとも協力できるとも言われるショーダールギルドの情報処理班に調査を依頼していた。

その名目は、『特務班による霧の成分調査と可能性のある文献搜索』だったが、それによつて本当にミヤビが知りたかったのは、ミステ

インの素性や過去であり、これを知っているのはミヤビ、リース、情報処理班にいるリースの友人の3人だけであった。

情報の混乱や、一気に大量の情報が漏洩するのを防ぐために、定期的にそこまで出調べ上げられた情報が知らされた。今回はそのうちの第一次調査だった。

『今回分かった事は少ないらしいけど、盗聴が心配だからロゼットをつれて後でそっちへ向かうわ』

その一言を聞いて、ミヤビはこちらの事情を少しだけ思い出す。

「でもレディットは少しだけ外すんですけど……」

『あら、どうして?』

「今年のクラスの出し物で劇をやる事になりました、レディットはその主役なんです……」

ミヤビがそう告げると同時に、電話を隔てたこちらの世界でも分かるほどに向こうの空間の音が消える。珍しくも、お喋りなりースが黙り込んで全く声を発していない様子を想像するのは容易ではなかった。

『えっと……?』

『ああ! ごめんね?』

数十秒間の沈黙に耐えかねたミヤビが恐る恐る口を開くと、意識がどこかに飛んでいたかのようにリースが返事を返す。

『なんでもないわ! 何人でも別に支障はないしね。そのかわり二ーナとガーデンカフェで待つていて』

ブツツという音と共に電話が切れた。何だかリースがあわてていたようにも見えたが、ミヤビのほうも気にせず視線をずらすと、自分の名前が出たのが聞こえたのか、レディットが不思議そうにこちらを見ている。

『なによ……』

『いや、僕の名前が出た気がしたんだが……』
レディットが頬をかきながら聞いてくるのを見ると、ミヤビは無性に恥ずかしくなった。

「気のせいよーほり、劇の練習あるんでしょー。」

「ああ・・・」

聞かれていた照れ隠しこレディットを部屋から追い出すと、勢いよく扉を閉める。

そして一息つくと、ミヤビは椅子に座つて仕事もせずにふんぞり返つている一ーナのほうを向いた。

「どうしたの？」

「リースさんが話があるので一人でガーデンカフェで待つてくれと言つてました」

「わかったわ~」

本当に分かつているのかどうか不信がりつつもミヤビが窓の外を見ると、霧はさつきよりも濃くなつている気がした。

マルフ学園にはなぜか学食とは別のところにカフェがあり、ガーデンカフェと呼ばれる割に屋外じゃなかつたり、ただの学園のくせに御用達マスターが居たりなど、つっこみどころがあつた。

兎にも角にもそんな大層な場所で、一ーナのおじりでお茶を啜りながら一人を待つていた。

「お待たせ~二人とも」

ダージリンをストレートで飲んでいる一ーナとは違い、お子ちゃんミヤビがいくつも砂糖の塊を放り込んでいると、霧の向こうからいきなりリースたちが現れる。

その後ろについてきたロゼットはいつも如く不機嫌そしだが、ちゃんと約束どおりついてきていた。

「遅いわよ、姉さん

「『めん。まあ、とりあえず話を始めましょうか』

「あの・・・レディットはほんとにいいんですか?」

仲間はずれなのは若干可愛そしだと、レディットに気を使つたミヤビがその名を口にした瞬間、リースの肩がピクリと振るえて黙りこ

み、ロゼットがため息をつく。

「センドウ、それは禁句だ・・・」

未だになれないロゼットの苗字呼びと、リースの脳内思考が全く不明瞭で読めないことにミヤビが戸惑いつつも、リースをみると、立ちながら自分のブーツのヒールで自分のもう片方の足を思い切り踏みつけている。まるでそうでもしないと正気を失つてしまふかのように。

「姉さん落ち着いて頂戴。とりあえず座つて」

「あつ・・・ああ、そうね・・・」

二ーナが宥めながらも紅茶を飲み干したところで、我に返つたリースたちも席に着く。

「ミヤビちゃんから依頼されていた調査の結果がこれよ」

『そういうながら一枚の紙切れを広げる。「まあ簡単に読み上げると、『霧の正体は何らかの能力的なものであり、成分の中に少しだけアーデルクロトンと呼ばれる、魔獣だけに影響を及ぼす放射線のような物が含まれているので要注意』だそうよ。素人には良く分からぬけど、これを今の状況に置き換えるならその誰かの野力の発動を止めない限り、霧は消えないということね』

今の状況という事なので、能力の発動源はミステインと考えたほうがいいのかもしれないが、可能性はまだまだあるの対処が難しい。

「つまり、だ。一番の解決の糸口は能力者の特定と、能力の停止を促す事だ」

ロゼットの至極単純かつ明快な解決法もミヤビにとつて納得の行くものではなかつた。ミヤビにとつてこの霧は確実にミステインによるものだ。その考えの中、ミステインが故意に霧を出しているとは思えなかつた。

それは偏つた考えだとミヤビ自身分かつていて、これ以上放つておくとレディットまで危ない目に会うような嫌な予感がしていた。「ミヤビちゃんの浮かない顔の訳なら分かつてるわ。だからこそ調べ上げておいたわ」

心の読める卑怯な姉妹の姉は、バッグからもう一つの書類を取り出すと、テーブルの上に置く。

「ミヤビちゃんは本当にレディット君が心配なんだね~」

それに次ぐように、本格的に心奥底まで読める妹のほうが一ニヤニヤしながら見つめてくるのを必死でスルーしながら、リースの話に耳を傾ける。

「まあ、詳しいことは後で文面に目を通してもらいつとして、こっちもささりと話しかやおうか。昔話になるけど、9年前にある事件が起きたの。シェダールの歴史上これ以上ひどい事件はないといわれている事件よ」

「『子供たちの最後の夜』・・・」

感慨深く、思い出すようにロゼットがポツリと呟くが、ミヤビの耳にははじめて届いた名前だった。

名前の響きからしてロクでもない事件なのは見え見えである。

「そうよ。ミヤビちゃんは知らないかもしれないからそこから話すけど、9年前のある時、たった2週間で4~10歳の子供が60人以上も誘拐されたの。別の国の子もいたけど、その中の多くがシェダール人だったわ。とある教団が実験のために誘拐したその子供たちは、事件を暴くのが遅れたせいで、ギルドや警察の人間がつくころには一夜にして大半が死んでしまっていたの」

名前の意味を理解すると同時に、ミヤビの背に少しだけ悪寒が走った。発見時の子供たちの状態を想像できてしまつた事もあるが、ミヤビは自分も条件に当てはまる事に慄いた。

「その実験って言つのが、『能力の量産及び移植』だったの。今考えれば無理な話よ。個人個人遺伝に関係なく目覚める唯一無一の『アビリティ超能力』を優劣で分けられる『活用能力』に変えようとしていたのだもの。そんな実験成功するはずもなく、何の能力かは分からぬけど、無理やり押し付けられた能力に負けたから子供たちは死んだの。その教団も残念ね。人身売買の一種である誘拐と過失致死の両方という重罪を犯してまでした研究は見事に失敗したのだから」

「そんな・・・」

ミヤビは自分の想像以上のことになると声が出なくなる。腐っているとか思えなかつた。個人の勝手な欲望で多くの命を奪つた教団、それをとめることが出来なかつたシェダールの組織も。

「当然、その組織の幹部クラスは全員極刑

終身刑よ。で

も逃げ延びた団員もいるかもしだい。その残党が集まつていると いうのが、この町のマフィアである『リヒティヒ』という組織よ』

『リヒティヒ』

その生名前には聞き覚えがあつた。ギルドのみんなから知つておいたほうがいいといわれたし、レディットからも聞いていた。しかし、この国の政治の仕組みなど微塵も分からぬミヤビにとつて、その存在が許されつつ黙認されているのが不思議でならなかつた。

「その残党たちが実験を引き継いで続けていて、もし成功していたとしたら? その成果がミスティンだつたとしたら? とこゝのが私の推測よ」

そこまで聞くと、ミヤビは納得せざるを得なかつた。直感的にあつてこるといつたほうがいいのかもしだいが、レディットへの心配もよりいつそう強くなる。

「どうした物かとミヤビが悩んでいると、軽快な音楽がリースの懐から鳴る。

「あつ、『じめんね』

そう言ってリースは携帯を取り出し、会話を始めた。「もしもし・・・はい、今はマルフ方面です・・・エッ! ? ・・・はい・・・はい、分かりました」

会話の途中でえらく焦り始めたリースは一気に紅茶を飲み干すと、ロゼットの袖を引っ張る。

「支部長からの連絡よ。魔獣が市内に入り始めたから応援要請。ほら、いくわよ! ! 一人とも、またあとでね! ! 」

それだけ言い残すと、調査の書類をミヤビに預けて走つていつし

まづ。

「ミヤビちゃんは先に生徒会室に戻つてくれ。私は少しレティックト君を見てくる」

二一ナまで立ち上がりていつてしまつ。だがその爪先は劇の練習をしている体育館ではなく、マイク室の不に向かつていた。

「どうしよう……」

レティックトの練習が終わるまでもまだ時間は残つていた。

「すみません。遅れました」

ミヤビが気がつく頃にはレティックトが戻つてきていた。

時計を見上げると、リースたちが来てからもう1時間も経つている。その間ずっとわざわざの事について考えていたミヤビの脳は睡魔を招いていた。

大きなあぐいを一つこぼすと、少しだけ脳を働かせてレティックトにさつきのことを告げるべきかどうかを考える。

きっとレティックトのことだから余計にミステインのことに首をつり込みかねないが、何も話さないままにやめさせると、続けさせたレティックトを危険にさらすのもどうかと思つた。

「つ～む・・・

「ねつこえは、わきみんなが廊下で幽霊の話をしていたわね」ミヤビが頭をショートさせかねない勢いで悩んでくると、耳に恐ろしく吸い込まれていく気になる単語があつたので、ミヤビは思わず体をびくつと震わせてしまつ。

「どうしたの？ミヤビちゃん」

「いや・・・なんでも・・・

「ふ～ん」

平静を装いつつも、幽霊が苦手なミヤビは今この場に話題になつただけで冷や汗が滴る。

二一ナに心を読まれているのはもはや逃れられないと諦め、せめてレティックトには情けないとこは見せたくなかつた。

「//ヤ//・・・幽靈ダメなのか？」

そんな//ヤビの必死の抵抗むなし、幽靈といつ単語が口に出るたびに肩が振るえ、レディットにもばれてしまつていて。

レディットはそんな//ヤビ様子を見て、なにやら考え込むよつた顔をしてて。それをみると、//ヤビは何か哀れむよつた感情を抱かれている気がしてならなかつた。

（同情はヤメテ！）

//ヤビがそんな事を心中で呟くと同時に窓の外から笑い声が聞こえてくる。少女の声だ。

//ヤビは全身に鳥肌を立てつつも、必死に答へする。

（幽靈なんかじゃない！幽靈なんかいない！…//ヤチガイダ！！！）

そうやつて自己暗示をかけながら窓の外を見ると、確かにいつすらとしか確認できないうが少女がいる。

//ヤビが意識が飛びそうのをいり込んだながら半田でやつ過いりつつしてて、ジャンがポツリと呟く。

「女の子？」

その言葉を聞いた瞬間。//ヤビの中にこびり附いた恐怖心と睡魔に包み込まれ、意識がとんだ。

曖昧模糊な怖がり少女（後書き）

いつも！レイです。

今回はミヤビ視点のお話となつておりました。

最後のシーンは、前回と比べてもらつても面白いかもしません。
途中で改行があまりできず、セリフでページが黒々としてしまい、
読みにくいと感じた方は申し訳ありません。

次回は通常視点で色々切り替わると思います。

それでは次回も。

บาย

「…だ…」

アーティストの才能の發揮がアーティストが、歌つが歌が。

それも今の状況を見れば誰でもそう言つだらう。それほどに今の状況は絶望的かつ驚くべき物だった。

四
七

魔獣が市街地に入り込むのを防ぐためにおろしているはずの防御門が開いていたのだ。正確に言えば、厳重に管理されているこの門が開いたということは、誰かが開けたのだ。

魔獸が入ってきたら危険極まりない。

援要請だつた。

なを呼ぶわよ」「仕方ないわ」「口せんよ」「ここちがは死るわよ」「狀況はよこではみん

了解

本来はそちらに向かうべきなのだろうか、リースが臨機応変な対応としてここに警備をする事を決める。

リースがその旨をユレイダに伝えようと携帯を取り出した瞬間。

霧の向こうから女性の悲鳴が聞こえてくる。続いて荒々しい魔獣の
ような呼吸音が聞こえてくる。

馬鹿げて、けれどそこには獵型の魔晄が三四ほど織れ込んでいた。それに囲まれるようにして女性が一人がうずくまっている。

「リース！！人員誘導を頼んだ！！」

姿の見えない霧の向こうに叫ぶと、ロゼットは近くにあつた鉄製の

柵を一つ千切りとる。無理やり折つたり、馬鹿力を使つたりするのではなく、金属自体をやわらかくして少ない力でも取れるようになつたのだ。これがロゼットの能力。「メモリア・ハンズ記憶の手」である。

この金属原子の状態変化を自由にする手で千切つた柵の一部が見る見るうちにナイフの形に変わる。それを魔獣の中心に投げ込むと、ひるんだ魔獣が飛び退いて女性たちから離れる。

その隙を見逃さず、ロゼットが女性たちを逃がすと、狼はロゼットに体の向きを正す。ナイフをどんどん作つて投げつけるが、威嚇程度にしかならない事はロゼットも分かつていた。

意外と素早い狼たちの引っかきやかみつきを寸でのところ交わしていると、ついにナイフがなくなる。

「ロゼット！！」

それと同時にリースが霧の向こうから現れる。「思ったより人が多いわ。最低でも10分はかかるから足止め頼んだわよ」

「離れて貰えれば3分で終わる」

「分かったわ」

ロゼットの意図を察したリースはぐるりと身を翻す。「皆さんこっちです！貴重品以外の重たい荷物は一旦その場においてください！子供連れの方は手をつなぐかおんぶや抱っこで離れ離れにならないようにしてください！！落ち着いて！！」

迅速かつ明快なリースの誘導によつて、周囲から人の気配が遠のいたところで、ロゼットは柵をすべて引っこ抜いた。

「久ぶりだね、お兄さん」

ミスティンは嬉しそうに微笑む。久しぶりと呼べるほどでもないが、数日振りに見るその顔の変わらなさに、レディットは少しだけ口角が上がる。

発見報告のために先ほどアネモネにも電話したが、なにやらアデルバで大きな任務があるとのことで、結局は一人で追いついた。結構な大問題が起こっているようだが、事実ながらも目の前にいる少女

も大問題の元凶であるとレーディットは踏んでいたので追いかけてきたのだ。

ミステインを幽霊だと思い込んで氣絶してしまったミヤビを置いてきたのは少しだけかわいそうに思つたが、すぐに目覚める様子もなかつたので良いかななどとレーディットが思つていて、ミステインが急に笑い出す。

「それにしてもレーディットにいつもついているお姉さんは、ホントに私を幽霊だと思ったのかな？一人を見つけておふざけ半分でやつてみたら大成功だつたからビックリしたわ」

「君な・・・」

それを言われると、そのただのおふざけ半分に引っ搔き回されるてるマルフの生徒たちや、ミヤビがいたたまれなくなつてくる。今考えれば、ミステインにもそれとなく幽霊っぽい要素がない事はない。フランスドールの如く小さな体躯、マトリョーシカの如く白い肌も含めればそれなりかもしれない。

でも今大切なのは事態の解決であり、子供の遊びにまともに付き合えるほどレーディットも暇ではなかつた。そこでレーディットは、ミステインの目的が鬼ごっこにあれば、捕まえる事で何かを聞き出せるのではないかと考えたのだ。

「暇だつたから良いでしょ？最近お兄さんもお姉さんたちも見なかつたから」

「家に帰ることは考えなかつたのか？」

迷子のお子様に対するお子様な質問をだめもとしてみると、ミステインはあごに手を当てて考えこんでいる。考え込んでる時点で期待は薄れていたが、ミステインは何かをおもつて、キッと顔を上げる。

「うーん・・・思い出せない！」

その言葉にレーディットのひざから力が抜ける。こんな流れは誰かさんとのときに経験済みだつたが、さすがにここまでできつぱりといわれるとは思つていなかつた。

「でも捕まる気はないからね。いつでも挑戦待ってるよ」

「じゃあ・・・」

レディットと言いつと同時にミステインが身構える。「今回は捕まえさせてもらひやん！」

その一言がレース開始の「ゴング」であるかのように、一人同時に駆け出す。もちろん十分大人であるレディットのほうが足は速いのだが、如何せん霧の中なので見失わないのに必死で、逃げるほうが圧倒的に有利だった。

木々の間をスルスルと抜けていくミステインを震む視界の中で何とか追っていると、少しだけ周囲の空気が重くなり、嫌な予感がレディットの脳内をよぎる。

しばらくミステインを追っているとその予感の源が分かる。本来魔獣のいる区域とある程度の広さで市を隔離している魔獣の嫌がる細胞が埋め込まれている地面の防壁が無くなっているのだ。つまりそれはどんどんアーテルバから離れていくことを意味していた。（市のほうで管理しているはずの防壁がなくなるところは・・・）

そう考えるとアーテルバに何か異変が起こっているのではないかと、少しだけ不安になる。

「お兄さん！ よそ見してると危ないよ～」

ミステインの一言で現実の世界に引き戻される。それと同時に木の陰に気配を感じる。

一旦とまり、刀を太ももに固定した鞄から取り出ると、力を込めて木を切り倒す。ザツ！ と音を立てそこから勢いよく飛び出してきた魔獣の一撃を交わすと、体勢と立て直して叫ぶ。

「ミステイン！ 逃げるんだ！！」

これでミステインもさすがに逃げるかとおもつたが、そこはこの少女の好奇心の測り間違えだつた。全く逃げる様子やおびえる様子など見せず、むしろレディットが魔獣と闘つのを楽しく観戦しているようだ。

「仕方ない・・・そこから動くなよ！」

レディットは早めにけりを着けるために、炎を出せりとするが・・・

「炎が出ない？」

勿論、コツを忘れたわけでも、急に能力が体から無くなるなんてことはありえるわけでもない。ただ単に出そうとしても何らかの力がそれを拒んでいるような感覚だった。

そんなこんなで初めての経験にレディットが戸惑つていると、魔獸にどびかかられ、胸元を爪で切りつけられる。

「クツ！・・・

少しばかり衝撃を軽減しただけなので、見事に制服には傷がつき、皮膚が切れた血まみれの肌があらわになつてしまつてている。タイムラグもなしに飛んでくる次の攻撃をギリギリでかわす手立ち上がるとい、やつと痛みが薄れる。

「お兄さん、大丈夫？」

呑気なミステインの声援を耳に、今度は正々堂々真剣で斬りつける。表皮に傷をつける程度で、たいしたダメージにはなつていよいよだが、こちらが受けたダメージもそうでもないので、攻撃は見える。右腕の振り下ろし、噛み付きをかわして、何回もきりつけているうちにようやく手ごたえを覚えてきて、36回目にしてやつと無力化できた。

「・・・よし」

アデルバ周辺魔獸の異常な強さに汗をかきながらも、辛勝した。

「よし！それじゃ、鬼ijoに再開だね！」

鬼のような一言を吐き捨てると、ミステインはまた走つて霧の向こうに消えていつてしまつ。

勿論手負いで追いかけるのはきつい。かといって魔獸のいる地域で女の子一人をほつたらかしておくわけにも行かないでの、レディットは仕方なくまた追いかけ始めた。

それでも嫌な予感は消えず、さらにポケットの中の携帯がなつているような気がしたが、そのときのレディットは全く気に止めなかつ

た。

「もしもし？・・・・・フォーゲルね！ひさしぶり！－！」

「え？」

二ーナの携帯の元にかかつってきた電話の相手に、ミヤビはおもわず小さく声を上げる。

「・・・え？ミヤビちゃん？うん、今代わるわ・・・」

そう言つて二ーナはミヤビに携帯を渡してくる。そのかわいらしいピンク色の携帯を受け取ると通話口に耳を当てた。

『もしもし、ミヤビ君かい？』

とても焦つたような口調のフォーゲルがでる。『すまないね。私と二ーナは特務班で会つて以来旧知の仲なんだ。それよりも、レディット君に連絡は取れるかい？』

「あ、やつてみます・・・」

二人の意外な関係に少しだけ驚きつつも、自分の携帯を取り出すと、フォーゲルとの電話を切らないままレディットの番号にホールする。が、いつもで立つても無機質な呼び出し音が響いているだけで、レディットが出る気配はなかつた。

「出ませんね。いつもなら3ホール以内には出るのに・・・」

『私がかけてもこの調子なんだ。支部長から応援要請が出ているんだがな・・・まあいい。ミヤビ君はレディット君を探し出して、見つかつたら、ギルドまで戻つてきてくれ』

ミヤビの思つ以上に緊迫した状況なのか、すぐに電話を切られてしまう。

レディットのことを任されてしまつたが、どに言つたのかなどは全く皆田見当もつかない。

ミヤビは少しだけさつきまでのことを思い出す。幽霊の噂に呑られていたが、今考えてみればあの少女どこかであつた事があるきがする。それどころか、今追いかけている少女に似ていたような・・・

「！」

想像と考察をしているうちに恐怖で全身の鳥肌が総立ちになる。ニヤビはぶるぶると首をふり、怖さを吹き飛ばすと、二一ナに携帯を返して立ち上がった。

「ちょっとレディットを探してきます」

「心配なの？」

「ち、違います！頼まれたからです……」

もうに心を読まれて居る事も知らずニヤビが外に出でみると、二一ナが腕をつかむ。

「ちょっと待つて。これをもつていくと良いわ」

そう言って二一ナはよく分からぬ地図のよつた画面が表示された小型の端末を渡してくる。おおよそのこのあたりの地図と、現在地を示す青いマークのほかに、一つだけ赤いマークが点滅している。だが見る限りはスピーカーやアンテナなど、通信的な機能はついていないように見受けられる。

「これ、なんですか？」

「実はさっき姉さんたちが来た後に、レディット君の制服に簡易発信機を忍ばせておいたの。ニヤビちゃんがどうしても嫌な予感がしているようだつたから」

「発信機！？」

どうしてそんな物を一学生が持つて居るのかは猛烈にニヤビは気になつたが、とにかく急いでいるため、二一ナがレディットの衣裳部屋に向かつた意図を把握すると、お礼を言つて部屋を出た。

「追い詰めたぞ……」

ついにミステインを追い詰めたレディットは止血もしないで走つていたためフラフラだつたが、にこりと歯を見せて笑つた。

後ろには建物が一つだけあるが、それもビックやら使われていないうしく、全く人の気配がしない。

ミステインも「むむむ……」と困った表情を見せて居る。

一般人がどうかは別として、子供との遊びにここまで本気で付き合

つたのはレディット自身はじめてであった。恥ずかしながらもアーデルバがどちらにあるのかも分からぬ。

「かくなるうえは……とう……」

最後の抵抗に、ミステインは行き止まりと分かつてはばの建物へ逃げ込もうとする。

だが、ミステインが振り向いた瞬間、草むらから一人の男が飛び出してミステインを薬で眠らせる。

「！」

片方がミステインを担ぎ、その建物の中に入る。レディットも追いかけようとするが、もう一人の男が行く手を阻む。手に警棒とサブマシンガンをもつているところを見ると明らかに一般人ではない。更に丁寧にサングラスと幅子を深くかぶり、身分がばれないようにしている。

「あなた達か……ちきからずつと僕らを見張っていたのは」

「……」

男はあるでレディットの質問に答えようとしないが、腰を低くして警棒を構える。

「肯定、だな……」

ミステインを助け出すべく、レディットも刀をぬぐ。見たとおりの傭兵まがいの輩ならばレディットの相手ではないが、そうなると出てくる雇い主の正体が気になつた。

しかし、聞いたところでどうせ答えてくれるわけもないのに、レディットは呼吸を整えると、地面をけつた。

先手必勝。そんな単純な展開を繰り広げてくれる相手だつたら楽だつたが、さすがにレディットの初撃はかわされる。それでも体勢を崩すことなくレディットが振り返ると、意外に早い男の警棒が振り下ろされてくる。

「予想以上だな……」

それをかわすと、レディットは感嘆の声を漏らす。

能力にあまり頼らない派のレディットの動きはなかなかすばやいは

ずなのだが、なにとなくついてくる男との戦闘に、レディットは久しぶりに興奮してしまった。

今度は男のほうから走つてくる。低い姿勢から繰り出される警棒の振り上げをレディットがかわしたと思つたら、警防が一回光り、レディットの腹部に謎の一撃が叩き込まれる。

「クツ！…」

浅い一撃ながらも、まだ閉じきつていらない先ほどの傷口に叩き込まれたので、レディットは予想以上のダメージを受けた。

しかし、それよりもレディットが気にしたのは、かわしたはずの攻撃がなぜ飛んできたのかであった。何らかの能力ならば説明がつくが、男自身が能力を使つているというよりも、武器 자체に追加ステータスとして備わつているような攻撃の飛び方だった。

考える暇もなく、男が追撃をしてくる。今度は刀で防いで見る、が、火花散らしてぶつかる一つの武器とは他にビームからか攻撃が飛んでくる。

（ど）からだ！…

攻撃を受けて後ずさりながらもレディットが目を凝らすと、警防が二股に分かれていて、その片方がレディットに攻撃をしていた。

（そういうことか・・・）

しかし、レディットが謎を解き、打開策も思いついたところで男は警棒を捨ててマシンガンを構える。

「時間がないので早めに終わらせます」

初めて口を開いたかと思つと、男は何のためらいもなくサブマシンガンの引き金を引く。

消音機能もつけてない銃の音が森に響く。いつもとは違い、レディットは炎による防御が使えないため、木の陰に隠れながら接近を試みる。

「キヤアアアアアアアアアア！」

と、不意に建物の中からミスティンのものと思われる悲鳴が響いてくる。

「一か八かだな・・・」

これ以上戦闘を長引かせるとミスティンが危ないとふみ、レディットは木の陰から飛び出す。全力で男の足元に駆け寄り、足払いを仕掛ける。霧のおかげで、レディットが良く見えなかつたのか男は転ぶ。

追い討ちをかけ、レディットが馬乗りにならうとすると、男が銃口をレディットに向ける。

「甘い！・」

レディットは刀で銃口をそらす。弾は狙いがそれであらぬ方向に飛んでいく。

（よし、勝つた！）

レディットそう思った瞬間、男の持つ銃はまた一股に分かれ、もう一方の銃口はしつかりとレディットを捕らえていた。

「クツ！！」
フレイル

レディットは反射的に炎をともそうとする。が、やはり炎は灯らず、放たれた銃弾がレディットの着ている制服の襟の部分を吹き飛ばす。レディットの鎖骨の辺りから血が噴出すのと同時に、右腕に少しだけ炎が灯る。それが男の体を包む。

（そういうことか・・・）

レディットが炎が灯らない原因を思い出したといひで、男の2発目の銃弾が腹部をえぐつた。
あつという間にレディットの周りには血溜まりが出来る。男も力尽きたのか、その場に倒れ付す。

（体に力が入らない・・・）

迫り来る「死」というものをレディットが感じている、景色が暗転する。そこには一人の少年が立っていた。まだ幼さが残る中性的な顔にアッシュブルンド。それは幼き日のレディットだった。

「君と僕の能力はそんなものだったかい？」

レディット少年は不意に問いかけてくる。「君と僕の能力はそんな能力じゃない。『炎』じゃないんだ。

霧の中でいくら水分が多くたって、制服を着ていたって、能力の質を変えてやればいいだろう?」

ボーッとする頭で、レディットは言葉の意味を理解する。

「君は僕で、『炎』^{フレイル}の能力者だ。こんなところでの子を放り出すわけにはいかないよ」

レディット少年のその言葉が、レディットの中の記憶を走馬灯のよう駆け巡らせる。

そして、レディットは腹部に手をやると、『炎』^{フレイル}を発動した。

危急存亡の霧少女（後書き）

どうも、レイです！！

今回のお話は基本レディット視点で、バトルを交えてお送りいたしました。

次回に受け継ぐ形となっており、後2・3話でミステイン編は終わりです。

難しい表現などあつたら申し訳ないです。

それでは次回も。

byレイ

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能をもつておかなければなりません。

誰かに名前を呼ばれている気がする。手を伸ばせばその声の元に手が届きそうなのに、けだるい体がそれを拒むかのように重さを増して来る。

その声はリラックスした言語の元に感情を引き戻してくれる。そう。思い出した。謎の男との先頭で二発も体を打たれ血がどんどん体から抜けていき、止血が出来る状況でもなかつた。だからレディットは死んだはずだつた。

だとしたらここは死後の世界なのだろうか。じやあ知つていい気もするこの声は誰の物なのだろうか。なぜレディットを引き戻そうとするのか。うまく頭が回らず、何も分からぬ。

炎を防御に使えたかった理由。一つは、レディットはすっかり忘れていたことだが、リースがこの制服には能力を抑える装置が入つてゐるとか言つていたからそのためだろう。二つ目も至極単純で、空気中の水分が多いからこそなる霧の中で、「燃える」炎をだすのは無理難題であると、ハリウッド。

たが、そこではレディットは思い出した。危なげのない日常で忘れていた「炎」^{フレイル}の本質を。
「どうして、この後悔は炎^{フレイル}だ

田を開けると、そこには田いっぴに涙をためたミヤビがレディットの手を握つて祈るように叫んでいた。その後ろから差し込む日差しにレディットは思わず田を閉じる。どうやら田が変わってしまったようだ。

そんなニヤニヤも、レーティッシュトが田舎ゆるい口づけと涙をぬぐつて咳払いをする。

「よかつた・・・無事で。でもこんなとこ何やってるのー?」

(そうか・・・暗闇の中での声は・・・)

ミヤビの顔と、いつもの強がりを見ると、今まで冷たかったような感じた体温がどんどん上がっていく。

そしてふと撃たれたはずの一いつの傷口を見ると、どちらも凍つていた。それは一つとも、炎の力によつて凍らされた物だつた。死を感じたときにふと現れた幼き頃の自分。その言葉通り、レディットの炎は、炎の形をしているだけで、実は他の色々な性質も兼ね備えている物だつた。凍らせるこども出来たなら安心。レディットの脳内にはその言葉しかなかつた。それにより口元がほころぶと、ミヤビが訝しげな顔をする。

「何笑つてるのー?」

「いや、心配してくれたんだなつて」

「ち、違うわよーー文化祭前なのにいなくなるから、みんなに探しにいってつてー!」

レディットの何気ない一言で、ミヤビは分かりやすく反応する。確かに、ミステインを追いかけ始めてから文化祭の事など忘れていたが、隣に転がっている制服はボロボロで、使い古しの雑巾みたいだつた。

ミステインを追いかけたのも、最後に劇の稽古をしたのも昨日の事なのに、何だかレディットには遠い昔のように感じる。

(・・・・・ミステイン?)

自分で口にしたその言葉がレディットの中にぐるぐると回る。そして思い出す。

「・・・・・ミステインー!」

レディットは忘れていた。今までミステインを追いかけ、そして不甲斐なくも相打ちになつてしまつた事。それにより今自分がここにいる事を忘れていた。

思わず立ち上がるが、レディットの予想に反し傷口には全く痛みが走らなかつた。凍つていて感覚がないだけなのか、これも炎の恩恵

なのが分からぬが、今の状況ではありがたい。

「ちょっとどっこいくの！？制服も血だらけなのに！！」

当たり前だが、レディットが方向もわからず「帰ろ！」とすると、ミヤビが立ちふさがる。

「ミステインがさらわれたんだ！！一人組みの男だった。この建物の中にいるかもしれないんだ」

さすがにさらわれた事については驚いたのか、ミヤビも少しだけ考え込むようなしぐさをすると、仕方なく道を開けてついてきた。

「うわっ！・・・」

建物の中に入るなり、ミヤビが咳払いをする。「埃だらけじゃない。人が管理していらないのね・・・」

確かに建物の中は廃れている。埃が大量にたまり、レディットたちが動くたびに舞い上がるし、くもの巣は数えているときりがないほどで、縄張り争いでも起こりそうだ。

ミヤビによれば、ここはアデルバの北西³kmほどのところらしい、ミステインまでそんなに走っていたのかと思つと、さすがにレディットは驚いた。

「でも、意外とちゃんと使われていたみたいだな。資料がきちんと管理されている」

レディットは適当なデスクの引き出しから一枚の紙を取り出す。その内容は、『ロツテスユリ』の活用法と、その薬の生成方法など、レディットが聞いたこともない名前ばかりが挙がっている論文だった。

数秒見ているうちに興味を失い、机の中に資料をしまうと、奥へと足を進める。

扉をいくつか潜り抜けたところにあつた部屋で、一人は足を止める。それまで部屋を素通りするだけのレディットと、それを小走りで追いかけるミヤビの足を止めるだけの物がそこにはきちんとあつたのだ。

「レディット……これって……」

「ああ、何かの宗教のマークか何かだろう。それにしてもこの大きさは……」

そこには、30畳ほどの部屋の床を埋めるほどの大きさで書かれた紋章か何かのような物があつた。茨に捕まり、胸をナイフで貫かれて血を流しているフクロウが描かれたそのマークは、とあるマークに似ていた。

「これはシェダールの国章に近いな……」

レディットの知識が正しければシェダールの国章には、鋼鉄の籠手と木に足をかけたフクロウが描かれていて、それは自然の象徴である『木』と、人類の発明としての『籠手』の共存を意味しているのだ。

それを知っていたのか、ミヤビも興味深そうに口を開く。

「でもこのマークって、真逆の意味をあらわしてるのよね。多分『自然と発明により国が壊れる』見たいなことがあるんだろうけど、意図がわからなくなる？」

「そうだな……宗教と仮定するならば、国家に対する反逆的思想に偏った物と思って良いんだろうが、研究施設にこんな物を描いていたら国の監査が入ったときにばれるだろうし……」

「そうね。結局ミステインもいみたいだし」

「ああ……とりあえず帰るか」

意図が不明瞭なまま、とりあえずミヤビの持っていたカメラで写真を何枚か撮ると、特に大きな収穫はないまま研究所を後にした。

アデルバについたのは、研究所を跡にしてから3時間もたつてからだった。

ギルドの出勤時間には間に合つたが、一応レディットは怪我人だし、案内人がミヤビなので、何度も迷いそうになっていた。

ずっと抑えていたうちに傷口の氷は解けてしまったが、能力者特有の回復力と、固まった血で何とか銃創はふさがっていた。それでも

ギルドのみんなや学園のみんなに心配をかけないよう、と、ナリベの上着を借りて傷口を隠している状態だった。

「病院に寄つたら? 時間もあるのよ?」

さつきからミヤビはこの調子で、5分に一回は同じ質問をしてくるので、嬉しいのだがその心配は逆にレディットを疲れさせていた。「だめだ。僕がヒロインをやる事になった以上、休むわけにはいかないし、それに・・・ミヤビ一人に家事を任せるのは心配だからな」「ちょっと、何よその言い草は！人間がせっかく心配してるので！」

レディットが24回の回答にしてやつと一言多く減らず口を叩く
と、ミヤビはそっぽを向く。少しだけかわいそうかとも思ったが、
血が足りずテンションの上がらない今のレディットについては、か
まってくれないぐらいがちょうど良かった。

もすぐに飛んできた。

そんなこんなのがよく分からぬ關係のまま特務室につくと、出勤時間前なのに中には珍しく特務班のみんなとユレイダがそろつっていた。

レテ、ト君、無事だ、だのれ！」

姿を見ると椅子を倒して声を上げる。

すがに動搖した。

明なんて・・・」

走る。

「おはようござんす。怪我をしてるのね」

リースが予想の範疇であるかのように咳く。どうやらレディットの些細な気遣いなどお見通しだつたようだ。心を読めれば当たり前の

ことなのだが。「病院は・・・行く気はないみたいね
「すみません・・・それで皆さんは何を?」

みな口々に言う『緊急事態』の意味が分からぬレディットは、不思議に思っていた。町に戻っていた時も、所々壊れていたり、厳戒例が敷かれたりしていたらしく、アデルバの変わりようはなかなかだつた。

それでも霧はかかっていたため、ミステインはまだ近くにいるとわかつたため、急がずにここに戻ってきたのだ。

「色々ありすぎたから、少しづつは話すわね。昨日午後6時ごろ、魔獣の侵入を防ぐためにおろされていたつり橋形式の防御壁とフェンスが壊されたの」

「・・・・・！」

レディットは思わずいくつかの単語に反応する。時刻も状況も、ミステインとの鬼ごっことのときに感じた異変と同じだつた。

「・・・それは知つていたようね。その後、それにより魔獣がアデルバに入り込んでしまつたの。勿論人も出歩いていたから大混乱になつて、ギルドと警察が駆り出されたわ。苦情も来ている。でも問題はそこじゃないの」

「誰の意図したことか、ですね・・・」

今までの事から、解決すべき謎はそれだけだつた。人為的にしか動かせない装置を、ハッキングによる遠隔操作にしろ、直接制御したにしろ、それだけの大事をやるだけの動機さえ絞れば、犯人も見えてくる。

「アデルバを混乱に陥れるだけが目的ではないでしょ、組織的な犯罪と見て間違はないわね」

「確かに同時進行できるほど簡単な事でもないですしね」

「ううん・・・あれ?それよりレディット君はミステインを追いかけていたのよね」

会話の途中で、リースがふと思いついたかのように呟く。「その様子じゃあ結果は振るわなかつたようだけど、怪我と何か関係がある

の？」

さすがに女の子との鬼ごっこで胸に切り傷、わき腹と肩を鉛弾で撃たれる奴なんていない。レディットは一瞬だけ戸惑つたが、嘘をつくのも無駄と、簡潔に今までの事を説明した。

「それは・・・」

すると隣で黙つていたコレイダが、知つてゐるかのように声を上げた。「確証はないが、もしかしたらリヒティヒと関係があるかもしないな、アデルバの機能を止める事で、ある程度動きを柔和かつ迅速に出来るようにしてゐたのかも知れない」

「リヒティヒ！？」

たしかリヒティヒは法に触れないギリギリの水面下で動いていたといつてゐた。そんな組織が動かざるを得ないほどの事態とは、どうにもレディットたちだけで入り込める気がしなかつた。

だが、リヒティヒがなぜ犯罪まで犯してミステインを誘拐し、それによりどういう利益を狙つてゐるのかにはレディットも疑問を持った。

「目的は何だか分からぬがね。大事ならばテロもあるかも知れない」

「解決の糸口はやつぱりミステインと霧ですね」

「でもレディット、ミステインの居場所つて分かるの？」

「あ・・・」

さつきからミステインのことを考えていたレディットも、いつもぶつかる壁はそれだった。

ふがいなくもレディットが逃がしてしまつた男と、戦つていた男も姿はなかつた。闘つていた男が自力で目覚めたり、仲間が来たのだとしたら、レディットは見逃されたという事になる。それはそれで腹が立つた。

「霧の濃ささえ敏感に分かればなあ・・・」

ミヤビがポツリと呟く。ミステインのいるところは霧が濃いという法則をのべたものだつたが、それを聞いたレディットは、荒々しい

が一つだけ作戦を思いつく。

「成功するかは分かりませんが、少しだけ時間をください」

そういう残すと、レディットは用意のために自室へ引き返した。

危急存亡の濃霧少女（後書き）

どうも、レイです。

今回のお話はレティットの能力について触れてみました。
ミステイン解決、学園祭、『紅きノアルの奔走』、の3話でミステイン編を締めくくりますが、一つだけ問題が。
こちらの勝手な事情により、この3話を完結するのに4ヶ月かかってしまうそうです。

申し訳ないのですが、いまここで投稿日を予告します。

次話・・・11・13日 次々話・・・12・28日 3話目・・・
2・8日

に設定いたしますので、この日の17時には投稿いたします。

待ち遠しく感じていただく方もいるかもしれません、次回もまた。

byレイ

危急存亡の青空少女

「あーー」めんねレディット君！

あわただしくミーティングを終わらせたアネモネがかけてくる。ミステインを見つけるアイデアを思いついたレディットは、リースたちに通常任務は任せながらミヤビをつれて、アネモネの所属している部署まで同行を求めてやつてきていた。が、傷のことはさすがにアネモネには内緒にしていた。

「昨日のことにおわれてて。お偉いさんは何かの事情での少女に霧の原因があることを認めたくないらしいの」

ギルド側としても、霧が立ち込める事態の終息を急ぐために下手に人員を割くわけにはいかない理由があるらしい。それについては、レディット自身もコレイダに相談してみたが、沈黙を貫くばかりだった。

難しい事情を貫き通さねばならないのは分かるのだが、事態が事態なだけにさすがに腰が重すぎるのではないかとレディットは心配になる。

「そうか・・・まあ、それはいいんだ。それよりもこれ以上もたついていると状況は厳しくなるから、アネモネさんにも協力してほしいんです」

「何か手立てがあるの？」

「はい。ちょっと乱暴だけど、一つ作戦を思いつきました」

「どんな作戦？」

「えっと、ミステインのいると思われる地域がこの霧のかかっている圏内で、ミステインに近づくにつれ霧が濃くなる事は実証済みです。だから、霧の濃いところに到達したら、そこにはミステインないしは誰かがミステインを連れた人間がいます。当然霧でぬかるんだ道には足跡があるはずなので、僕が能力で地面を凍らせて、足跡を探しやすくします」

地面を薄く凍らせれば足跡がより浮き出て見つけやすくなる。そんな安直な考えしか思いつく猶予もないくらいに事態は差し迫つていた。

この作戦に重要なのは、レディットの体力と時間。

昨日から完全に回復しているとはいえないレディットの体力では、足跡を探し出すまで氷の炎を出し続ける事が可能であるかは厳しい。霧の範囲といつても、アネモネを入れて3人で捜索するには厳し過ぎるといつても良いほどに広い。

ミスティンが移動してしまった事も考へると、悠長な事は言つてられない。

「時間がないので、これ以上は考へられないです。出来れば今にも出発したいのですが」

「分かったわ。十分待つてください。その間に準備を早急に話し合ひを済ませると、アネモネは宿舎のほうにかけていった。

「確かに近づいてる感じはするね・・・」

アネモネがよりいつそう濃くなるきりの中で咳く。

確かにレディットの普通の炎も全然灯せそうにない。氷の炎はむしろ空気中の水分を利用してるので楽だった。これは2つともこれは霧が濃くなつた証拠の一つだ。

最初は彼女も能力者の行動についていけるかを心配していたのだが、戦闘はレディットが担当する事を聞かせると、なんとなくにも安心したようだ。

アネモネは自分いわく、『これ以上普通の人間はいない』というほどの自信のなさで、ギルドもギルドでなぜそんな20歳にも満たないアネモネに任務を託したのか分からなかつた。

「この辺で良いかな・・・」

「もうやるの?」

心配性のミヤビはいつになく怖がりで、強がりを言つ暇もないよう

だ。

「ああ。時間がない。凹んだ部分の光の反射を見やすくなるくらいの薄さの氷なんで、多分5分ぐらいで全部とけると思います。その時間ごとに氷を貼りますので、足跡を見つけたら携帯に連絡を」

「わかつたわ」

「それじゃ・・・」

レディットはうろ覚えの力の残骸を手に集める。薄く広くの感覚を体にねじ込み、冷たい熱を捕まえる。

レディットがそれを解き放つと、わずかに青みがかつた氷が当たり一面に張られる。

「今です！！」

レディットの合図で3人はそれぞれ別の方向に走り出した。

脂汗が滲み、動悸が激しくなる。さすがに能力を使いすぎたようだ。6回目の氷の炎を張つたところで、レディットは少しだけ腰を下ろす。もうかれこれ30分は経とつかといつところ、体力は着実に落ちてきていた。

足跡といつても、わずかに光の反射が周りと違うので、一瞬きらりと光るぐらいの変化しかない。それを探し当てるといつのはいろいろな面で無理があることを、今更になってレディットは思い知る。レディットが少しだけサボりそうになると、視界の隅で光る何かによつて引きとめられる。

「あれは・・・」

近寄つてみると、ぬかるみで少しひびつな形をしているが確かに足跡だった。

減つた体力が少しだけ回復したような気になる。

レディットは携帯を取り出すと、探すのに夢中で出ない一人にメッセージだけ残し、その場に二ーナから受け取った発信機（？）を置いて足跡をたどった。

足跡は直実に続いているが、レディットには気になる事が一つあつ

た。

「足跡が深すぎるのか？」

機能の男たちが残したにしては、その見た目から受ける質量からして合点がいかないほどに足跡が深い。それに追跡を攪乱するためか、不規則に足跡がつけてある。

レディットが倒した男のうちの一人を担いでもう一人の男がきたならこれくらい深くなるのは分かるが、ミステインも含め一人を運ぶには、さすがにその男では非力すぎる気もしたのだ。

運べる可能性があるとすれば、それは能力を持つていること。

だが能力者というのは、見るものから見れば一瞬で見抜ける。レディットもそれが出来るよう昔誰かに教え込まれた記憶がある。

「誰だったかな？ロレントの人だったか、いやもつと前だな・・・」
レディットは一人寂しく四苦八苦するが、全く答えが出る気がしない。そんなに生きてもいのに物忘れがひどくなつた事に、レディットは少しだけ悲しくなる。

そんな無駄な事で気を紛らわせながら足を進めていると、草木の生い茂つていらない場所に出る。

そこにいたのは

「ミステイン！？」

森の中にあるはずのない奇妙な装置にミステインがつながっていた。助けようと走り出しが、当然黙つていらない物が一人、木の陰から現れる。

「お前か・・・」

レディットが研究所前で戦つたのとは違う男だが、背格好は全く一緒だった。

男はレディットが来る事はある程度予想していたのか、すでにバトルグローブをつけて警棒も持ち、臨戦態勢に入つていて。それを見てレディットも腰から刀を引き抜く。

「その少女を返してもらう事はできませんか？あなたの方の目的は知りませんが、こちらとしても穩便に引き渡してもらえたと幸いです」

無理とわかりつつもレディットは交渉をしかける。

男は少しだけ考えるような動作をするが、すぐに口を開く。

「それはこちらとて同じ事。仲間を一人やられた」

それだけ云うと、男は足を一步引いて完全に構えた。レディットもそれを見ると、ため息を一つ吐いてから刀の刃を男に

向けて腰を低くする。

「残念。闘いたくはなかったのが・・・」

レディットがそう呟くと、2人の間の空気が張り詰める。まるで戦闘開始のゴングでも待っているかのように、嵐の前の静けさがしかれる。

「力ずくでも返してもらうぞ！」

レディットのその一言が開始の合図となり、2人同時に地面をける。単純な身体能力ではレディットが上。男より早く間合いを取ると、刀を引き抜いて先手必勝の一撃を打ち込む。

男も黙つておらず警棒をかざす。レディットの一撃をギリギリで防ぐと、どこからともなく攻撃がレディットの左腕に叩き込まれる。

「クツ・・・・・」

レディットは間合いを取ると、驚きの事実に目を見開く。「あの男と同じ能力だと！？」

男は何も反応を見せないが、レディットは確かに見ていた。今の男が持つている、昨日の男と同じ警棒。使っている人間は癖に違いがあるため違う人間であるのは明らかなのだが、持っている武器が何股にも分かれている。

これは昨日も見たはずの能力だった。世の中に同じ能力は存在しないはず。なのに同じような能力が生まれる。いくつかの可能性がレディットの頭の中に浮かぶが、とある可能性ばかりがよぎった。

レディットの逡巡を見抜き、何か知られたくないことでもあるかのように男が攻撃を仕掛けてくる。

「クソッ、どういうことだ！？」

レディットも軽々とかわすが、男の二股警棒が飛んでくる。一度見

た能力なのでかわせないこともないが、後ろどびで衝撃を殺しつつレディットはあえて見た。

（・・・・・）

すると、男の手の部分の一つだけおかしな所に気づく。だがレディットが見とれている間に男の一撃が傷口のある腹部に叩き込まれる。

「ガツ・・・・・！」

思わずレディットの口から苦痛の声が漏れ出す。どうやらコースが閉じてくれた傷口が開いてしまったようで、コートに血が滲んでいる。

「レディット！！」

レディットがわき腹を抱えていると、マーキングをたどりてやつてきたミヤビが叫ぶ。

ちょうど悪いタイミングで来てしまった。今度こそ入院させられる事を覚悟しつつも、レディットは手に力を込める。

「大丈夫！？ 傷口が・・・」

「問題ないよ。ほら」

レディットがコートのすそをひらくと、傷口は見事に凍りついている。

勝機と見た男も、2人相手ではムリだと踏んだのか襲つてはこなかつた。

つづづくミヤビが能力者に見られて良かつたと安心しつつも、レディットは立ち上がる。

手負いのまま闘うのは厳しいが、レディットにはまだ氷の炎が残されている。

「すまないな。続きといひづじやないか

男に向かい刀の先を真つ直ぐに向ける。強がりだと分かっていても、まともに動けない事を相手に悟られてしまつては負けが決まったようなものだ。

男もさすがにレディットの強さに敬意を表したのか、これまたサブ

マシンガンを取り出す。「これも昨日の男と同じ物だとすれば、何股にも分かれて銃弾を撃つてくるはずだ。

レディットは傷口を押さえつつ男の懷にもぐりこむと、峰打ちで警棒を弾き飛ばす。

男自身も警棒を囮にして、銃口をレディットの頭につきたてる。

（今だ！）

レディットは傷口から手を離す。その瞬間に氷が解けて傷口から血が吹き出るが、それをいとわず男の銃を握る手をつかむ。

「その能力の謎は解けたぞ！！」

そういうと、レディットは男の指を銃の引き金と共に凍らせる。それに続き蹴りでその銃を壊す。

「・・・・！」

男も驚いたような表情を見せると、今度は自分から飛び退いた。レディットの予想通りかつ、最初からレディットの予感が当たつていたことを思い知る。

「やはりな・・・あなたは能力者ではないだろ？？」

「・・・・！」

男がレディットの一言に分かりやすく反応する。

「おそらくあなたたちの使っている武器自体に能力が刻まれている。そうだろう？ そんな奇術が存在していたとは驚いた。引き金が二つあつたなんておもわ・・・」

そこまでレディットが口にした瞬間。目の前がぐらりと揺れて、思わずひざをつく。

「レディット！ どうしたの！？」

敵でありながら、男も驚いたような顔をしている。

レディットは手に力を込めるが、全く氷の炎も普通の炎も出ない。どうやら炎を使い果たして体力が限界まで来てしまったようだ。

「ここまでか・・・」

レディットは一言呟く。傍から見れば完全に諦めたような口ぶりだが、レディットは諦めてはいない。

膝を突いた姿勢のまま姿勢を更に低くすると、刀を鞘に納めたままかまえる。日本の剣術にある『イアイヌキ』という最速の剣。最後の一撃としてレディットは勝負を覚悟したのだ。

男はそれに気づかず悠々と落ちた警棒をとりにいくと、調子を確かめてから、ゆっくりと歩いてくる。

くしくも同じ間合いの距離をもつ一人は間合いの一歩手前で立ち止まる。

「…………」

静寂。

木々や小鳥たちも黙つているよつたその言葉だけが似合つ状況で、先に動き出したのは

「彼女は渡せない！！」

男だった。初めて自分から声を発すると、警棒を振り下ろしてくる。レディットもそれを確認すると同時に、刀をマックスのスピードで抜く。最速と呼べるまで速くなつた鋼の刃は、『ルートサイド分岐』の能力しか持つてない警棒などいとも簡単に真つ二つにすると、男の体に見事に傷をつけて吹き飛ばした。

「ふう…………」

残された力さえ使つてしまつたレディットは、深くため息をつくとその場に寝転がる。

ちょうど男が動かなくなつたタイミングで、アネモネが追いついてくる。

「レディット君大丈夫！？」

ミヤビと一人で駆け寄られた物だから、レディットはさすがに飛び退く。

「動いちゃダメよ！――」

「僕は大丈夫ですから。それよりもミステインを……」

アネモネはレディットの一言で思い出したかのように、ミヤビの入つていたものほどではないがそれでも十分奇妙な装置に取り押さえられてミステインに近づく。

手足を固定しているベルトのよつた物をはずすと、ミステインをその場にねかせた。

「ミステイン？ 大丈夫か？」

「ん・・・・」

レディットが少しだけ頬を叩くと、ミステインはやつと目を覚ます。

「お兄さんたち？ あたしは・・・」

「覚えてるのか？」

「ちょっとだけだけ・・・」

ミステインはまるで今まで眠っていたかのよつに目を擦りながら答える。

だがそこにはいつもの元気は見られず、心なしか悲しそうだ。

「男の人が一人来て、『人口能力の定期検査だ』って。あたしは良く分からぬし、目が覚めても何も出来なかつたの」

「人口能力！？」

レディットは思わず声を荒げる。

「キャッ！ どうしたの？」

アネモネも驚いたのか過剰に反応すると、首をかしげる。

「あ、すみません・・・あの男が使つていたのもそれだつたので」「人工的に能力を作るなんてことがあるの？」

「分かりません。でもおそらく僕たちのしらないとこりで何かあるみたいですね」

今は考へても結論が出ないと悟ると、レディットはミステインに向き直つた。

「今はミステインのこれからのことを考えないと・・・」

レディットがそういう瞬間、ミステインは何かを察したようにびくりと肩を震わせる。頑なに保護を拒むミステインのことだから、無理やりな形になるとはおもうが狙われている子供を放つては置けない。

だからこそレディットは、ミステインの肩を叩いた。

「鬼ごっこは僕の勝ちだ。だから君の望む形でいい。孤児院でも、

ギルドの施設でも、何でもかまわないから君は保護を受けるんだ」約束した。ミステインの頭の中にもこの前にした約束は覚えていた。

「考え方させて・・・」

ミステインはうつむき加減で答える。それを見たレティットは微笑む。

「ああ。それでいい。だけどその前に・・・」

レティットはポケットから一つだけ装置を取り出ると、ミステインの着ている服の襟の中につける。

その装置のスイッチを入れると、霧がみるみるうちに晴れしていく。

「それは？」

何だか見覚えのある装置に、ミヤビが興味心身に食いついてくる。「これは僕の炎を封じていた能力制御装置を改造してミステイン用にしたものだよ。支部長が即席で作ってくれたんだ」

「へえ〜」

アネモネも感嘆の声を上げる。「能力者つてす、いいのね・・・」ミステインは初めてみるとおりつ青い空を、おとなしくじっと眺めていた。

危急存亡の青空少女（後書き）

どうも！お久しぶりとなりました、レイです。
ミスティン編はこれで解決となります、完結は後2・3話後となります。

お待たせしてしまつ事申し訳ないのですが、勘弁してください。

次回の投稿は12月の28日となっております。
そのときにまたお会いしましよう。

もう一作も投稿しております。

บาย

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2258v/>

No,Fate

2011年11月17日19時17分発行